市浦村埋蔵文化財調査報告書 第12集

岩井・大沼遺跡

～県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告～

（大沼全景：左奥には日本海と権現崎を望む。）

青森県市浦村教育委員会

航空写真

調査風景

ＩＡ地区　完掘状況

復元土器の集合写真

土版

黒曜石（石鏃・石錐）

黒曜石

玉材

赤鉄鉱（ベンガラ）

序　文

市浦村では現在，「安藤文化のふるさと」をキャッチフレーズに歴史風土・文化を活かした観光の村づくりを目指しています。また，文化財行政の重要な施策として平成３年度から始まった中世港湾都市・十三湊遺跡の発掘調査は現在も継続中であり，調査・研究による歴史の解明だけでなく，史跡指定を目指した取り組みも行っています。

さて，本報告は市浦村教育委員会が平成11・12年度に実施した岩井・大沼遺跡の発掘調査報告書であります。調査によって，岩井・大沼遺跡が縄文晩期末葉を中心とした遺跡であることが分かりました。さらに大沼に面した緩斜面に縄文人たちがゴミを捨てたことが分かり，縄文人の生活の一端を伺い知ることができました。

本書が埋蔵文化財の保護と活用に役立つだけでなく，地域の歴史の教材として利用していただければ，幸いと存じます。

また，調査に際しまして，御指導・御助言を頂きました諸先生には心から感謝申し上げる次第です。

平成13年３月

市浦村教育委員会

教育長　木　村　義　光

例　言

1　本書は青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81－１内に所在する岩井・大沼遺跡の平成11年度試掘調査及び平成12年度本調査の報告書である。

2　本書の執筆・編集は榊原滋高（市浦村教育委員会学芸員）が行い，遺物の復原・実測図の整理・製図，写真撮影は長利豪美（調査補助員）を中心に佐藤美矢子・丁子谷瑞穂・一戸勝子・伊藤美枝子・葛西節子・成田ヨシエ（地元作業員）で行った。

3　石器の石材鑑定（肉眼観察）は山口義伸氏（県環境生活部県史編さん室総括主幹）にお願いして，御教示頂いた。

4　本書を作成するに当り，以下の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げる次第です（敬称略）。

村越　潔，藤沼邦彦，関根達人，永嶋　豊，三浦圭介，工藤　大・鈴木和子・工藤　忍，佐藤　仁，工藤清泰，佐々木浩一，山口義伸

5　なお，記述等に誤りがあれば，すべて編者の責任である。

目　次

序文

例言

第Ⅰ章　調査に至る経緯……4

第Ⅱ章　遺跡の環境と立地……6

第Ⅲ章　調査の経過と方法……10

第Ⅳ章　本調査の成果……14

第Ⅴ章　まとめ……44

第Ⅰ章　調査に至る経緯

市浦村では，県営大沼地区水環境整備事業の一環として，平成８年度に大沼一帯の護岸工事及び公園整備を行う計画が持ち上がる。平成９年度には事前に大沼周辺の測量調査を行い，平成10年度には土木工事を実際に着工することとなった。そこで，市浦村建設課より開発に伴う埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会が市浦村教育委員会にあった。

「市浦村史」によると，遺跡名は小字名による「岩井遺跡」という名称が与えられている。しかし，小字名の岩井地区は遺跡の範囲よりもずっと広いこと。また，遺跡の範囲は大沼（湖沼）に面した場所に限定されており，一般に地元では「大沼遺跡」と呼び親しまれているため，「岩井・大沼遺跡」とした。

埋蔵文化財包蔵地として知られる本遺跡は，近年の牧場地化を目的とした大規模な開発行為によって地形改変の影響を強く受けているため，遺跡が消滅している可能性が極めて高いことが予想されていた。

しかし，市浦村教育委員会では遺跡保護の立場として，本遺跡の年代や遺跡範囲の確認及び依存状況を明らかにする必要性があった。そこで，青森県教育庁文化課の指導のもと，工事主体者である青森県農林部・北農村整備事務所と地元市浦村建設課を交えて協議を行った結果，平成11年度に試掘調査を実施する運びとなった。そして，平成10年５月28日付けで北農村整備事務所より正式に発掘の届出が提出された。試掘調査はトレンチ調査（テストピット）を広い範囲で行うことを目的に，平成11年５月13日から実施し，平成11年６月23日までに完了した。

そして，試掘調査の結果，第Ⅰ地区とした大沼南岸の国道339号線付近一帯から縄文時代の土器片・石器剥片が多量に出土することが分かった。これを踏まえて再度協議した結果，管理用道路にかかる約900㎡の本調査を実施する運びとなり，平成12年４月26日付けで北農村整備事務所と発掘調査の委託契約を結び，本調査を行うこととなった。本調査は平成12年７月３日から発掘作業を実施し，平成12年７月28日には発掘調査が終了した。

調査要項

１．調査目的

県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

２．調査期間

平成11年５月13日～平成11年６月23日（試掘調査）

平成12年７月３日～平成12年７月28日（本調査）

３．遺跡名及び所在地

岩井・大沼遺跡　青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81－１内

4．調査面積

試掘調査　200㎡

本 調 査　900㎡

5．調査委託者

青森県農林部（青森県北農村整備事務所）

6．調査主体

市浦村

7．調査担当者

市浦村教育委員会　教 育 長　木村義光

教育次長　白川隆治（安藤の里振興室長兼務）

学 芸 員　榊原滋高

調査補助員　長利豪美

調査作業員　（平成11年度試掘調査）

佐藤美矢子，山田紀子，葛西節子，一戸勝子，伊藤美枝子，柏谷祐美子，成田忠則，成田ヨシエ

（平成12年度本調査）

佐藤美矢子，山田紀子，葛西節子，一戸勝子，伊藤美枝子，柏谷祐美子，成田忠則，成田ヨシエ，丁子谷瑞穂，今　由里子，葛西テサ子，山田サミ，工藤チエ，三和　淑，秋田谷　久

第Ⅱ章　遺跡の環境と立地

市浦村は青森県の西北部，津軽半島の日本海側に面した場所に位置している。また，ここには津軽平野を北上する岩木川の流れが日本海へと注ぐところに十三湖という潟湖（ラグーン）が形成されている。このため，十三湖一帯の地域は岩木川を通じて結ばれる河川交通の要衝としてだけでなく，日本海交易ルートの接点として縄文時代以来，人や物資のさまざまな交流が行われた地域と考えられる（第１図)。

十三湖の西側には，２列の浜堤状砂丘が南北に発達して伸びており，西側の七里長浜は日本海の荒波を直接受け，防波堤の役割を果している。一方，東側砂丘は十三湖に接している。この東側砂丘上には現在も十三集落が形成されており，古くは鎌倉時代から室町時代にかけて「十三湊（とさみなと）」と呼ばれた大規模な港湾機能を持った港町が栄えた。また，砂丘間には前潟（まえかた）・セバト沼・明神沼（みょうじんぬま）という砂丘間湖沼が発達しており，中世期には日本海へと続く水路の役割を果していたと考えられる。そして，現在では十三集落南端の砂丘を境に車力村と接している。

十三湖北岸には，板割山（いたわりやま）（標高178m)，四ツ滝山（よつたきやま）（標高669m)，木無岳（きなしだけ）（標高587m）といった中山山脈が連なり，北には小泊村・三厩村・今別町，東には蟹田町・中里町と境を接している。相内川（あいうちがわ）・唐川（からかわ）・磯松川（いそまつがわ）といった主要河川はこうした中山山脈の山々から発達したものである。磯松川は直接日本海へ流れ込み，唐川は五月女萢原（そとめやちはら）の砂帯を経由して，十三湖北岸に流れ着く。相内川はこれらの河川の中で最も大きく，太田川（おおたがわ）・桂川（かつらがわ）・山王川（さんのうがわ）が相内集落付近で合流したもので，十三湖北岸に流入し，沖積地を形成している。

岩井・大沼遺跡は十三湖北岸にあり，四ツ滝山から派生した標高10～20m前後の洪積段丘上に立地している（第２図)。この段丘上には大小の湖沼群が点在しており，その中でも東西800m，南北400mを有する最大規模の「大沼」と呼ばれる湖沼がある。これまで，大沼一帯には縄文時代の遺物が広範囲に散布することが知られており，大沼北岸から東岸にかけて，本遺跡が埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登録されている。現地は村営岩井牧場として起伏のある台地が牧草地として利用されている現状である。

しかし，地元の古老によれば，かつて大沼一帯は樹木が鬱蒼とした場所で，沼地に近づけない程であったと聞く。昭和43年に牧場地を目的とした大沼周辺の開発が急激に進み，起伏のある自然地形をならして大規模に造成・整地している。その際に縄文時代の遺物が多く出土したため，遺跡として周知されたという皮肉な結果となっている。現在では遺跡を周知させる遺跡案内板が設置されているものの，今回の発掘調査が実施されるまでは遺跡の実態が全く不明と言わざるを得ない状況であった。ちなみに，「市浦村史」によれば，本遺跡はかつて縄文時代中期土器，土師器が出土したとして知られているが，そうした記録類や出土遺物等も全く残されていない。しかし，市浦村教育委員会に寄託されている資料の中には，「岩井遺跡出土」と記載された縄文晩期の粗製土器のほか，写真１で示したように縄文後期の十腰内Ⅰ式に相当する資料が保管されており，参考資料となろう。

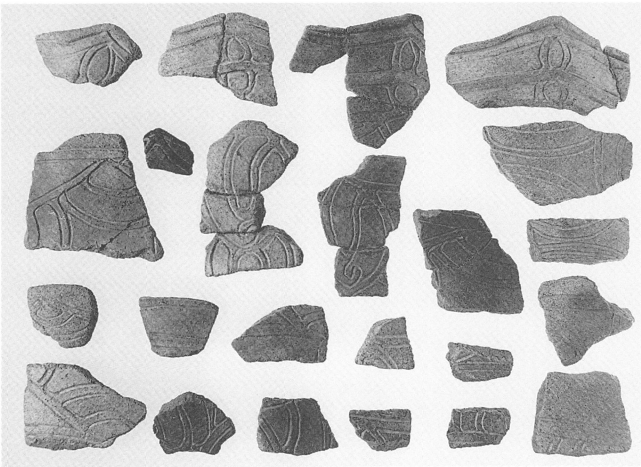
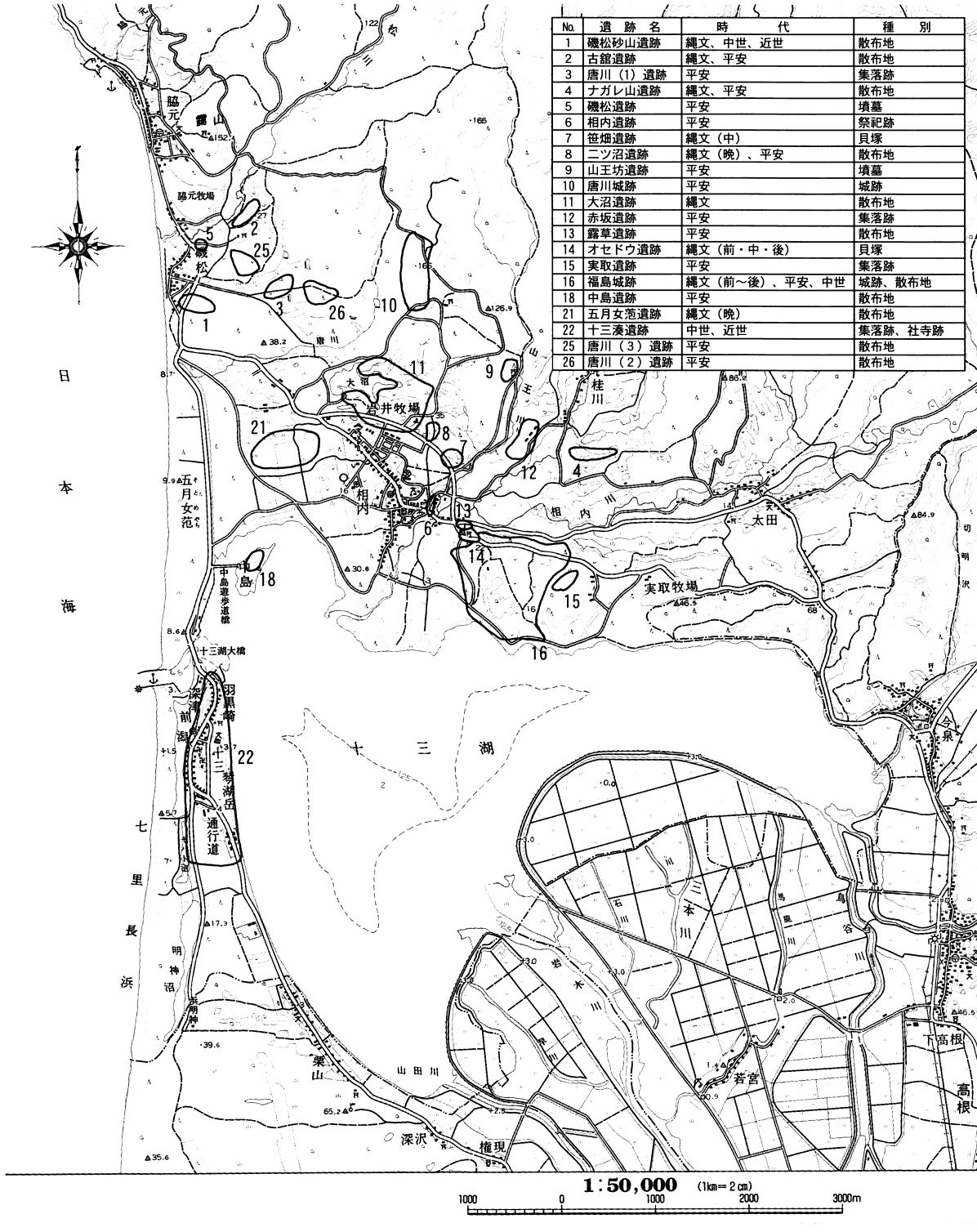


写真１

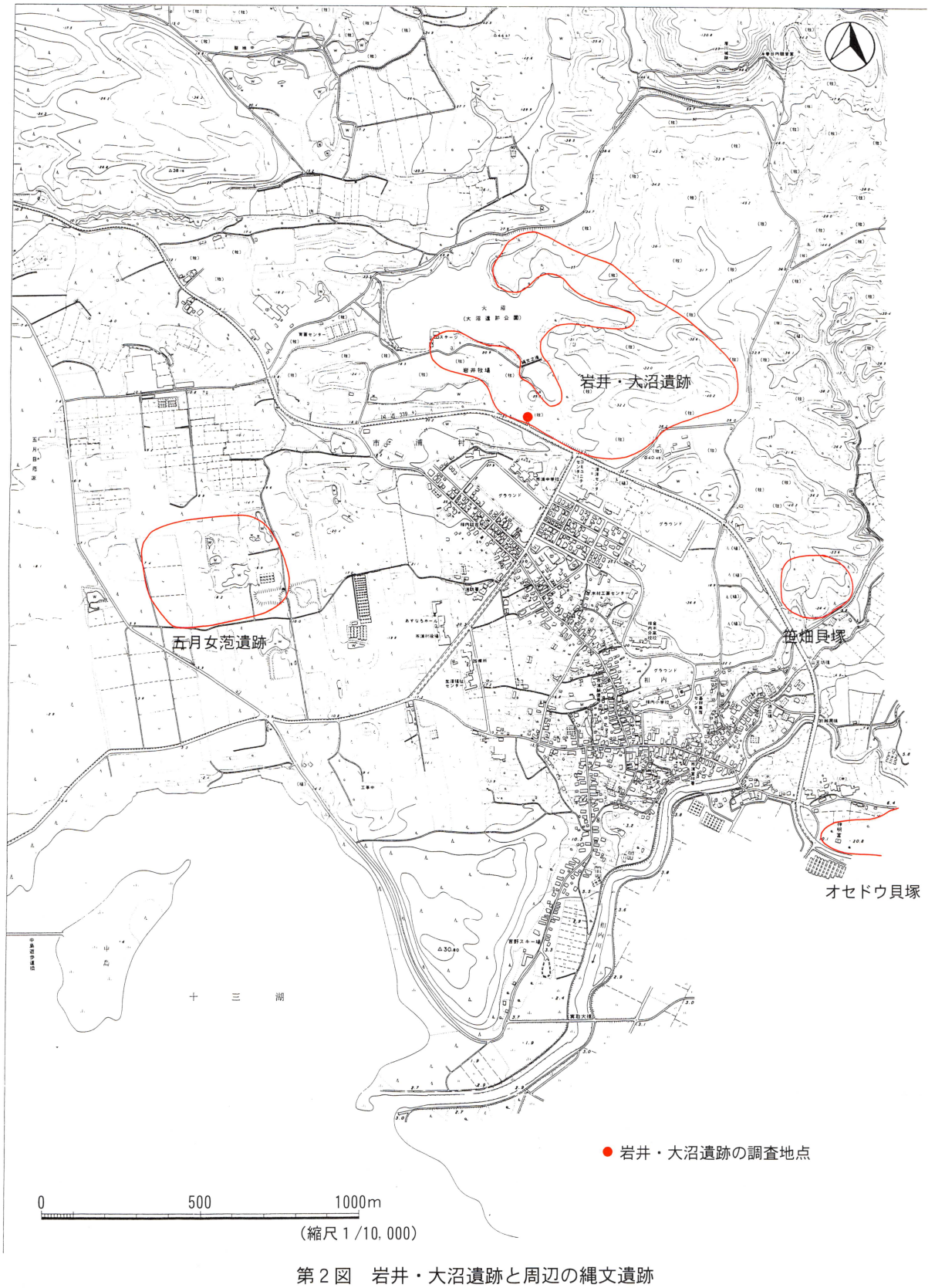
また，周辺に所在する遺跡に目を向けてみると，縄文時代に関する遺跡では縄文前期・中期のオセドウ貝塚，笹畑貝塚が知られている。本遺跡から直線距離で南東に約１㎞のところに笹畑貝塚（標高25m前後）がある。さらに，笹畑貝塚から南東に約0.8㎞のところにオセドウ貝塚（標高20m前後）が続く。これらの貝塚はそれぞれ丘陵先端部に形成される特徴がある。特にオセドウ貝塚は研究史的にも古く，大正12年にはオセドウ貝塚における人骨の発見，その後，大正14年には山内清男による層位学的な発掘によって円筒土器の編年研究が行われるなど，研究史的にも非常に有名な遺跡である。近年では平成元年～二年にかけてオセドウ貝塚の発掘調査が実施され，縄文前期～後期及び古代では11世紀代，中世では15世紀代の複合遺跡であることが明らかとなっている。また，縄文前期・中期ではヤマトシジミを主体とした貝塚で，骨角器（鹿製のヘアピン）なども出土している。ただし，縄文晩期の遺物は全く出土していない。

また，本遺跡と同じ段丘の西縁には，直線距離にして約１㎞のところに五月女(そとめ)萢(やち)遺跡がある。同報告書によれば，五月女萢遺跡は新期砂丘砂に覆われており，その下層に当たる黒色土層から遺物包含層が確認されている。縄文時代中・後期の遺物がごく少量含まれているほかは，縄文時代晩期前葉～後葉に相当する土器群（大洞Ｂ式～大洞Ａ式）が多量に発見されている。五月女萢遺跡周辺の標高は４～６ｍほどで，一帯は防風林のほか，一部水田として開墾整地されている。しかし，近年では土砂採取によって，地形が大きく替わりつつあり，環境の変化が著しい状況である。ところで，五月女萢遺跡の終末を示す土器型式は大洞Ａ式までであり，後述する本遺跡では縄文晩期末葉の大洞Ａ′式を主体とした時期であることから，集落の移動による両遺跡の連続性を伺うことができるだけでなく，土器変遷を知る上でも貴重なものとなるであろう。



No.	遺跡名	時代	種別
1	磯松砂山遺跡	縄文、中世、近世	散布地
2	古舘遺跡	縄文、平安	散布地
3	唐川（1）遺跡	平安	集落跡
4	ナガレ山遺跡	縄文、平安	散布地
5	磯松遺跡	平安	墳墓
6	相内遺跡	平安	祭祀跡
7	笹畑遺跡	縄文（中）	貝塚
8	二ツ沼遺跡	縄文（晩）、平安	散布地
9	山王坊遺跡	平安	墳墓
10	唐川城跡	平安	城跡
11	大沼遺跡	縄文	散布地
12	赤坂遺跡	平安	集落跡
13	露草遺跡	平安	散布地
14	オセドウ遺跡	縄文（前・中・後）	貝塚
15	実取遺跡	平安	集落跡
16	福島城跡	縄文（前～後）、平安、中世	城跡、散布地
18	中島遺跡	平安	散布地
21	五月女萢遺跡	縄文（晩）	散布地
22	十三湊遺跡	中世、近世	集落跡、社寺跡
25	唐川（3）遺跡	平安	散布地
26	唐川（2）遺跡	平安	散布地

第１図　市浦村の遺跡地図



第２図　岩井・大沼遺跡と周辺の縄文遺跡

第Ⅲ章　調査の経過と方法

（平成11年度試掘調査）

発掘調査が必要となった箇所は大きく２地点に分かれる。それぞれ第Ⅰ・第Ⅱ地区と呼称する（第３図）。第Ⅰ地区は大沼南岸の地点であり，国道339号線から大沼に伸びる管理用道路と駐車場の設置を予定している場所であった。発掘調査は２ｍ×２ｍのトレンチを25箇所設け，約100㎡を実施した（第４図）。

第Ⅱ地区は大沼北岸で南西方向に張り出した丘陵上に当たる。この地区には遊歩道や東屋の建設を予定している場所である。発掘調査は２ｍ×２ｍのトレンチを22箇所設け，約88㎡を実施した（第５図）。

調査は５月13日に第Ⅰ地区から実施した。調査は任意の地点を設定し，掘り進めていった。後日，調査地点は平板測量によって，1／500の縮尺で平面図に地点を記入していった。各トレンチでは写真撮影と観察表を作成した。なお，標高は市浦村役場前にある三角点から調査区まで，水準測量により求めた。

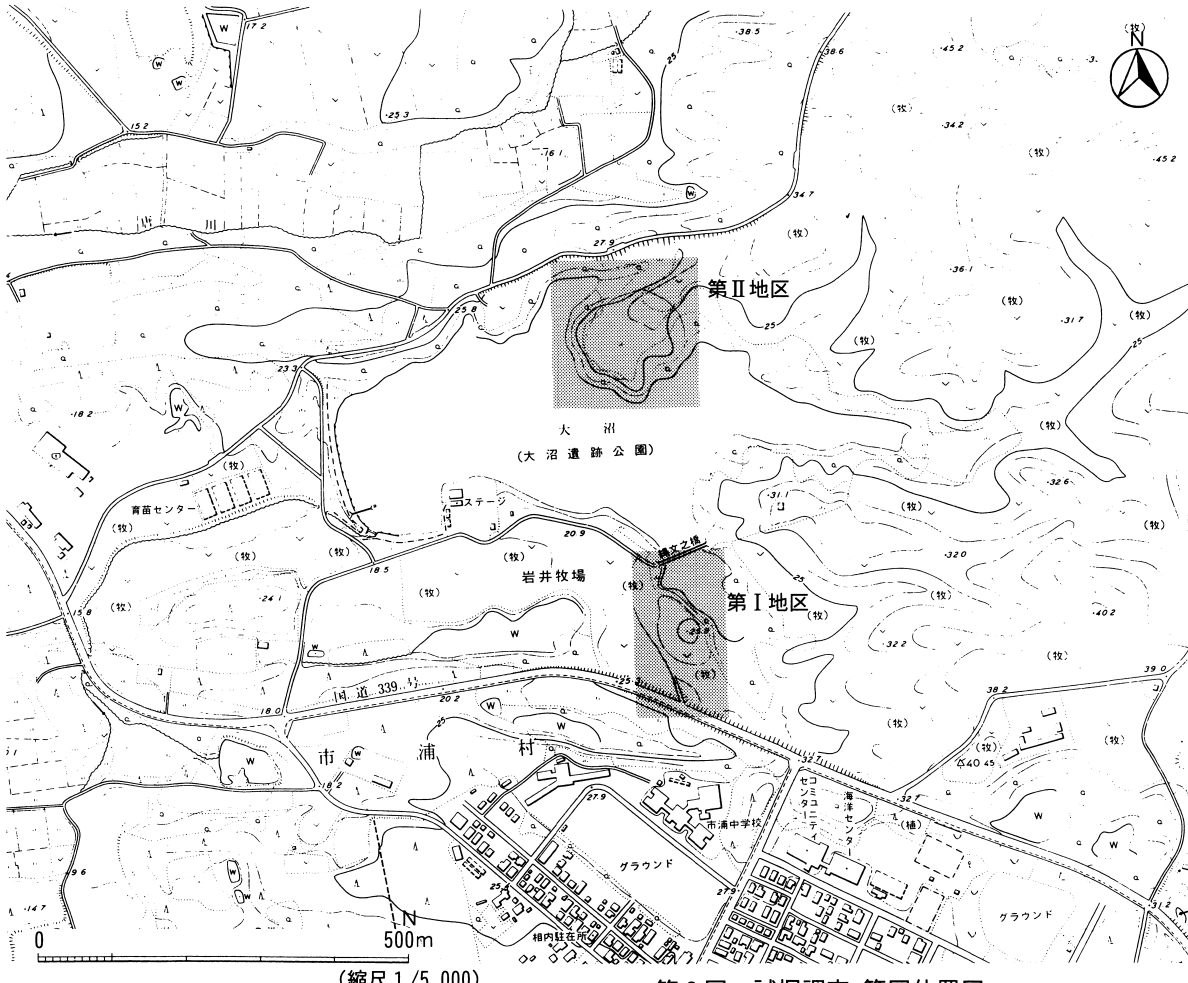
第Ⅰ地区では調査を進めていくうちに，№1～7・13トレンチで牧草に覆われている地表面を剥ぐと地山面であるローム層がすぐに露出し，かなりの土地改変によって，削り取られている状況が明らかとなった。

しかし，５月18日には№16トレンチで，初めて縄文土器４点が確認された。そこで，翌日には№16トレンチを４ｍ×４ｍに拡張して遺構確認を実施した。その結果，№16トレンチから倒木痕を確認し，縄文土器や石器剥片も多数出土した。さらに，５月26日には№24トレンチから縄文晩期の土器や石器剥片が出土した。

一方，５月26日から大沼北岸の第Ⅱ地区の調査を開始した。調査は任意に22箇所のトレンチ調査区を設定したが，全く遺構・遺物を確認することができなかった。

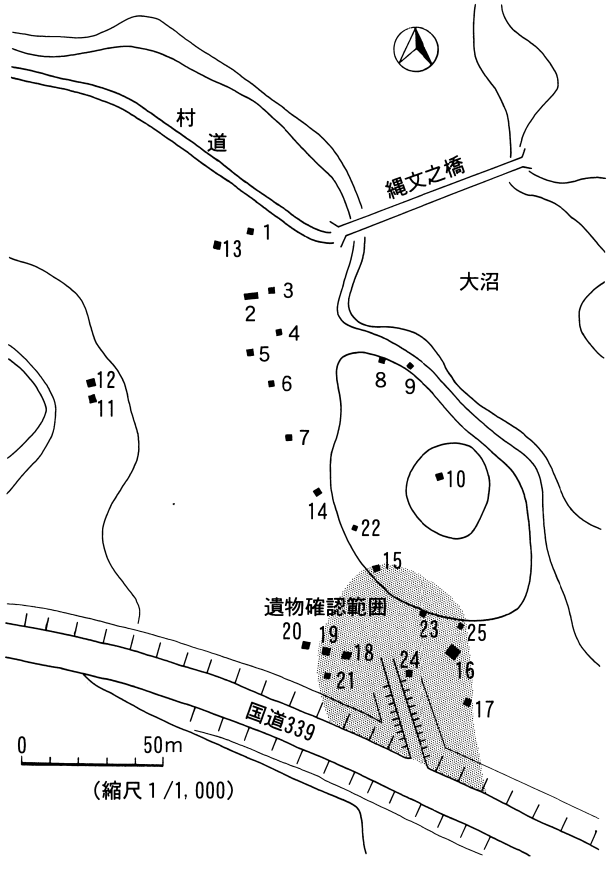
調査地点は第Ⅰ地区と同様に平板測量によって，1／500の縮尺で平面図に地点を記入していった。各トレンチでは写真撮影と観察表を作成している。第Ⅱ地区の調査は６月３日に終了した。埋め戻しは人力によって行った。

試掘調査の結果，第Ⅰ地区の国道339号線に沿った地点（№15～№20）において，遺物を広い範囲に渡って確認することができた（第４図）。そこで，調査の後半には工事に係る範囲を２箇所，約900㎡の新たな予備調査を行った。ここで，道路を挟んで西側をＡ地区，反対の東側をＢ地区と呼称することとした（第６図）。調査の結果，Ａ地区は地形が大沼に向かって緩斜面になっており，斜面上に多くの土器片・石器剥片が出土していることから，縄文晩期の土器捨て場である可能性が考えられた。出土した遺物は可能な限り取り上げたが，来年度の本格的な発掘調査に持ち越すこととなった。



(縮尺1/5,000)

第3図　試掘調査 範囲位置図



(縮尺1/1,000)

第4図　試掘調査 第Ⅰ地区 トレンチ位置図

調査日誌

5／13　調査開始。機材の搬入。第Ⅰ地区No.1～No.7トレンチを調査。

5／14　第Ⅰ地区No.8～No.11トレンチを調査。

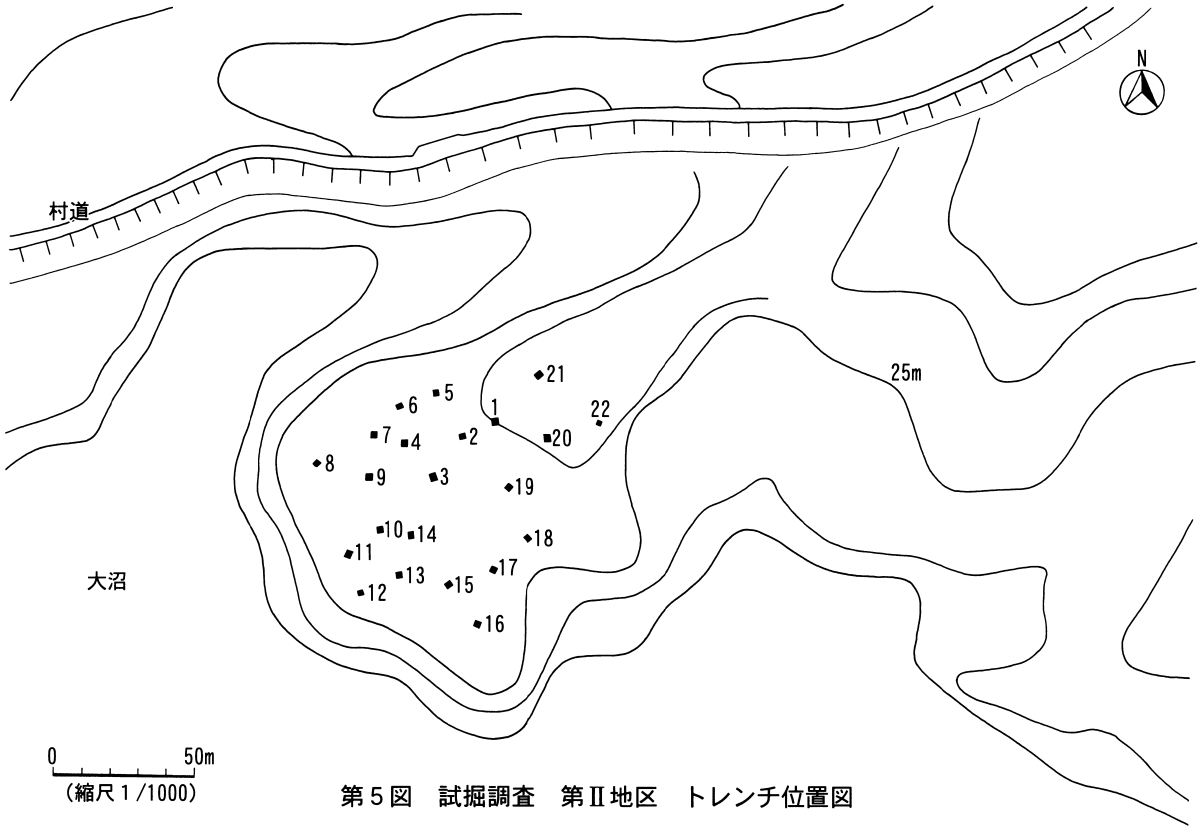
5／17　第Ⅰ地区No.12～No.15トレンチを調査。各トレンチの写真撮影と観察表の作成。

5／18　第Ⅰ地区No.16～No.17トレンチを調査。No.16トレンチより，縄文土器が4点出土。

5／19　第Ⅰ地区No.16トレンチを4m×4mに拡張。午後，雨で作業中止。

5／20　第Ⅰ地区No.15・16トレンチの精査。縄文土器も多数出土。

5／21　第Ⅰ地区No.18～No.21トレンチを調査。No.18より縄文土器や石器剥片



第５図　試掘調査　第Ⅱ地区　トレンチ位置図

が多数出土。

5／24　第Ⅰ地区No.18･20･21トレンチの精査。

5／25　雨天のため作業中止。

5／26　第Ⅰ地区No.21トレンチの精査。第Ⅰ地区No.22～No.24トレンチを調査する。No.24トレンチから縄文土器や石器剥片が検出された。
第Ⅱ地区の調査開始。第Ⅱ地区No.１～No.４トレンチを調査。

5／27　雨天のため作業中止。

5／28　午前中は雨。午後から作業開始。

5／31　第Ⅰ地区No.14から順次，写真撮影・観察表の作成を行う。第Ⅰ地区No.25トレンチの調査。

6／1　第Ⅰ地区No.21･25トレンチの写真撮影。

6／2　第Ⅱ地区でトラバース測量による杭打ち作業と各トレンチの平板測量。

6／3　第Ⅱ地区の各トレンチを平板測量する。第Ⅱ地区の埋め戻し作業。

6／7　第Ⅰ地区（A・B地区に細別）の重機による表土掘削。

6／8　第Ⅰ－A地区の粗掘り作業。縄文土器・石器剥片が多量に出土。

6／9　第Ⅰ－A地区と第Ⅰ－B地区の杭打ち作業。第Ⅰ－B地区の粗掘り作業。

6／10　第Ⅰ－B地区の粗掘り作業。縄文土器・石器剥片が多量に出土。

6／11　第Ⅰ－B地区の粗掘り作業。

6／14　第Ⅰ－A地区の遺物を平板（1／40）で取り上げる。第Ⅰ－B地区の杭打ち作業と遺物を平板で取り上げる。

6／15～23　第Ⅰ－A地区と第Ⅰ－B地区の遺物を平板で取り上げる。

6／23　遺物出土状態の写真撮影と実測作業，遺物の取り上げ作業。
調査終了。

（平成12年度本調査）

本調査は管理用道路の建設工事に係る約900㎡（予備調査個所）の発掘調査を実施することになった。Ⅰ－Ａ区では特に遺物の出土が多く，中央に観察用の畦を設けて層位を観察しながら，遺物の検出を行い，適宜出土状態の写真撮影を行った。出土した遺物は平板によって，40分の１の縮尺で地点を落としながら取り上げていった。なお，風倒木痕は９箇所見られたものの，遺構は全く検出されなかった。

調査日誌

７月３日（月）曇り

発掘機材の搬入などを行い，発掘の準備をする。

７月４日（火）晴れ

Ⅰ－Ａ区の精査及び遺構・遺物の検出を行う。さらに，昨年度残したⅠ－Ｂ区の粗掘り作業を行う。

７月６日（木）晴れ

Ⅰ－Ａ区では出土遺物の精査と写真撮影。Ⅰ－Ｂ区では検出された風倒木痕の完掘及び写真撮影をする。Ⅰ－Ｂ区の中央部で縄文土器がまとまって出土したが，遺構は見られない。

７月７日（金）晴れ

Ⅰ－Ａ区では出土遺物の取り上げ作業をする。Ⅰ－Ｂ区では等高線図を作成する。Ⅰ－Ｂ区の調査終了。

７月10日（月）晴れ～７月25日（火）雨

この間，Ⅰ－Ａ区が縄文時代晩期の土器捨て場であったことが判明した。遺構はなく，風倒木痕が検出されただけであった。そのため，観察用の畦を残しながら出土遺物の検出，精査，写真撮影及び遺物の取り上げ作業を繰り返し行う。

７月26日（木）曇り時々雨

前日の大雨のため，Ⅰ－Ａ区の半分以上が水没したため，午前中は水を掻き出す作業を行う。午後からは水没した遺物の取り上げ作業や土層観察のため調査区壁の精査・写真撮影及びⅠ－Ａ区の等高線図を作成する。

７月27日（木）晴れ

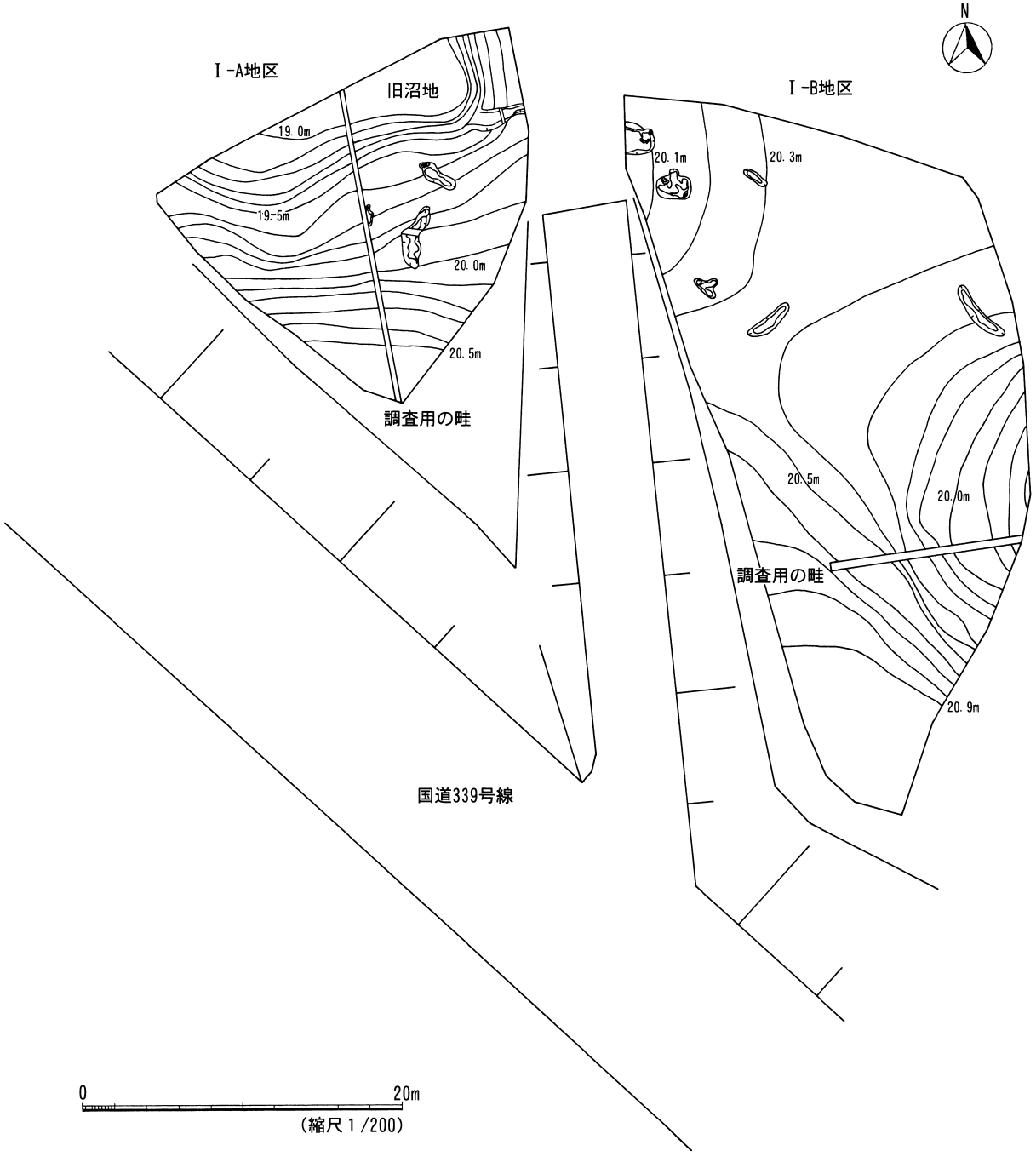
トータルステーションによる国土座標の測定。Ⅰ－Ａ区の完掘精査及び全景写真の撮影。

７月28日（金）晴れ

調査区セクション図の作成及び発掘機材の搬出を行う。発掘調査の終了。

第Ⅳ章　本調査の成果

ここでは平成12年度に実施した本調査の成果について報告する。本調査では前年度の試掘調査の結果を踏まえて，大沼南岸の第Ⅰ地区とした地点を実施した。さらに第Ⅰ地区は管理用道路を挟んで，西側をＡ地区，東側をＢ地区に分けて呼称した（第６図)。



第６図　本調査　第Ⅰ地区　調査位置図

第１節　遺跡内の地形と基本層序

Ａ地区は南側の標高が20.5mと最も高く，南から北に向かって緩やかに下る緩斜面（谷地形）となり，旧湖沼（標高19.0m）に行き着く。旧湖沼は湿地となっており，雨になると湧水が激しくなる。ここでは風倒木痕が３箇所確認された。

Ｂ地区もやはり南側の標高が20.9mと最も高くなる。また，北側に狭い平地が見られるが，ここから西側と東側に向かって緩やかに下る緩斜面（谷地形）となる。ここでも風倒木痕が６箇所確認された。

Ｂ地区は牧場地化による掘削の影響を大きく受けた為か，撹乱も多く，良好な状態の遺物包含層ではなかった。しかし，Ａ地区では国道339号線直下に当たる南半部のところからは，掘削の影響を受けていない良好な状態の遺物包含層が確認された。しかし，Ａ地区の北端部の旧湖沼に当たるところでは埋め立てによる重機の掘削痕によって，破壊されていたことが明らかとなった。調査ではＡ地区の北壁・東壁・西壁・中央トレンチ壁のセクション図を作成し，土層観察を行った（第７図）。

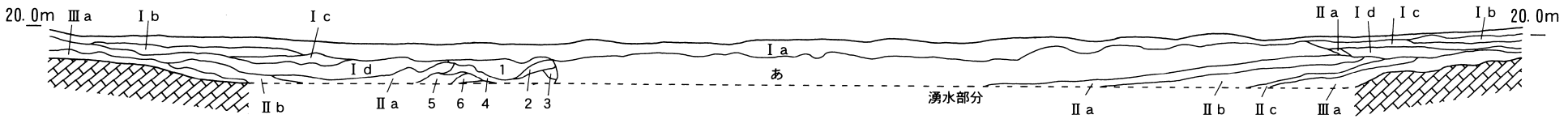
Ａ地区における各層の概略は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土。牧草による植物根を多量に含んだ湿性のある褐色シルト土であり，平均で約30cmを測る。調査に際しては重機によって掘削した。

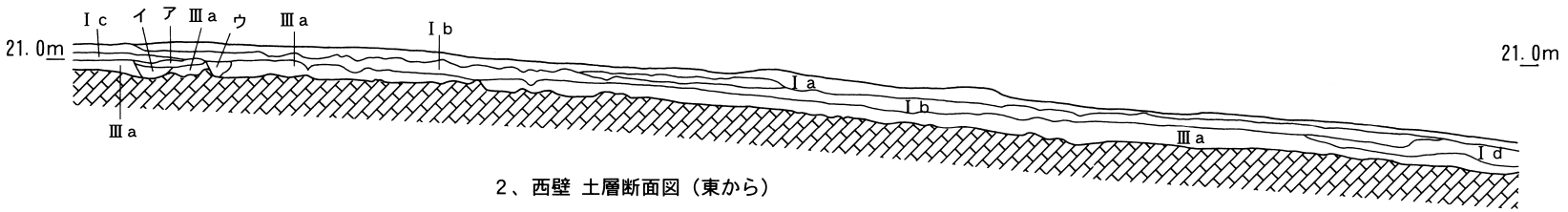
第Ⅱ層　にぶい黄褐色を呈した砂層。飛砂による堆積層と考えられる。遺物は全く含まない。安定した砂層ではないが，平均で約15cmを測る。

第Ⅲ層　暗褐色や黒褐色を呈した腐食シルト土層。縄文晩期末葉の土器片・石器剥片を多量に含む遺物包含層である。安定した土層であり，約30cm～40cmを測る。

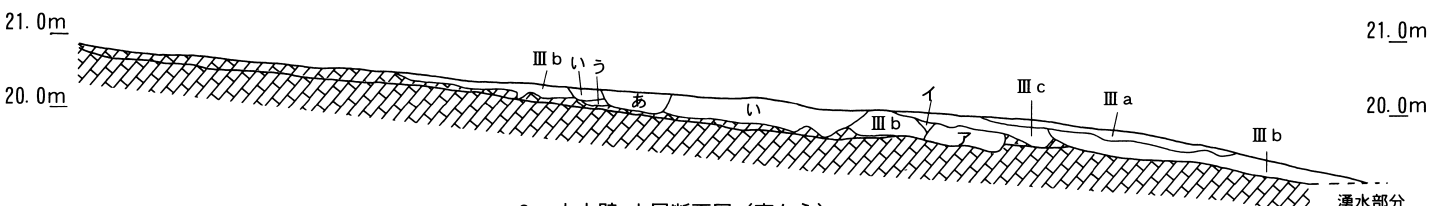
第Ⅳ層　暗褐色を呈する地山ローム層。遺物はなし。



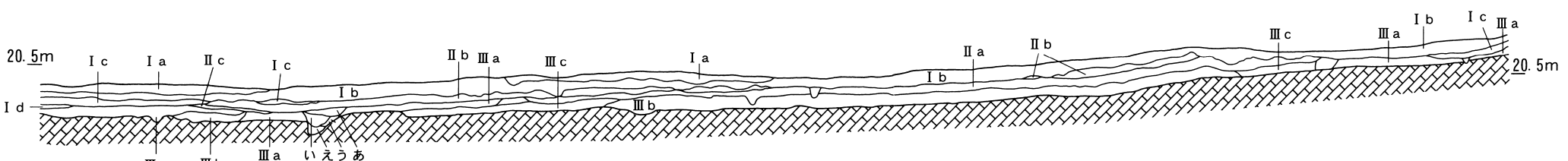
1、北壁 土層断面図（南から）



2、西壁 土層断面図（東から）



3、中央壁 土層断面図（東から）



4、東壁 土層断面図（西から）

0　5m
（縮尺1/50）

第7図　本調査 第Ⅰ－A地区 土層断面図

第２節　遺物の散布状況

調査に際しては，任意の点を基点にして，南北方向（縦方向）をＸ軸，東西方向（横方向）をＹ軸に設定した。調査区の関係から，Ｘ軸は南に向かうほど数字が増え，Ｙ軸は西に向かうほど数字が増えるように設定した（第８～10図）。単位はメートルである。そして，基点と４箇所の座標点は後日，トータルステーションによって国土座標を求め，正確な調査位置が分かるようにした。調査区の座標と国土座標の関係は，以下のとおりである。

基　点（ｘ＝０，ｙ＝０）：国土座標（ｘ＝117727.464，ｙ＝－40356.030）
座標１（ｘ＝０，ｙ＝10）：国土座標（ｘ＝117724.781，ｙ＝－40365.642）
座標２（ｘ＝０，ｙ＝20）：国土座標（ｘ＝117722.101，ｙ＝－40375.296）
座標３（ｘ＝０，ｙ＝30）：国土座標（ｘ＝117719.404，ｙ＝－40384.906）
座標４（ｘ＝０，ｙ＝50）：国土座標（ｘ＝117714.057，ｙ＝－40404.172）

Ａ・Ｂ地区において縄文時代晩期末葉の土器片と石器剥片などを大量に含んだ遺物包含層（第Ⅲ層）を確認したので，Ａ・Ｂ地区から出土した遺物の散布図を作成することにした。ただし，Ｂ地区においては大きく撹乱の影響が認められたので，後世の遺物の移動が考えられる。そこで，ここでは詳細な分析は避け，遺物の散布状況を示すに留めておきたい。

散布図は２ｍ四方のグリットを単位として作成した。なお，遺物はできるだけドット（点）を記録して取り上げるように努めたが，土器の残存状況が極めて不良であることから，磨滅の著しい細片はまとめて取上げているものも多く，厳密な意味での遺物点数ではない。そのため，散布図に示した数字はあくまでも散布状況を知るための概算として理解していただきたい。（ただし，石器・フレイク・黒曜石・赤鉄鉱は実数を示している。）

以下，個別に散布図の概要を示す。

遺物の散布：遺跡に持ち運ばれたものすべてを遺物としてカウントした。土器・石器・フレイク・黒曜石・赤鉄鉱などである。Ａ地区4377点，Ｂ地区910点，合計5287点である。Ａ地区にまとまりが見られ，ｘ＝－８～８，ｙ＝28～42の範囲に遺物が集中する。Ｂ地区では一見して小ブロックごとにまとまっているように見えるが，撹乱による影響と思われる。

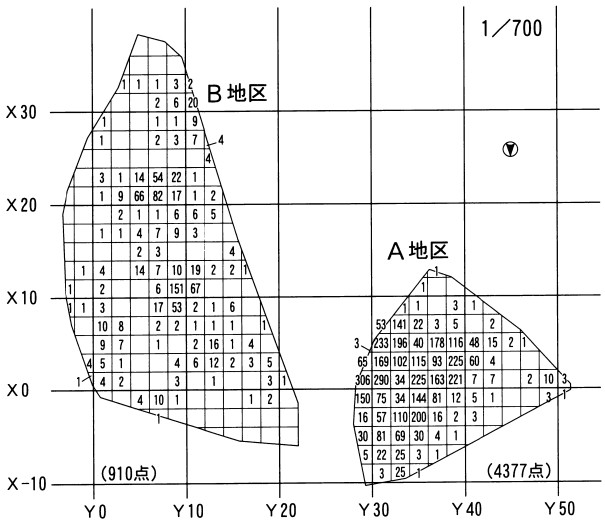
土器の散布：出土した土器をカウントした。Ａ地区3341点，Ｂ地区643点，合計3984点である。ただし，前述したように土器細片はまとめて取上げているので，厳密な実数ではなく，概算である。遺物の中では土器片が最も多く，前述の遺物散布と傾向は変わりない。

石の散布：遺跡内に持ち込まれた石器及び石器以外の原石・黒曜石・赤鉄鉱などすべての石をカウントした。Ａ地区1034点，Ｂ地区261点，合計1295点である。特徴的なことは黒曜石のフレイク，赤鉄鉱（ベンガラ）が多く出土していることである。また，石器では扁平で小型の川

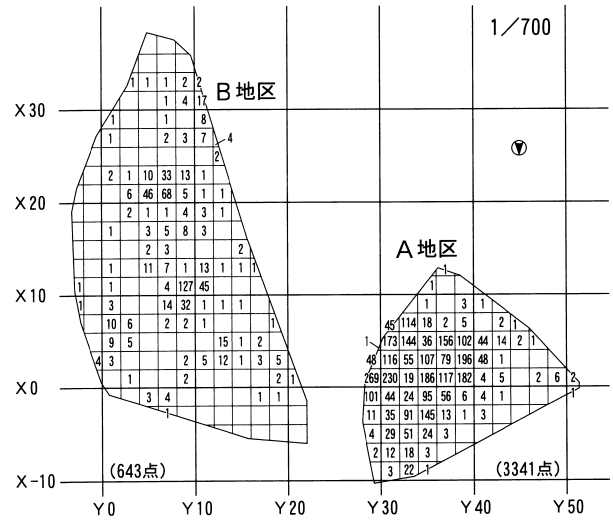
原石を使用した磨石が最も多く出土した。やはり，Ａ地区においてまとまりが見られる。

石器の散布：石鏃・尖頭器・石匙・スクレイパー・磨製石斧・敲石・磨石の石器の散布状況を個別に示した。それぞれ石器の数も少なく，特徴的な傾向は掴めなかった。

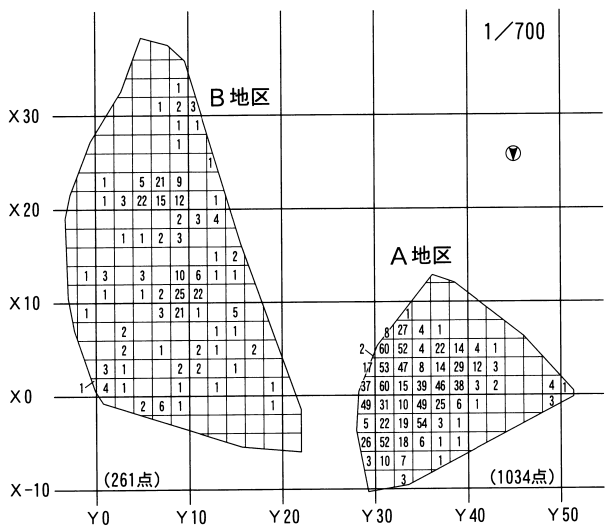
石器以外の石の散布：玉材・自然孔石・黒曜石・赤鉄鉱の散布状況を示した。なお，黒曜石・赤鉄鉱は重量も計測した。



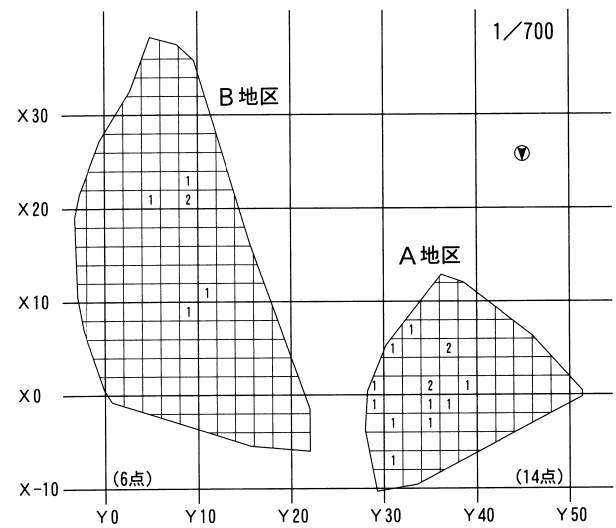
1．遺物の散布(5287点)



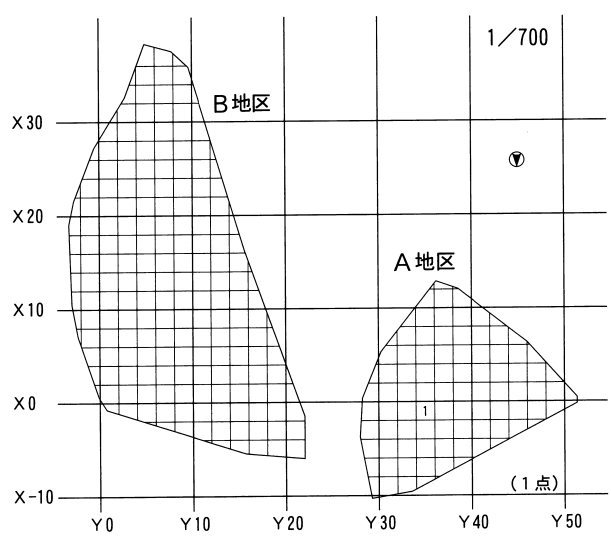
2．土器の散布(3984点)



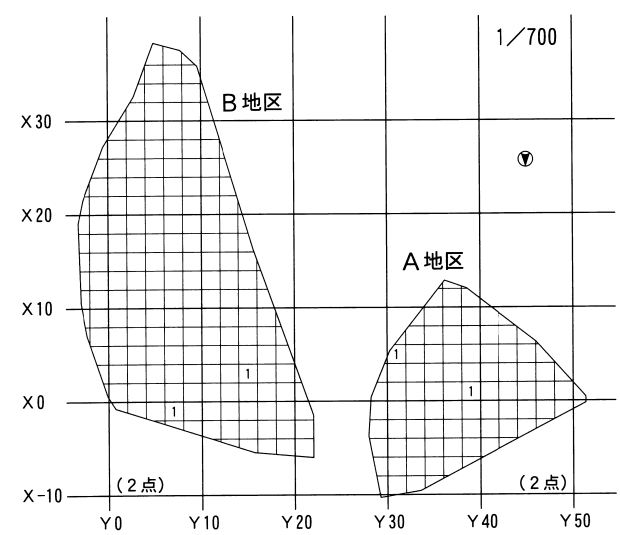
3．石の散布(1295点)



4．石鏃の散布(20点)

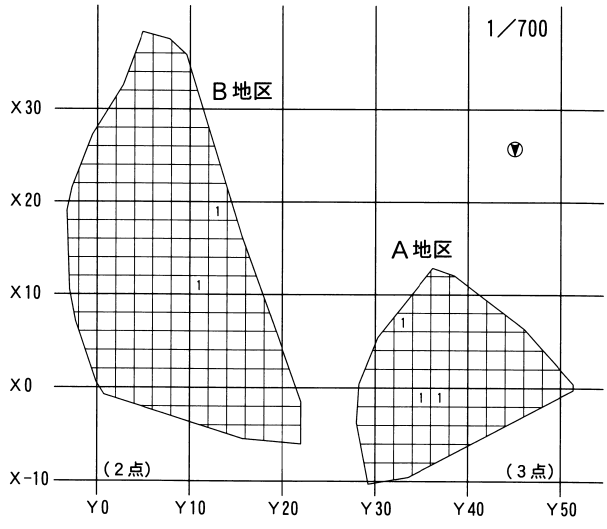


5．尖頭器の散布(1点)

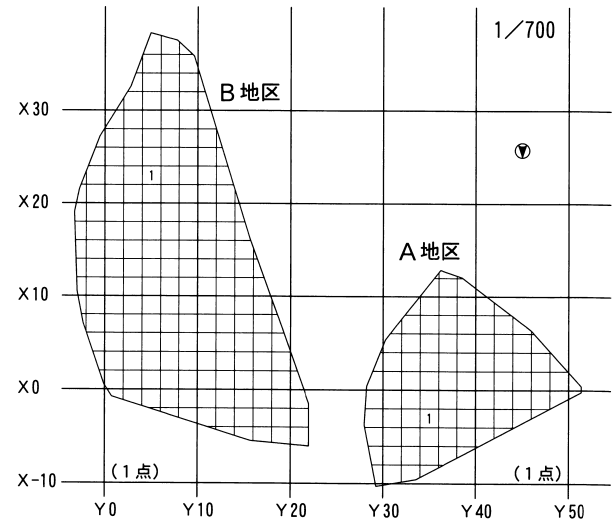


6．石匙の散布(4点)

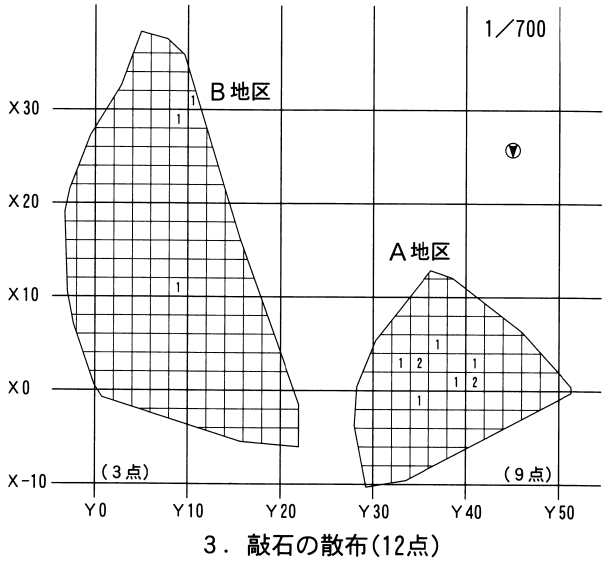
第8図　遺物散布図(1)



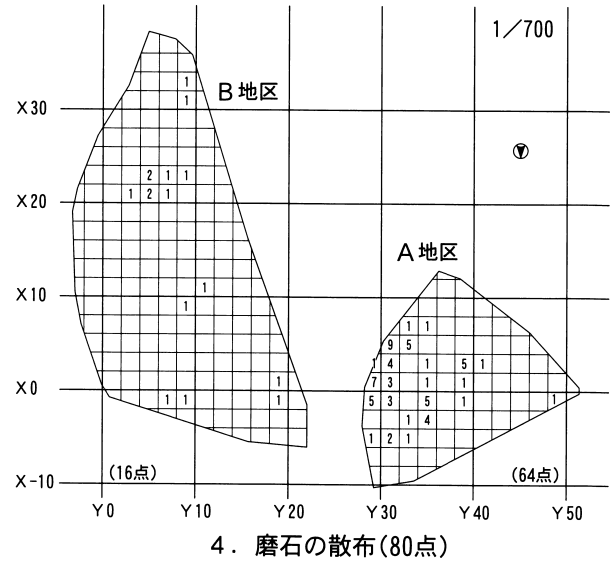
1．スクレイパーの散布(5点)



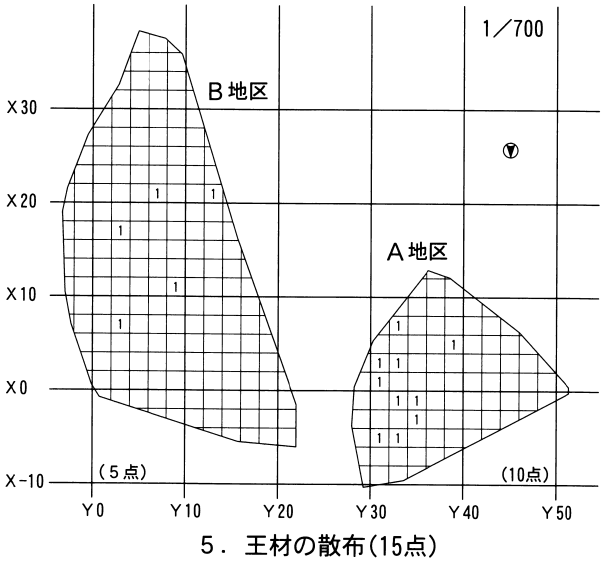
2．磨製石斧の散布(2点)



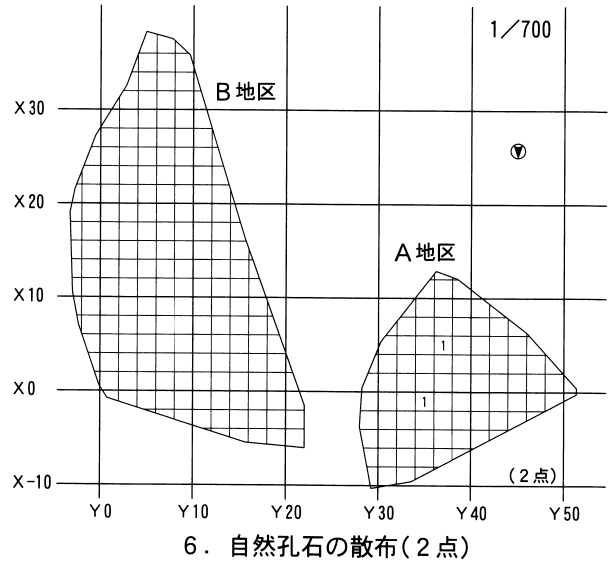
3．敲石の散布(12点)



4．磨石の散布(80点)

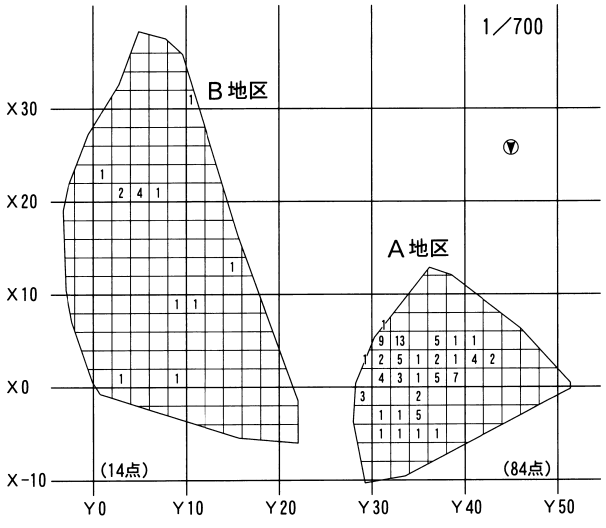


5．王材の散布(15点)

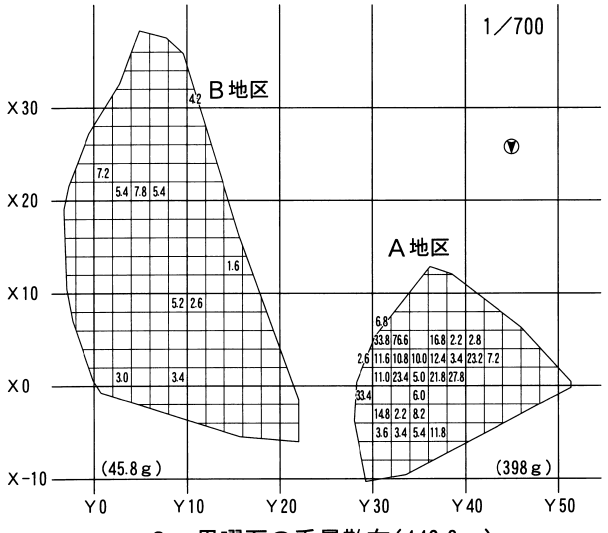


6．自然孔石の散布(2点)

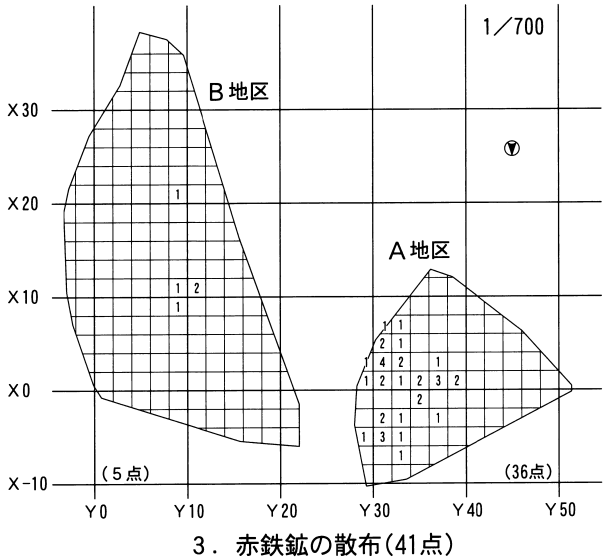
第9図　遺物散布図(2)



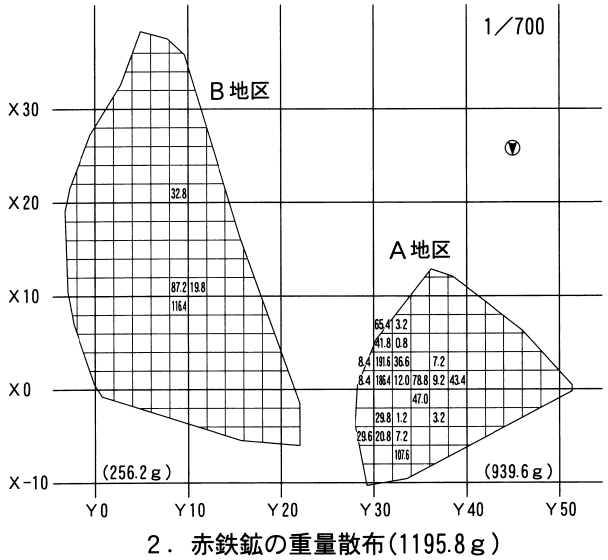
1．黒曜石の散布(98点)



2．黒曜石の重量散布(443.8ｇ)



3．赤鉄鉱の散布(41点)



2．赤鉄鉱の重量散布(1195.8ｇ)

第10図　遺物散布図(3)

第３節　出土遺物について

〈土　器〉

今回の調査によって，土器捨て場と考えられる遺物包含層を検出することができた。特にＡ地区では良好な状態で検出することができた。

しかし，土器は細片や摩滅した土器が多く，良好な状態の資料が少ない。そのため，器種の判別に困難なものが多く，口縁部の形態や傾き，或いは主文様の特徴から推定して，分類している。また，台付を有する底部は器種が特定できないため，まとめて報告している。掲載した土器は全部で254点である。器種構成は深鉢形（甕形も含む）・（台付）鉢形・（台付）浅鉢形・壺形・蓋形土器である。それぞれの土器の詳細については，観察表に譲ることにして，ここでは器種別に大別して，概要を述べることとする。

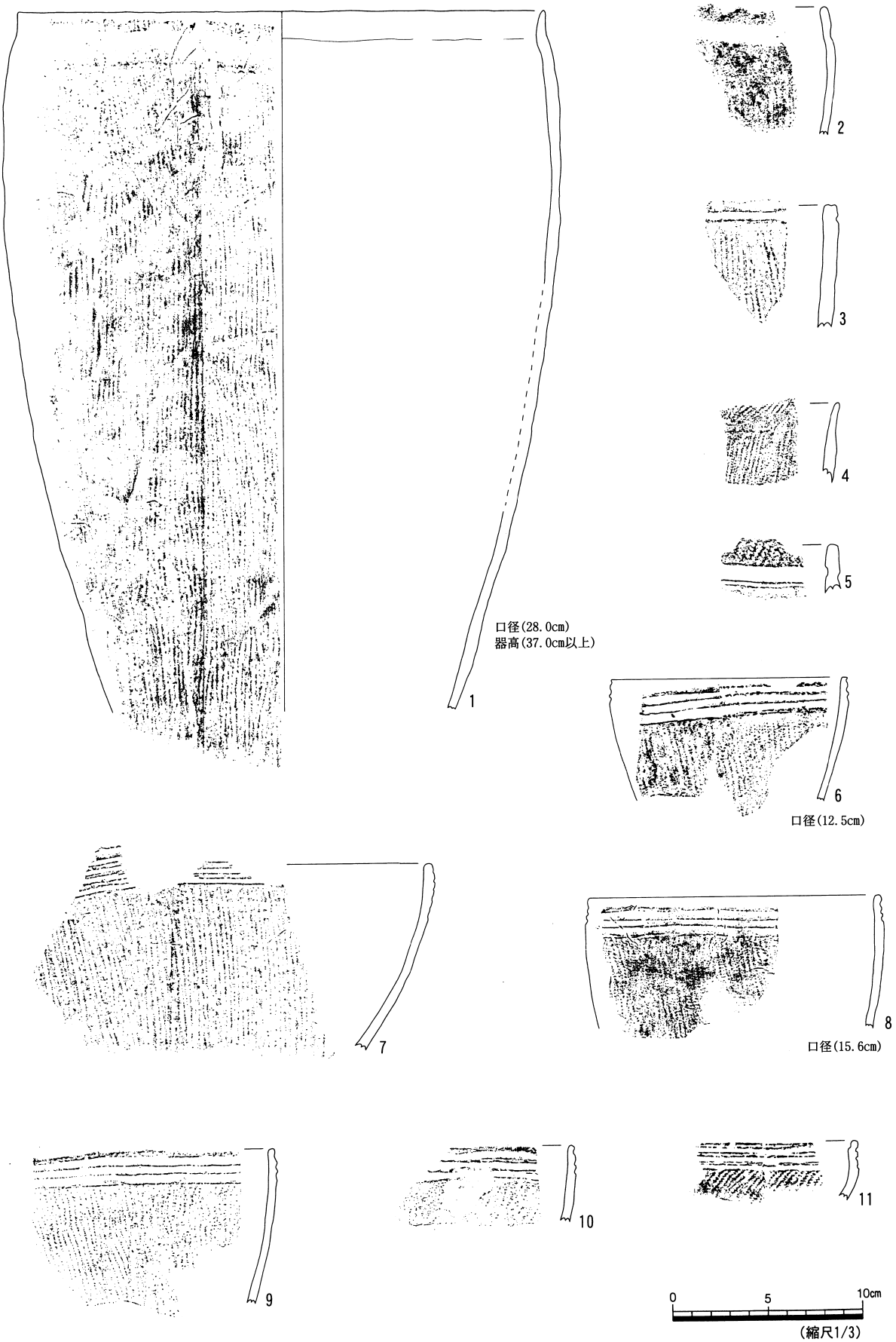
深鉢形土器（１～５・204・206・239）

深鉢形としたものは７点ある。ただし，２・５は鉢形の可能性もある。また，204・206・239は頸部のくびれや体部の調整等が他の土器と異なることから，甕形とすべきかもしれない。

厚さ＝７㎜前後とやや厚目である。すべてに炭化物が付着しており，煮沸用として利用されている。胎土＝粗粒砂を含むものが多い。内面調整＝丁寧なミガキが施されているもの（１・３～５）が多い。色調＝１は表面が浅黄色を呈するが，内面は炭化物の付着により，黒色を呈する。その他は炭化物の付着もあって，全体に暗褐色を呈したものが多い。口縁部の形状＝平口縁（１・４），波状口縁（２・３），山形突起（５）を呈するものがある。口縁部装飾＝無文帯を施すもの（１・４），と平行沈線文（２・３・５）を施すものがある。地文＝条痕文（１・２・３）と縄文（４・５）がある。条痕文はすべて縦方向に施されている。４は口縁部に無文帯を施し，無文帯上部には横位回転してＬＲ縄文を斜行させるが，無文帯以下の体部には斜位回転してＬＲ縄文を縦走させている。５も同様，口縁部には横位回転したＬＲ斜行縄文が見られる。

法量＝１は口径28.0㎝，器高37.0㎝以上である。その他は良好な資料もなく，大きさを把握することができない。

その他（甕形）＝204は口縁部（頸部）に横方向の丁寧なミガキ，体部には縦方向の丁寧なミガキを施す。内面はやや粗いケズリ調整が見られる。206は頸部がそれほど屈曲していない。破損が激しいが，横方向の丁寧なミガキが見られる。内面は粗いケズリ調整が見られる。239は小型品である。小破片であるため，壺形に近い可能性もある。内外面には丁寧なミガキ調整が施されおり，黒色で光沢がある。



第11図　深鉢・鉢形土器(1)

鉢形土器（６～84，171～180・182・184～188・194・201）

ここでは口縁部破片（６～84）の79点，底部破片（171～180・182・184～188・194・201）の18点を掲載した。なお，前述したように，口縁部を観察しただけでは台付を有するか否かは判別できないため，台付を有する底部はまとめて後述することとした。このことから，口縁部破片の鉢形土器としたものは，実際には台付を有するものも当然含まれている。（なお，後述する浅鉢形土器も同様である。）

鉢形土器は比較的装飾性も低く，器面には多少の差はあるが，すべてに炭化物が付着しており，煮沸用として利用されたと考えられる。文様帯に変形工字文を有するものは見当たらなかった。厚さ＝３～６㎜前後と深鉢形よりもやや薄めである。胎土＝細粒砂を含むものが多い。内面調整＝丁寧なミガキが施されるもの，やや粗いミガキが施されるもの，ケズリ調整が残るものなどが見られる（詳細は観察表を参照）。色調＝赤褐色や炭化物の付着によって，暗褐色を呈したものが多い。法量＝器形全体の法量が知れるものは口径12.8cm，器高11.0cm，底径5.3cm(38)の１点だけであり，その他に良好な資料はない。口径が復原可能なものは，小さなものから順に11.6cm(44)，12.5cm(６)，15.6cm(８)，18.0cm(18)，26.0cm(16)，28.0cm(12)となる。また，底径の計測・復原可能なものは，小さなものから順に2.5cm(174)，4.0cm(178)，4.0cm(197)，5.0cm(173)，5.2cm(179)，5.6cm(186)，6.0cm(185)，6.5cm(194)，7.0cm(172)，7.8cm(182)，8.5cm(171)，8.6cm(177)，9.0cm(176)となる。このことから，鉢形土器の法量にはまとまりがなく，多岐にわたっていると言える。また，口縁部形態・装飾・施文によって，以下のように分類した（ただし，破片が小さなものや摩滅の著しいもので，判別の難しいものは除外した）。

Ｉ類　平口縁で，平行沈線文を有するもの。

ここでは，以下のようにａ～ｄ類に細別した。

（Ｉａ類） 平口縁で，口縁部には平行沈線文だけを有するもの（６～11・26～28・32・40・50・67・74）。

平行沈線は３～５条で，３条が主体である。体部以下の地文は条痕文を施すものと縄文を施すものがある。条痕文はすべて縦方向に施されている。条痕文を施すものは縄文のそれに比べて，やや器壁も厚く，大ぶりな法量を持つ傾向がある（７・26～28・32）。縄文には，斜位回転して条を縦走させたＬＲ縄文（６・８～10）を主体に，横位回転して条を斜行させたＬＲ縄文（11・40・50・67）が続く。また，数は少ないが，縦走のＲＬ縄文（74）も見られる。

（Ｉｂ類） 平口縁で，口縁部に平行沈線文を持ち，沈線間に粘土粒の突起を有するもの（30・38・39・41・43・44・46・50・55～57・61・73・79・81）。

平行沈線は５～８条で，５条が主体である。38の完形品では，沈線間に粘土粒の突起がほぼ等間隔で並んでおり，その他の破片資料も同様と推測される。ちなみに，ここでは２個一対の突起は見られない。また，体部以下の地文は縄文を施すものだけが確認できる。縄文には縦走させたＬＲ縄文（38・39・44・57）が圧倒的に多く，その他は小破片のため，地文不明である

ものが多い。また，平行沈線の文様帯には地文の縄文が磨り消されずに，そのまま残されたものが多い（39・43・44・46・50・57・79・81）。

（Ｉｃ類）平口縁で，口縁部の平行沈線文に工字文を施すもの（29・52・60・139）。

ここで言う「工字文」とは，平行沈線中に縦方向の短い沈線を刻んだもので，大洞Ａ式よりも退化した工字文として捉えることができる。また，52・139は縦の沈線を深く刻んでいるため，縦沈線の両側が隆起して，平行沈線の陽部と連結し，「π字状文」のようにも見える。これらはすべて平口縁と思われるが，小破片の資料であるため詳細は不明である。

（Ｉｄ類）平口縁で，平行沈線文に無文帯を有するもの（33・34・66）。

33･34は同一固体で，磨り消されずに残された縄文帯の下に，幅１㎝の無文帯を丁寧なミガキによって作り出している。さらに，沈線中には粘土粒の突起が見られる。66も同じく縄文帯の下に，幅１㎝の無文帯をミガキによって，作り出している。また，沈線中には２個一対の突起が見られる。

Ⅱ類　山形突起を持ち，口縁部に平行沈線文を有するもの。

平行沈線は３～９条で，７条前後が主体を占める。12・16の状態の良い資料やその他の破片資料から推測すると，山形突起を有するものすべては，平行沈線文の間に粘土粒の突起を等間隔で配置するものと考えられる（ただし，35・62・64・78の資料は小破片のために，突起が見られないと推される）。

体部の地文は不明なものを除いて，縦走するＬＲ縄文が圧倒的に多く（12～16・24・42・49・58・59・63・75），横位回転して条を斜行させたＬＲ縄文は極くわずかに見られる（18～20）だけである。ただし，口縁部に磨り消されずに残された縄文は，すべてＬＲ斜行縄文である（14～16・24・31・35・48・51・62・64）。

山形突起は，以下のようにａ～ｆ類に細別した。

（Ⅱａ類）裾広がりの山形突起を呈するもの（24・25・48・58・59・62・69）。

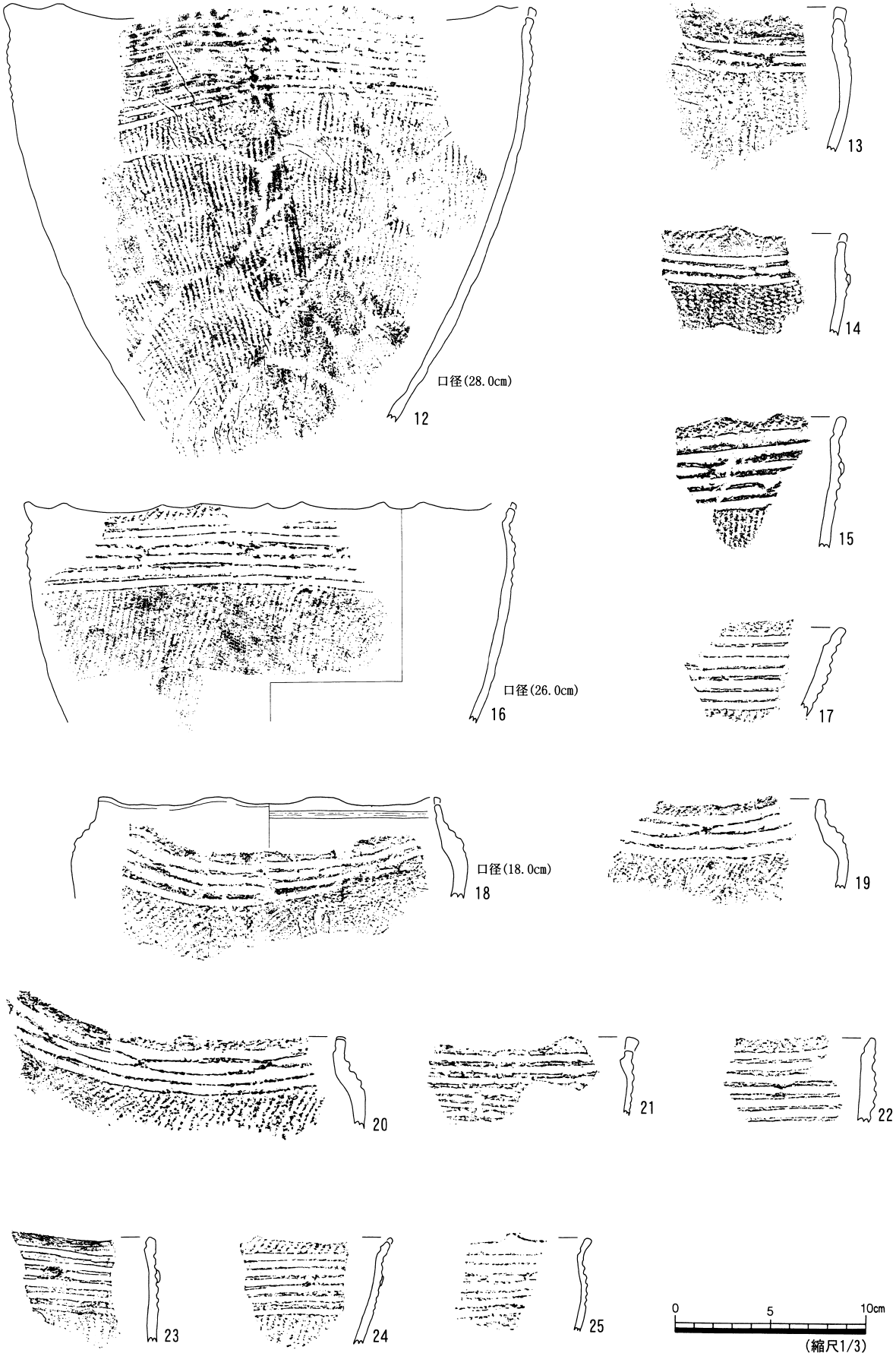
（Ⅱｂ類）ａ類と同じ裾広がりの山形突起で，突起頂部にヘラ押圧による１ヶの刻みを有するもの（13・14・21・35・49・63・75）。

（Ⅱｃ類）ａ類と同じ裾広がりの山形突起で，突起頂部にヘラ押圧による２ヶの刻みを有する。また，口縁部形態は他の鉢形土器と異なり，頸部が著しく屈曲して，強く張り出す肩部を作り出す特徴がある（18～20）。

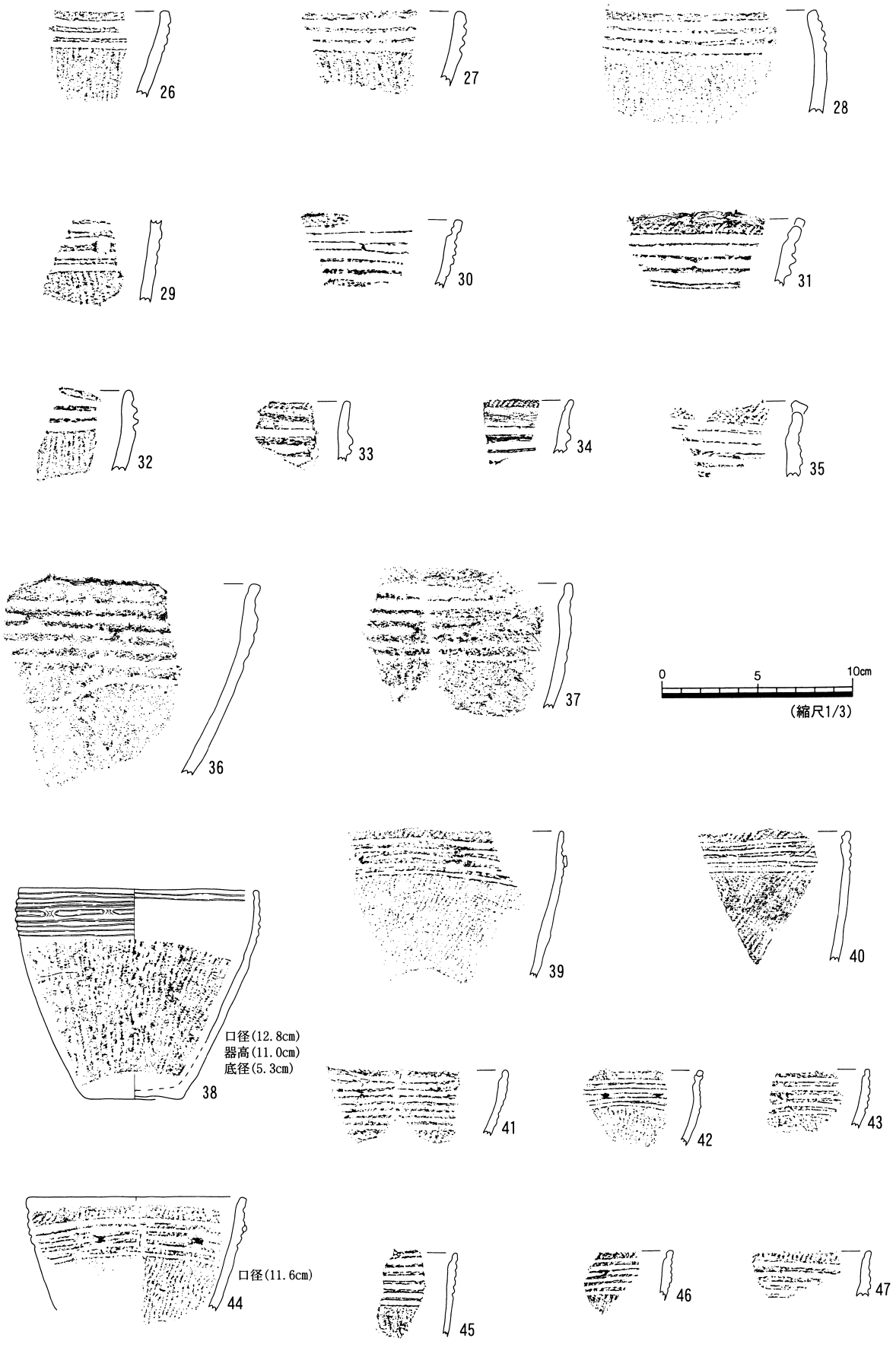
（Ⅱｄ類）突起の頂部を大きく凹ませ，突起が２つに分かれるもの。連続した２個の突起を呈するもの（12・15・16・31・42・64・78）。

（Ⅱｅ類）突起の頂部を抑え，平坦にしたもの。台形状を呈するもの（51）。

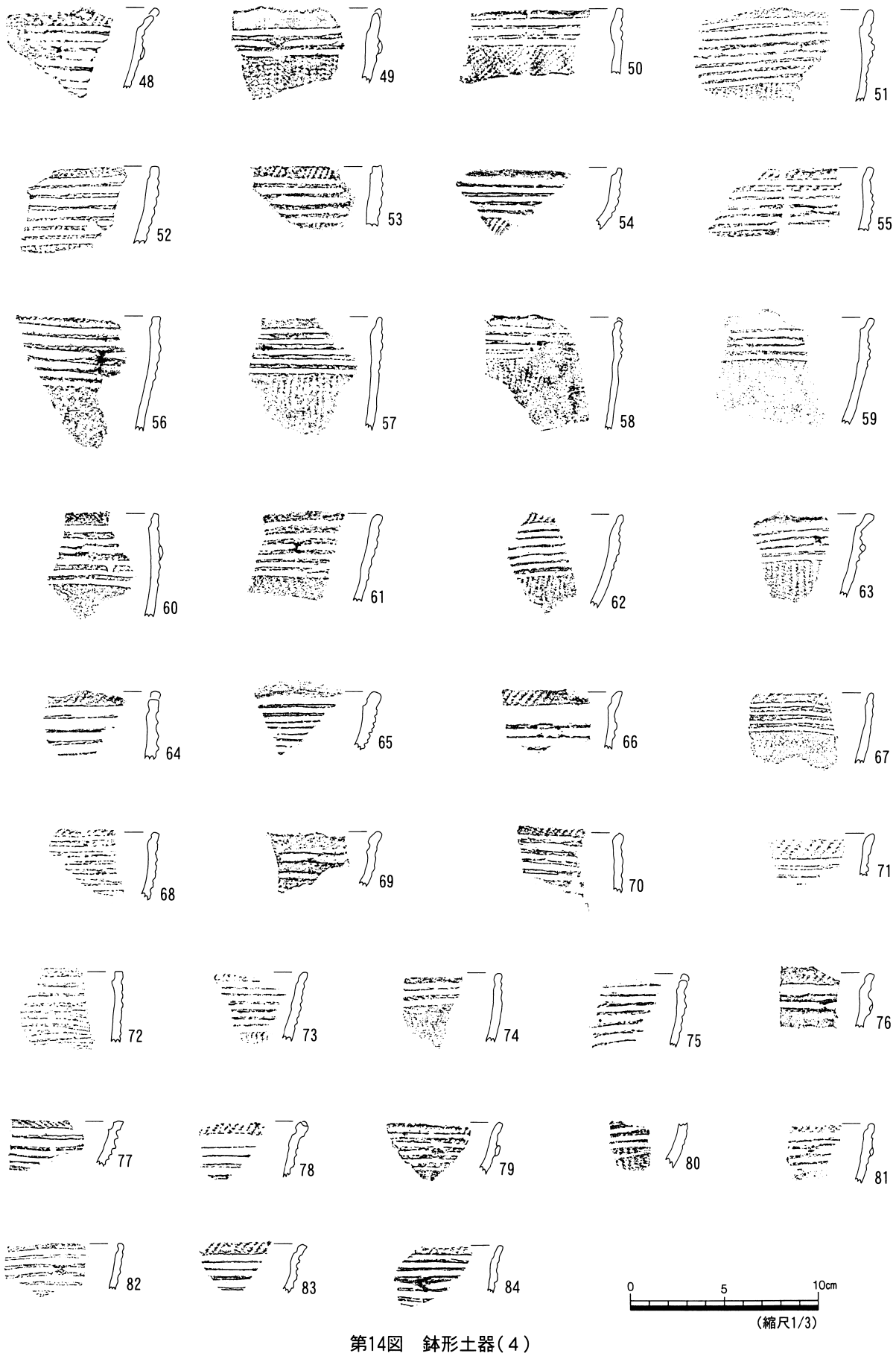
（Ⅱｆ類）鰭状突起を呈するもの（247）。突起の内外面には太い沈線を１条施す。大型鉢と考えられる。



第12図　深鉢・鉢形土器（２）


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
5
10cm
(縮尺1/3)
39
40
口径(12.8cm)
器高(11.0cm)
底径(5.3cm)
38
41
42
43
口径(11.6cm)
44
45
46
47

第13図　鉢形土器(3)


48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
5
10cm
(縮尺1/3)

第14図　鉢形土器(４)

浅鉢形土器

浅鉢形土器の形態には体部が直線的に開くもの（Ⅰ類）と体部上半が内湾し，下半が直線的になるもの（Ⅱ類）に分かれる。また，炭化物が付着するものはほとんどなく，精巧に作られたものが多い。基本的には煮沸以外の用途で，供膳などの盛り付け用に使用されたと考えられる。主文様である「変形工字文」は浅鉢形土器だけに認められた。

厚さ＝３～６㎜前後となる。胎土＝キメ細かいものや細粒砂の混入が目立つものがあるが，鉢・深鉢に比べて精製された胎土を用いている。内面調整＝丁寧なミガキを施すものが多い。地文＝縄文と無文がある。縄文にはＬＲ縦走縄文が多く見られる。また，無文には丁寧なミガキによって研磨されたものが多い。色調＝明黄褐色など明るい色を呈するものが多い。また，黒色処理されて，光沢を持つようなものもある（89・101・164)。法量＝Ⅰ類は口径14～16cm，器高4.8～7.2cm，底径4.0～10.0cmの範囲に含まれる小型土器である。一方，Ⅱ類で器形全体の法量が知れるものは口径21.5cm，器高7.0cm，底径6.5cm（86）の１点だけであり，その他に良好な資料はない。Ⅱ類の中で口径が推定できるものは24.0cm（85）と25.0cm（87）だけである。Ⅱ類は口径が20～25cmほどで，Ⅰ類より大型である。赤色顔料等＝65の口縁部に赤色顔料が付着する。口縁部形態・装飾・施文によって，以下のように分類した（ただし，破片が小さなものや摩滅の著しいもので，判別の難しいものは除外した)。

Ⅰ類　体部が直線的に開くもの（133・135・137・148・153・164～170・191・196・198・203・253)。また，以下のようにａ～ｃ類に細別した。

（Ⅰａ類）平口縁で，口縁部に変形工字文を有するもの（133・135・137・148・153・164～168・191・198・203)。体部の地文は丁寧なミガキによって研磨され，無文となる。底部には１条の平行沈線文を有するもの（164・167・168・191・196・198・203）が圧倒的に多く，そうでないものはわずかに１点（148）だけである。小破片のため，変形工字文の文様構成を把握できないが，164は変形工字文の中に１条の斜行沈線文が見られる。

（Ⅰｂ類）平口縁で，文様帯の幅が広く，体部全体に変形工字文を有するもの（169・253)。169と253は同一個体と思われる。１６９は体部の摩滅が激しく，小破片のため文様構成を詳しく知ることができないが，文様は縄文を地文とし，その上に沈線文を施文している。地文の縄文は磨り消されずに，残っている。変形工字文は流水状に展開する工字文を配していると推される。

（Ⅰｃ類）波状口縁で，工字文を有するもの（170)。体部の地文には縄文を施す。

Ⅱ類　体部上半が内湾し，下半が直線的になるもの。

また，主文様の特徴から，以下のようにａ～ｃ類に細別した。

（Ⅱａ類）変形工字文を有するもの。

ここでの変形工字文は沈線等による粘土の掘り込みによって，逆に陽部を強調している。変形工字文の種類は以下のとおりⅠ型～Ⅴ型に細分した（第19図。ただし，変形工字文でも破片が小さなもので，判別の難しいものは除外した)。なお，分類に際しては，晩期終末から弥生時代の移行期における土器型式の変遷を示した工藤竹久氏の分類を引用・参考とした（工藤1976)。

変形工字文Ⅰ型（86・87)

流水状に展開する工字状の沈線。流水文。工藤氏の分類によれば，剣吉荒町Ⅰ群ａの土器型式で，変形工字文Ａ１（連続型）に相当する。

86は連続した小波状の口縁を持つ。文様帯の幅は2.5cmと狭く，４単位を基本として，流水状の工字文が展開する。体部の地文はやや斜行したＬＲ縄文である。

87は平口縁で，文様帯の幅は3.0cmと前者に比べてやや広くなる。体部の地文はやや粗いミガキを施した無文となる。

変形工字文Ⅱ型（89・101)

流水状に展開した沈線が三角形或いは台形を呈する連続した文様を作り出す。工藤氏の分類によれば，剣吉荒町Ⅰ群ｂの土器型式で，変形工字文Ｂ２（連続型）に相当する。

89は口縁部に大型の山形突起を持つ。さらに，大型突起の間には小突起がある。小突起は頂部を大きく凹ませ，連続した２個の突起となる。文様帯の幅は2.5cmと狭い。体部の地文は丁寧なミガキによって，無文となる。また，器面全体が黒色処理されて，光沢を持つ。101は89と同一個体と思われる。

変形工字文Ⅲ型（88・90・99・96・102・119)

文様構成は変形工字文Ⅱ型と類似するが，文様単位間に１～２条の斜行沈線文を伴う。工藤氏の分類によれば，剣吉荒町Ⅰ群ｂの土器型式で，変形工字文Ｂ１（連続型）に相当する。斜行沈線は１条のもの（88・90・96・102)，２条のもの（85）がある。体部の地文は確認できるものは，縄文だけであった。85・99はＬＲ斜行縄文，88・90はＲＬ斜行縄文であった。ちなみに88と119は同一個体である。

変形工字文Ⅳ型（97・100・117)

変形工字文Ⅲ型と類似するが，文様単位間には斜行沈線文ではなく，平行沈線文を伴う。

口縁部はすべて波状口縁を持つ。体部の地文はＬＲ縦走縄文（97・100）がある。

変形工字文Ｖ型（91・95・106・110・126・130・132）

文様構成は変形工字文Ⅱ型と同じく，流水状に展開した沈線が裾広がりの三角形の文様帯を連続して作り出すが，その結節部に３～５㎜大の明瞭な２個一対の粘土粒を貼り付ける。これらのすべての破片は同一個体と推される。口縁部は波状口縁となり，体部の地文はＬＲ斜行縄文である。91・132は平行沈線中にも２個一対の粘土粒が見られる。

（Ⅱｂ類）工字文を有するもの（149・152）。

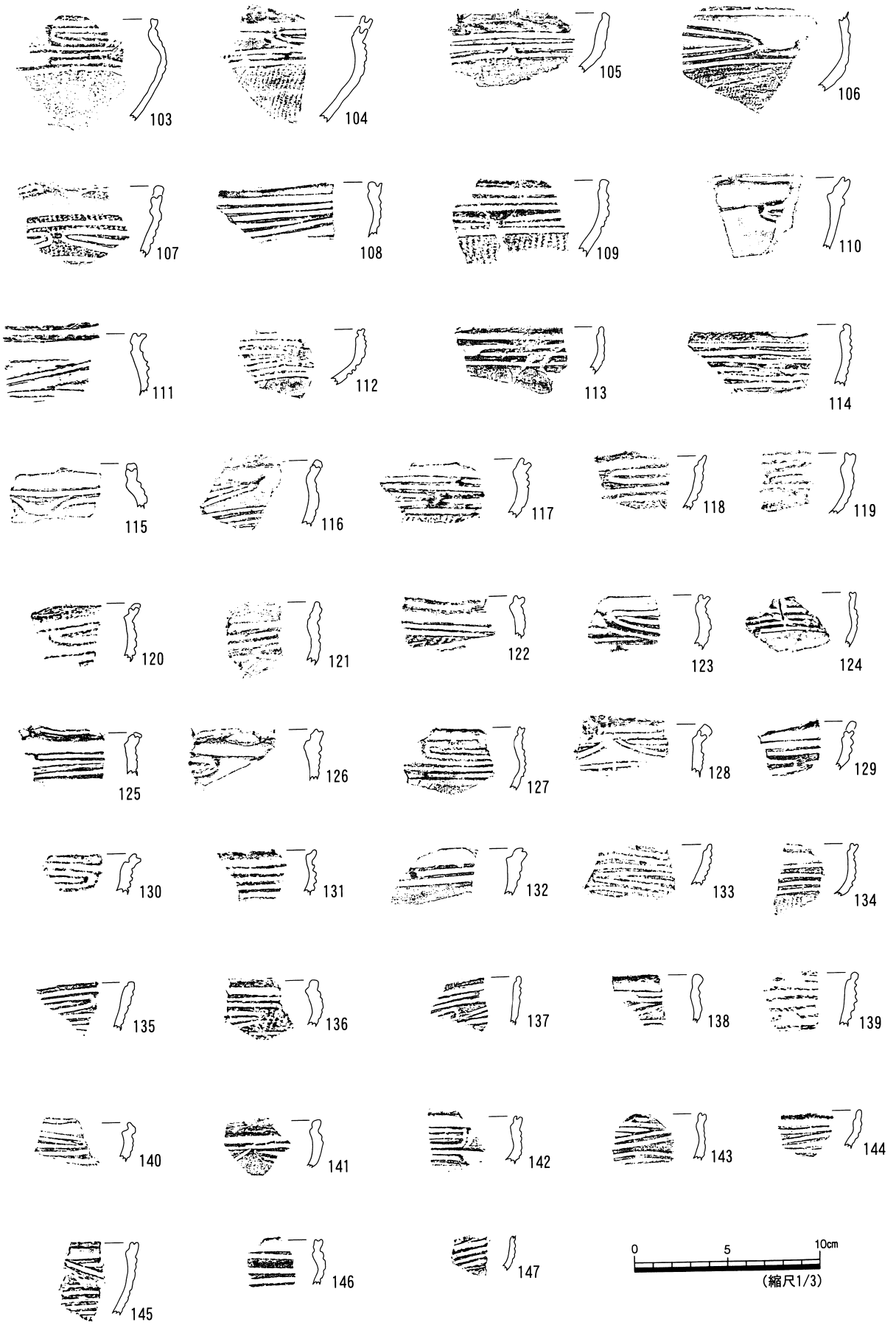
工字文には平行沈線中に縦方向の短い沈線を刻んだ粗略なもの（149）と丁寧に工字文を作り出すもの（152）のがある。149は平口縁で，地文は摩滅が激しいが，縄文が施されていると思われる。152は山形突起で，突起の頂部を大きく凹ませて，連続した２個の突起状を呈する。地文はＲＬ縦走縄文である。

（Ⅱｃ類）「π字文・(匹字文)」を有するもの（105・113・150・154・156・157・159・163）。

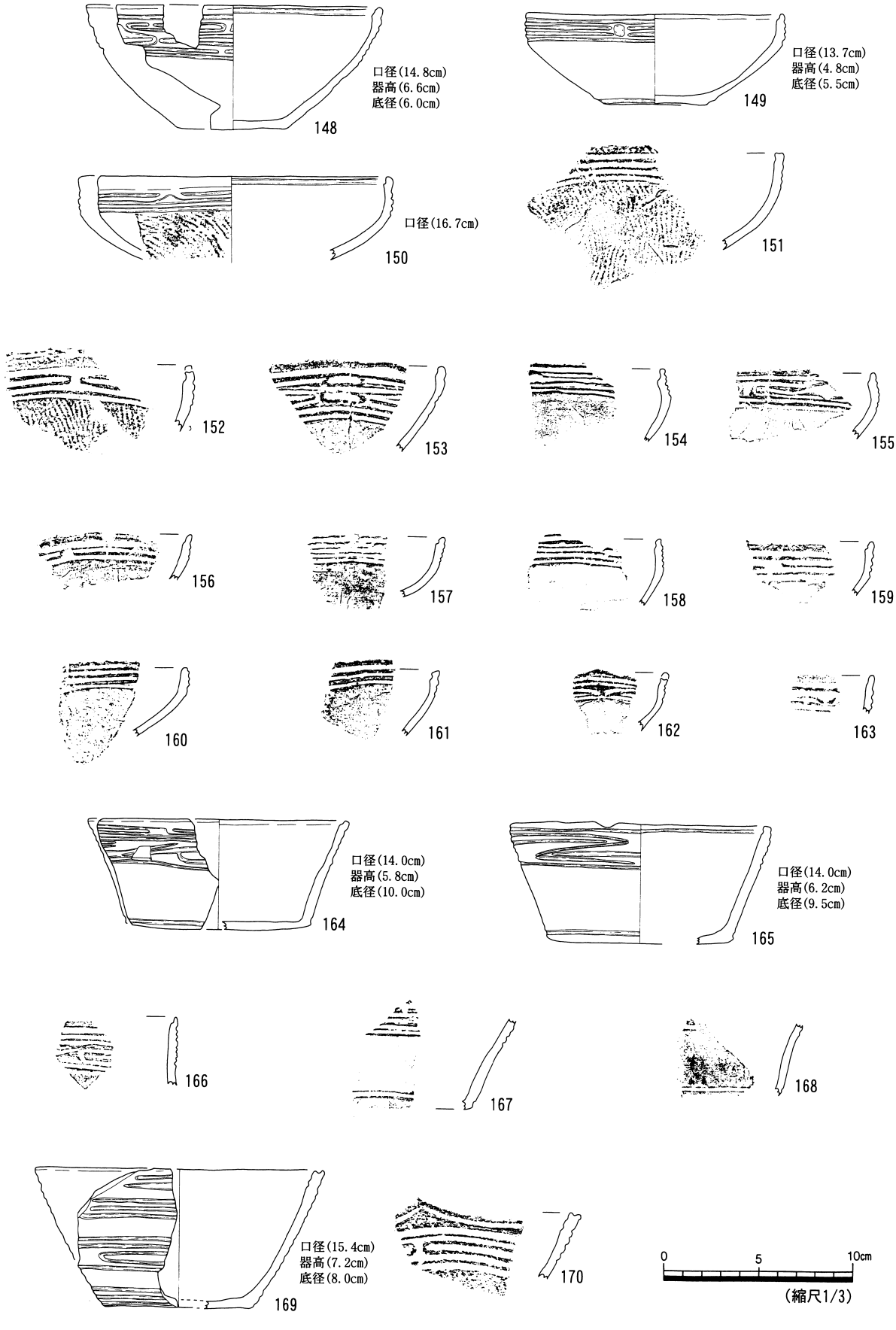
体部の地文は丁寧なミガキによる無文（105・113・154・156・157・159）が圧倒的に多く，その他にはＲＬ斜行縄文（150）が見られる。

また，113・163は口縁部に６～８㎜のやや幅の狭い無文帯を持ち，π字状文を上下に反転させた「逆π字状」の沈線文となる。163には補修孔と思われる孔が１つ伴う。

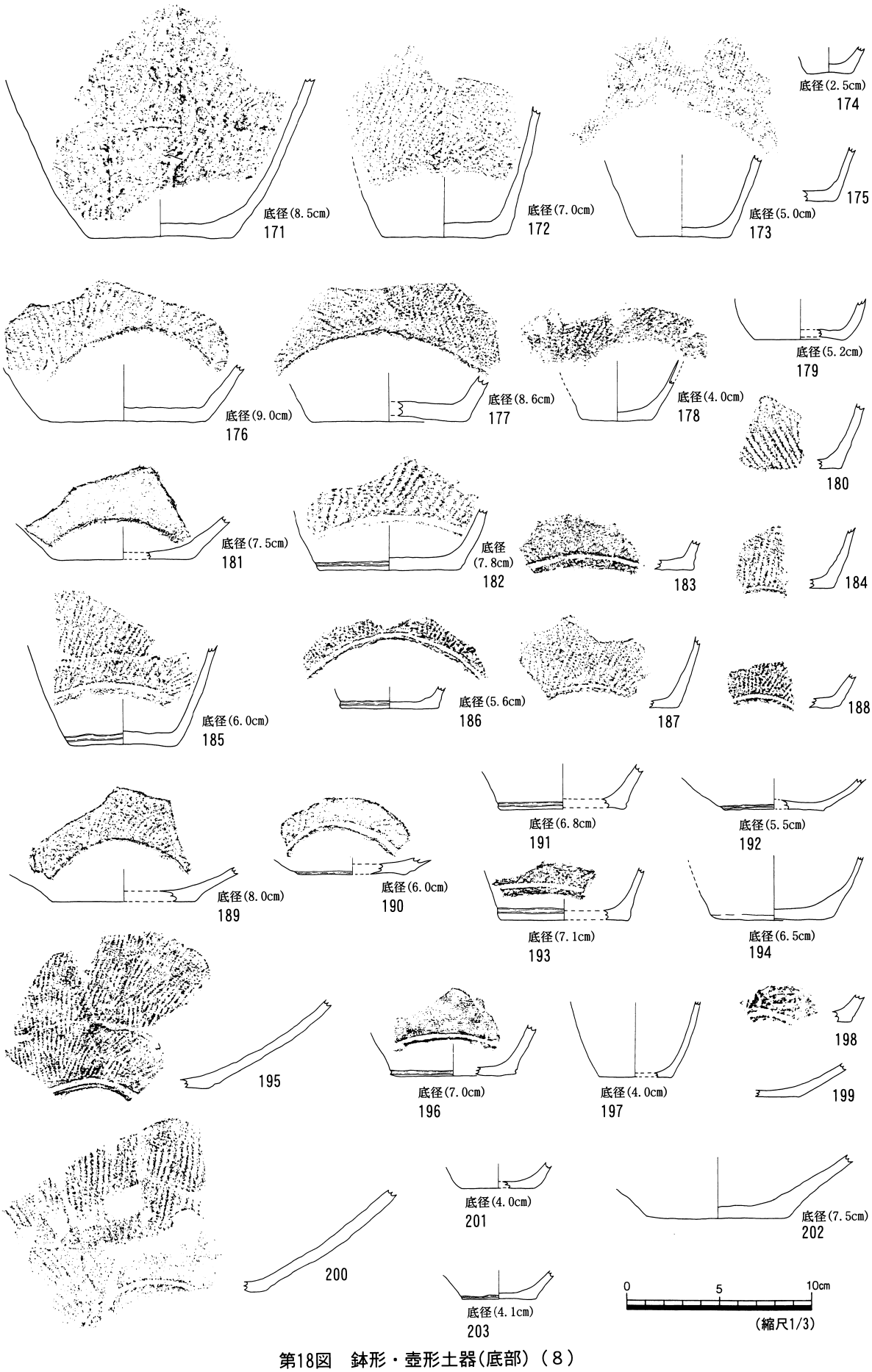
第15図　浅鉢・鉢形土器(5)



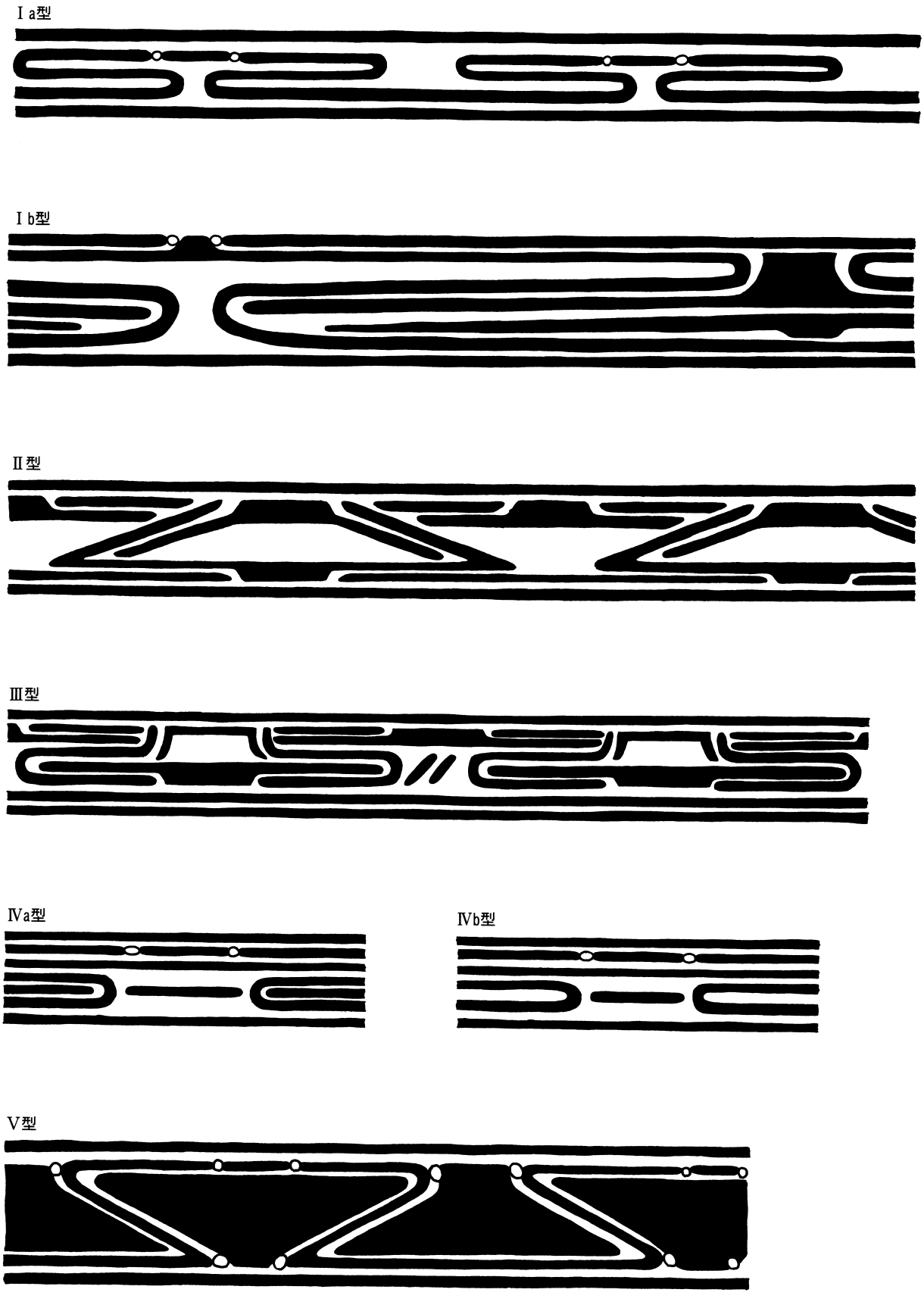
第16図　浅鉢・鉢形土器（６）


口径(14.8cm)
器高(6.6cm)
底径(6.0cm)
148
口径(13.7cm)
器高(4.8cm)
底径(5.5cm)
149
口径(16.7cm)
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
口径(14.0cm)
器高(5.8cm)
底径(10.0cm)
164
口径(14.0cm)
器高(6.2cm)
底径(9.5cm)
165
166
167
168
口径(15.4cm)
器高(7.2cm)
底径(8.0cm)
169
170
0
5
10cm
(縮尺1/3)

第17図　浅鉢形土器（7）



第18図　鉢形・壺形土器(底部)（８）



第19図　変形工字文の分類模式図

台付鉢形及び台付浅鉢形土器（207～229）

底部に台付を有する鉢形及び浅鉢形をまとめている。ただし，小破片のため，台部だけを掲載しており，上部形態が不明で，ほとんど器種を特定することができない。特徴的な点を挙げるとすれば，台部はすべて台形状を呈することである。ちなみに砂沢式期に特有な円筒形を呈するものは全く出土していない。また，台部外面に沈線を持つものは２点（221・228）しかなく，その他はすべて無文である。221は底部付近に１条，228は台部中位に１条が認められる。

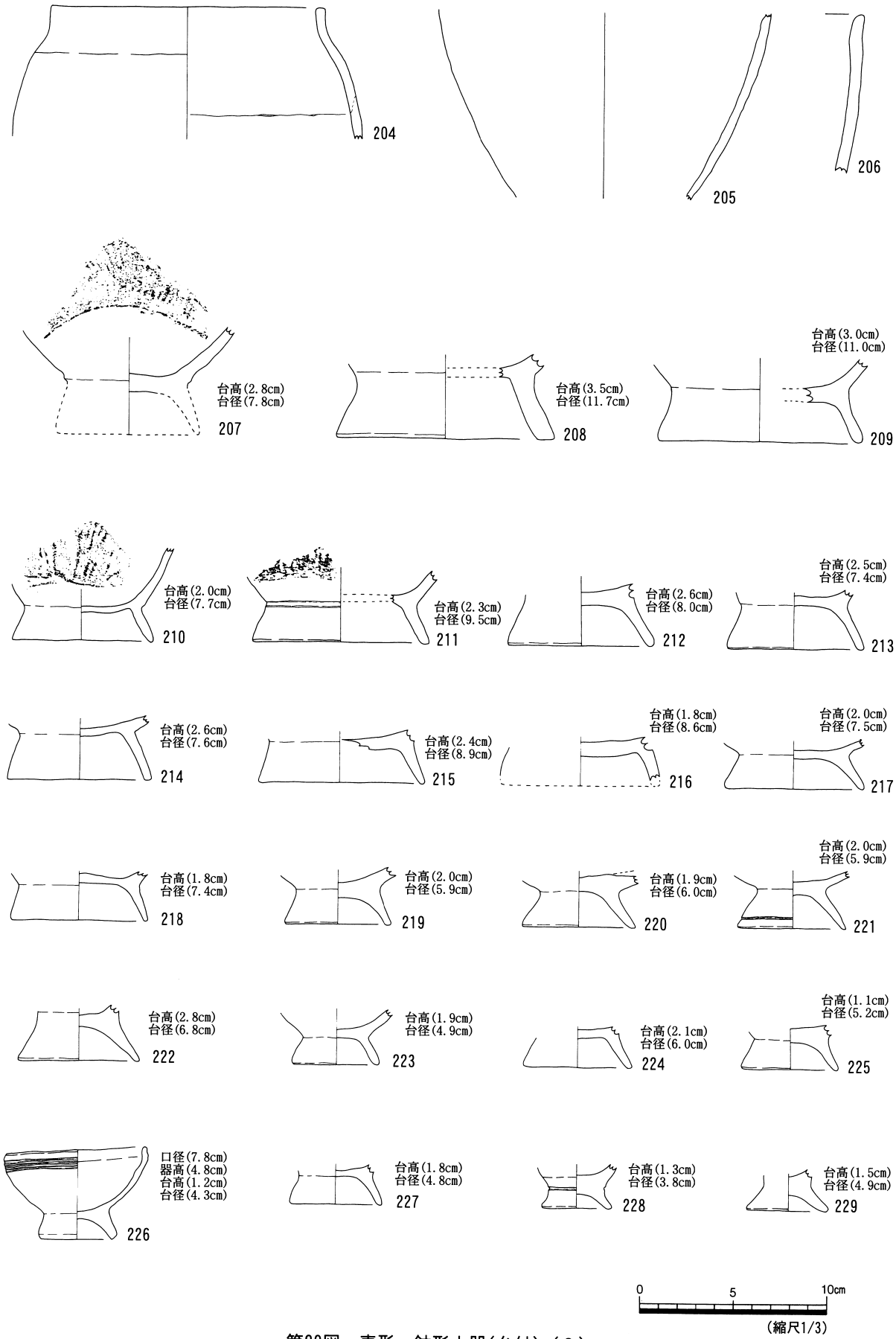
226は唯一完形品の台付浅鉢形土器である。口径7.8cm，器高4.8cm，台高1.2cm，台径4.3cmの小型品である。口縁部には平行沈線文３条がある。体部調整はケズリや粗いミガキによる無文となる。

台部における法量散布図を作成すると，以下のように大きく３群に分けられる（なお，法量を算出する際に，実測図によって台径を推定算出したものも含まれている）。

Ⅰ群：台高1.1～2.1cm，台径3.8～6.0cmの範囲のもの。これは226の完形品が示すように，小型品を含む台付浅鉢形土器と考えられる。

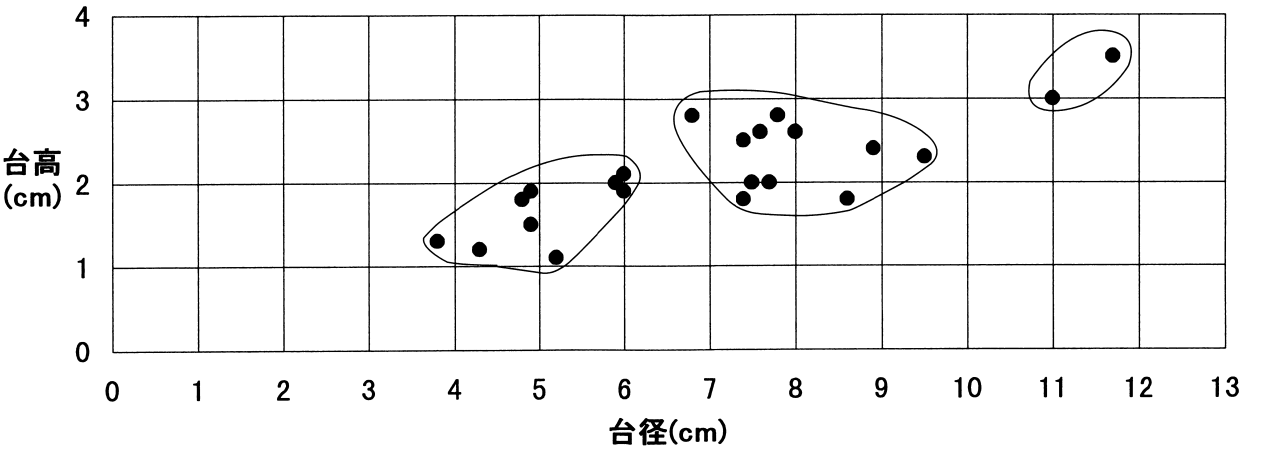
Ⅱ群：台高1.8～2.8cm，台径6.8～9.5cmの範囲のもの。浅鉢形及び深鉢形土器の両方が存在すると考えられる。

Ⅲ群：台高3.0～3.5cm，台径11.0～11.7cmの範囲のもの。最も法量が大きく，大型の鉢形土器と考えられる。



第20図　壺形・鉢形土器(台付)（9）

台付底部の法量散布図



第21図　台付底部の法量散布図

壺形土器（194・202・205・230～245）

壺形土器は鉢形や浅鉢形土器に比べて，出土点数が少ない。ここでは特徴のある口縁部・肩部・体部・底部破片を取り上げることにした。

口縁形態はやや外反気味に立ち上がるものが多い。口唇部には裾広がりの山形突起を持つもの（230），突起頂部にヘラ押圧による１ヶの刻みを有するもの（231）がある。230・231は口縁部上位に２条の平行沈線文が走る。沈線の上位にはＬＲ斜行縄文，下位には丁寧なミガキの無文となる。242は口縁部に，236・238は肩部にそれぞれ工字文風の沈線文が見られる。205・241・242・244・245は同一個体と思われる。体部の地文は丁寧なミガキによる無文で，精良な胎土を用いている。しかし，赤褐色をした表面と二次的な被熱による影響だろうか，表面に剥離痕が目立つ。また，アスファルト或いは漆と推される付着物が244・245に認められる。

233・240は肩部破片である。体部の地文はすべてＬＲ縦走縄文である。また，内面調整では233は粗いケズリ調整に対して，240はケズリ調整後に，丁寧にミガキ調整を行っている。

234・235・237は体部地文に矢羽状沈線をもつ。それぞれ精良な胎土を用いており，表面が赤褐色を呈する。237は矢羽状沈線を挟むように，平行沈線３条を一対にした沈線文を配している。

194・202は底部破片である。194は底径6.5cmを測る。胎土が赤褐色を呈する。細かい砂粒が目立つ。202は底径7.5cmを測り，底部付近から序々に外反して立ち上がる。細かい砂粒が目立つ。外面は丁寧にミガキ調整が行われている。

243は細口壺の体部破片で，口縁部が欠損している。精良な胎土を用いており，表面は赤褐色を呈している。内外面とも丁寧なミガキ調整が施されている。また，二次的な被熱による影響だろうか，底部にだけ摩滅痕が目立つ。

蓋形土器（248）

形態は円錐形を呈する。つまみは山形突起で，突起頂部をヘラ押圧によって大きく凹ませている。文様構成は沈線を３条一対として，三角形状に文様を作り出し，三角形状の沈線文を左右対称に４つを配置する。さらに三角形の区画文の中に刺突文を充填させている。

また，それぞれの三角形が接するところに粘土紐を貼り付け，隆帯を作り出している。ただし，１箇所だけ隆帯が見られないが，これは隆帯が欠損したものと考えられる。さらに，隆帯上には１条の沈線を施している。また，隆帯上に刺突列を施しているところもある。胎土は細粒が目立ち，やや器壁も厚く作られている。

なお，弘前市砂沢遺跡の砂沢式期の器種には文様構成で類似した蓋形土器が認められる。しかし，248は形態的に，より古い要素を含んでいると考えられる。

その他の時期の土器（250～252・254）

土器全体の中では極くわずかであるが，縄文時代後期に相当する土器片が４点出土している。

250・251は深鉢形で，十腰内Ⅰ式に相当する。250は幅の広い沈線文を施す。251は磨消縄文による丁寧なミガキ痕と櫛状工具による渦巻文が見られる。

252は丸底鉢形で，腰部に刺突列が見られる。十腰内Ⅲ式に相当するであろうか。

254は深鉢形で，後期末葉の十腰内Ⅴ式に相当する。２条の平行沈線文の中に連続した刺突列が見られる。

〈土製品〉

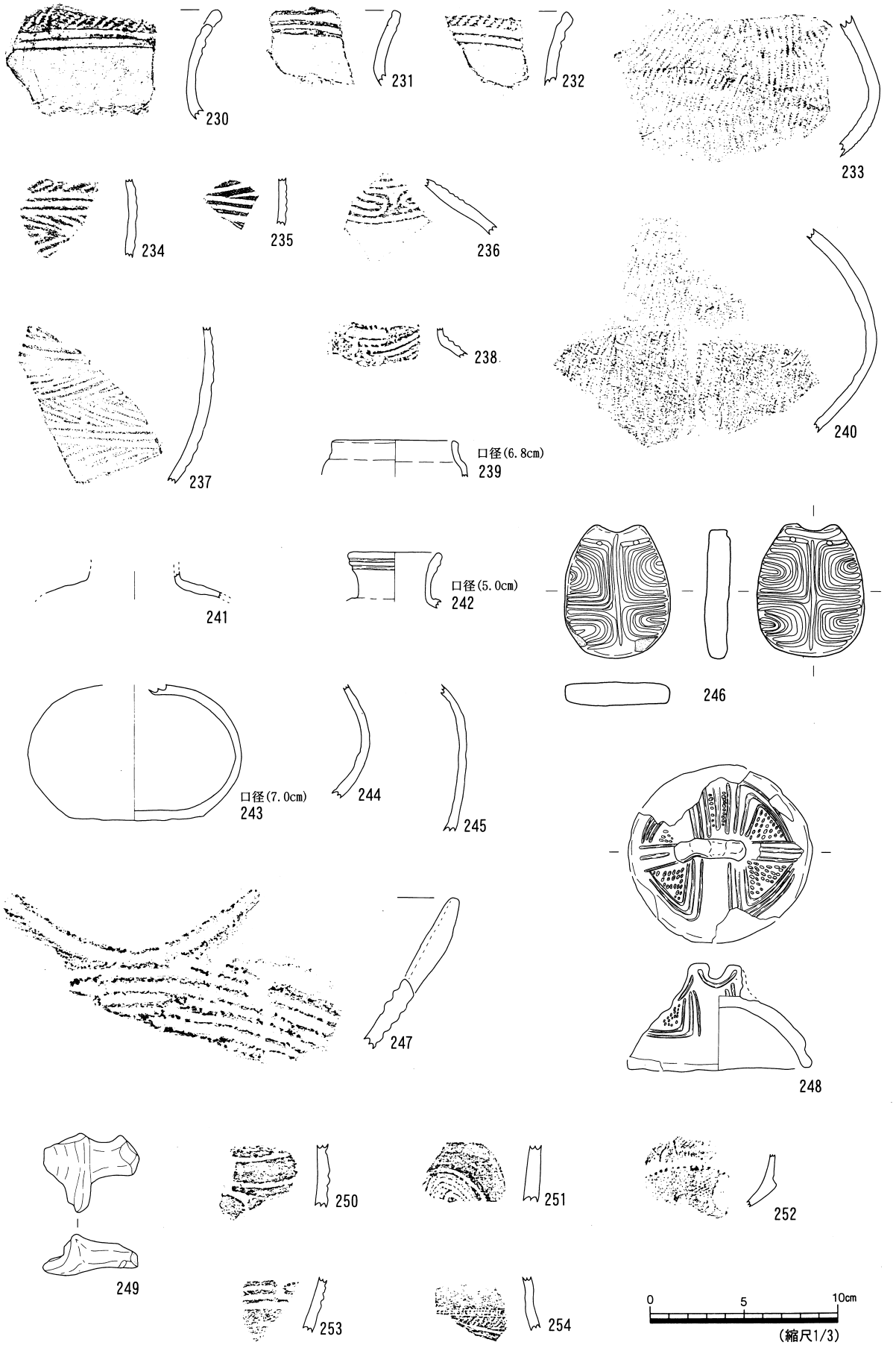
土製品の出土は非常に少なく，土版とスプーン形土製品と考えられるものが，それぞれ１点ずつ出土している。

土版（246）

246は縦7.2cm，横5.6cm，厚さ１cmの大きさをもつ楕円形の土版（板状製品）である。楕円形の一端はくぼみを有しており，これが上端となろう。上端部には２個一対の直径２mm程の貫通孔を有する。渦巻き状に彫刻された文様が左右対称に４個見られる。これは表裏両面に同じ模様をもつため，どちらが表裏なのか俄かに判別できない。胎土はやや粗い砂粒が目立つが，極めて精緻な彫刻を施している。刻み込まれた渦巻き文の中に赤色顔料が塗布された痕跡が確認できる。用途としては貫通孔に紐を通して，ペンダントとして使用していた可能性が高く，信仰に関わるもの（携帯用の護符）であろう。

スプーン形製品（249）

249はスプーン形土製品の柄の部分と推され，皿形の箇所が欠損している。また，柄の先端も欠損している。胎土は粗い砂粒が目立ち，やや粗雑な感を受ける。



第22図　壺形・鉢形土器・その他（10）

〈石器〉

今回の調査で出土した石器には，石鏃・尖頭器・石匙・スクレイパー・石錐である剥片石器や磨製石斧・敲石・磨石などの礫石器がある。その他に石器ではないが，遺跡に持ち込まれた黒曜石・赤鉄鉱（ベンガラ）が多く出土する特徴をもつ。土器の出土状況と合わせて考えると，これらの石器はすべて剣吉荒町Ⅰ群（大洞Ａ式新段階～大洞Ａ′式古段階）に伴うものと考えられる。石器等については，時間的な制約もあって実測図の掲載ができず，不十分な内容となっている。詳細については写真と石器観察表で対応していただきたい。ここでは概要を述べるに留めておく。

石鏃（255～272・図版13－１）

19点の石鏃が出土している。石鏃の形態分類については鈴木道之助氏の分類によった（鈴木1991）。これは石鏃基部の形状による分類で，凸基無茎（６点），凸基有茎（10点），平基有茎（２点）となる。これらの石材はすべて珪質頁岩である。石鏃は使用されたためであろうか，先端や基部が欠損しているものが多い。

尖頭器（272・図版13－１）

272は全長44.3㎜，幅27.8㎜であり，大ぶりな石鏃と比べると長さはさほど変わらないが，より幅広で扁平なものであることから，石鏃と区別した。これは先端部だけ刃部調整が見られないことから，製作途中のものと思われる。石材は珪質頁岩である。

石匙（274～277・図版13－２）

４点の石匙が出土している。柄の主軸が刃部と平行する縦型石匙１点（274），柄の主軸が刃部と直交する横型石匙２点（275・276），横型石匙の柄部分と思われるもの１点（277）が出土している。ただし，横型石匙２点は刃部調整を全く行っておらず，連続した小剥離の使用痕のみが認められる。縦型石匙は一部に欠損はあるが，長辺に刃部両面調整，短辺に片面調整を丁寧に行っている。石材は玉髄１点（276）のほか，残り３点はすべて珪質頁岩である。

スクレーパー（278～282・図版13－２）

刃部調整がなされている剥片が５点出土している。石材はすべて珪質頁岩である。

磨製石斧（283～284・図版13－２）

２点の磨製石斧が出土しており，どちらも欠損している。283は蛤刃形の刃部が残る。石材は頁岩である。284は基部のみが残る。石材は緑色細粒凝灰岩である。

敲石（287～298・図版14）

12点の敲石が出土している。敲石は肉厚で，楕円形や球形を呈した自然礫（川原石）を用いている。大きさは縦7.6cm～11.1cm，横5.3cm～8.8cm，厚さ2.9cm～4.8cm，重さ262ｇ～600ｇの範囲におさまる。ちょうど片手の中に余る大きさである。後述する磨石とは明確な法量差がある。これらの敲石は打痕による明瞭な敲きの痕跡だけでなく，擦痕も認められるものが多く，二つの機能を備えているものが多い。また，打痕によって大きな窪みを有する凹石と呼ぶべきものもある。さらに，石錘と思われる礫の四方を大きく窪ませものがある（292・296）。石材には流紋岩，安山岩が多く，これに頁岩が少量伴う。

磨石（299～379・図15、16）

81点の磨石が出土している。本遺跡から出土した石器の中で，最も出土量が多い。ここで磨石としたものは，形状が扁平で楕円形・長楕円形とした自然礫（川原石）である。大きさは縦4.9cm～9.8cm，横1.9cm～5.2cm，厚さ0.5cm～1.9cm，重さ14ｇ～128ｇの範囲におさまる。ちょうど片手に包み込むことができる大きさで，前述した敲石に比べて小さい。磨石は端部に面を作るほど擦痕が明瞭になるものが多い。また，磨石の平面や長辺に当たる側面にも明瞭な打痕があり，敲石としても利用されている。石材には頁岩が多く，安山岩，流紋岩が少量伴う。ここでは法量差と主要な機能の違いによって，敲石と区別した。

自然孔石（285・286）

ここでは人為的ではなく，自然に貫通した孔が認められるものを自然孔石とした。２点確認されているが，石質はすべて頁岩である。こうした自然に貫通した孔がある石は七里長浜の海岸で採取することができるが，何らかの理由で，遺跡に持ち込まれたものと推される。

玉材原石について（巻首図版）

白緑色を呈する玉砂利で，穿孔途中である未貫通の玉材１点を発見した。そこで，改めて調べ直したところ，玉材と推される原石が15点もあることが分かった。石材については肉眼観察では明確にはできなかったが，ヒスイ或いは他の石材の可能性も考えられるとの所見をいただいた。今後は自然科学分析による石材の産地同定は行っていきたい。

黒曜石について（巻首図版）

黒曜石はＩＡ地区で84点（重量398ｇ），ＩＢ地区で14点（重量45.8ｇ）が出土している。黒曜石の大半はフレイクであり，ＩＡ地区から石錐１点，石鏃１点の計２点の石器が出土しただけである。しかし，大半の石質は気泡が多く，製品として利用できなかったと思われる。本遺跡の近辺には日本海側に面した七里長浜（出来島）に黒曜石の産地が知られている（鈴木・新戸部1983）。恐らく七里長浜産の黒曜石が多く持ち込まれたものと推される。

しかし，381の石錐（巻首図版）は七里長浜産と考えられる黒曜石とは明らかに石質が異なっており，七里長浜産以外の黒曜石も含まれているとの所見をいただいた。

赤鉄鉱（ベンガラ）について（巻首図版）

ベンガラの原石である赤鉄鉱はＩＡ地区で36点（重量939.6ｇ），ＩＢ地区で５点（重量256.2ｇ）出土している。遺跡近辺で赤鉄鉱を産出する場所は，今別町赤根沢産が知られており，ここから持ち込まれた可能性が高いと考えられる。また，赤色顔料を塗布した遺物には精製の浅鉢形土器，土版など数点の特殊品に認められ，ベンガラ（第二酸化鉄）を用いた可能性が高い。

第Ⅴ章　まとめ

ここでは平成11・12年度に実施した岩井・大沼遺跡の発掘調査の概要をまとめる。

1．調査の結果，第Ｉ地区から多くの破損した土器や石器・剥片等の遺物が出土した。第Ｉ－Ａ地区では良好な状態で遺物包含層が残されていたものの，第Ｉ－Ｂ地区では大きく撹乱を受けていた。また，占地を見ると，Ａ地区は標高20mほどの丘陵緩斜面に当たっており，旧湖沼（大沼）に向かって緩やかに下る緩斜面にあることから，「土器捨て場」であったと考えられる。なお，遺構は確認できなかったが，溝状に走る風倒木痕が９箇所ほど見つかっている。

2．土器型式は浅鉢形土器に見られる変形工字文の主文様から，縄文時代晩期末葉の大洞Ａ式から大洞Ａ′式の間（大洞Ａ式新段階～大洞Ａ′式古段階）に位置するもので，工藤竹久氏の分類では剣吉荒町Ｉ群に相当する土器型式が主体的に出土している。

また，管見の限りでは，縄文後期の土器を４点確認したものの，その他の時期の土器を全く含まないまとまりのある一括性の高い土器群と考えられる。津軽地域における当該期の良好な資料を提示できるであろう。器種構成には深鉢形（甕形も含む），（台付）鉢形，（台付）浅鉢形，壺形土器，蓋形土器がある。その他，土製品には土版，スプーン形製品などの特殊品も認められた。ここでは，後続する砂沢式（大洞Ａ′式新段階）の範疇に含まれる土器は認められなかった。また，遠賀川系土器の搬入も認められない。

周辺には直線距離で約１㎞の所に五月女萢遺跡という縄文時代晩期前葉～後葉（大洞Ｂ式～大洞Ａ式）を中心とした大規模遺跡がある。今後，五月女萢遺跡から岩井・大沼遺跡への縄文人の集落移動だけでなく，連続した土器型式の変遷を理解する手助けとなるであろう。

3．石器には，石鏃・尖頭器・石匙・石錐・スクレイパーである剥片石器や磨製石斧・敲石・磨石などの礫石器がある。特に磨石の出土が最も多い。その他に石器ではないが，遺跡に持ち込まれた黒曜石・赤鉄鉱（ベンガラ）が多く出土するという特徴をもつ。土器の出土状況と合わせて考えると，ほとんどの石器は縄文時代晩期末葉に伴うものと考えられる。

4．大沼・岩井遺跡の集落がどこに営まれていたかは，地形の変化も激しく容易に判断することができない。当初，集落が存在する可能性が最も高いと推定されていた大沼北岸の丘陵上（第Ⅱ地区）は，試掘調査の結果では全く遺構・遺物を検出することができなかった。そこで，本調査で確認した大沼南岸の土器捨て場の周辺に集落を求めるとすると，さらに南の谷地形を挟んだ現在の市浦中学校の敷地内が最も有力視される。理由として，周辺は標高25mほどで，地形的には最も高い場所に位置しており，広い平地を確保しているからである。さらに不確かな情報ではあるが，かつて市浦中学校の校舎新築時に縄文土器が出土したと言われており，今後は分布調査や踏査によって，遺跡の範囲・時期等を含めた実態を把握していきたい。

《引用・参考文献》

青森県教育委員会　1999『十腰内(1)遺跡―県営津軽中部広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告―』青森県埋蔵文化財調査報告書　第261号

青森県立郷土館　1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』

青森県立郷土館　1988『名川町剣吉荒町遺跡(第２地区)発掘調査報告書』

工藤竹久　1976「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72－４

工藤竹久・高島芳弘　1986「是川中居遺跡出土の縄文時代晩期終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館研究紀要』第２号

市浦村教育委員会　1983「市浦村五月女萢遺跡」

鈴木克彦　1981「青森県における亀ヶ岡文化研究の現状と課題」『考古風土記』第６号

鈴木克彦・新戸部隆　1983「日本海七里長浜の黒曜石原石採取踏査」

鈴木道之助　1991『図録・石器入門事典〈縄文〉』

須藤隆　1999『山内清男考古資料10　岩手県足沢遺跡資料』奈良国立文化財研究所第50冊

弘前市教育委員会　1987『砂沢遺跡　発掘調査報告書―図版編―』

1990『砂沢遺跡　発掘調査報告書―本文編―』

弘前大学考古学研究室　1981「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について(1)―岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料―」

名川町教育委員会　1984『剣吉荒町遺跡発掘調査報告書』

三厩村教育委員会　1996『宇鉄遺跡　三厩村統合中学校建設工事に係わる発掘調査報告書』

遺物観察表

凡　例

〈土器観察表〉

遺物番号：報告書の通し番号。

器　　種：深鉢・(台付) 鉢・(台付) 浅鉢などの用途・形態別の名称。

胎　　土：土器に含まれる砂粒の形状。胎土の肉眼観察により，「キメ細かい」「細粒目立つ」「粗粒目立つ」の大きく３つに分類した。

外面の主文様・地文等：文様・体部地文の観察。

内面調整：ケズリ及びミガキ調整がある。

備　　考：口縁部の形状。内面の文様。その他の特記事項を記入。

整理番号：調査時の取り上げ番号。遺物の注記番号。

図版写真：遺物写真の掲載図版番号。

〈石器観察表〉

遺物番号：報告書の通し番号。

種　　類：石鏃・尖頭器・石匙・磨製石斧・敲石・磨石などの用途別の名称。

出土位置：グリットＸ・Ｙで表示。

標高（m）：遺物の出土地点の標高。単位はメートル。

形　　態：種類別に形態の特徴を分類。

法　　量：石鏃・尖頭器の法量は全長（cm)・先頭部長（cm)・幅（cm)・厚さ（cm)・重さ（g）で示した。

石匙・スクレイパー・磨製石斧・自然孔石・敲石・磨石は縦（cm)・横（cm)・厚さ（cm)・重さ（g）で示した。

石材（色）：石材及び色調。石材は肉眼観察による。色調観察には「新版・標準土色帳」(農林水産技術会議事務局　1995年）を使用した。

備　　考：特記事項を記入。

整理番号：調査時の取り上げ番号。遺物の注記番号。

図版写真：遺物写真の掲載図版番号。

岩井・大沼遺跡　土器観察表

遺物番号	器　種	胎　土	外面の主文様・地文等	内面調整	備　　考	整理番号	図版写真
1	深鉢	粗砂粒目立つ	無文帯(ナデ),条痕文	丁寧なミガキ		00ⅠA・2827	図版3
2	(深)鉢		無文帯(ナデ),条痕文	ミガキ	波状口縁	00ⅠA・3793	図版5－1
3	深鉢		平行沈線文(1条),条痕文	丁寧なミガキ	波状口縁(口唇に連続したキザミが並ぶ)	00ⅠA・2819	図版5－1
4	深鉢		無文帯(ナデ),LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3167	図版5－1
5	(深)鉢		LR縄文,平行沈線文(1条?)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠB・0874	図版5－1
6	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(3条),LR縄文(縦走)	ミガキ	円形の補修孔あり(1ヶ)	00ⅠA・2728ほか	図版5－1
7	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(5条),条痕文	ミガキ		99ⅠA・0429	図版5－1
8	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(3条),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・2730	図版5－1
9	鉢		平行沈線文(3条),LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ	表面が大きく剥離	00ⅠA・2733	図版5－1
10	鉢		平行沈線文(3条),LR縄文(縦走)	ミガキ		00ⅠA・3014	図版5－1
11	鉢		平行沈線文(4条),LR縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・1330ほか	図版5－1
12	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(9条),LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,突起頂部は押圧によるへこみ,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3457ほか	図版3
13	鉢		平行沈線文(3条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,2つの突起頂部はそれぞれへラ押圧による刻み,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0629	図版5－2
14	鉢		平行沈線文(3条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,突起頂部にはへラ押圧による刻み,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0616	図版5－2
15	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(1ヶ),工字文?,LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・2758	図版5－2
16	鉢		平行沈線文(7条),沈線中に突起(1ヶ)が等間隔で4ヶ並ぶ,LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・2320ほか	図版4
17	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(7条),LR縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0434	図版5－2
18	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(3条),沈線中に2個一対の突起と突起(1ヶ)が並ぶ,LR縄文	ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3994	図版7－2
19	鉢		平行沈線文(4条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3325	図版5－2
20	鉢		平行沈線文(4条),沈線中に突起(1ヶ)が等間隔で3ヶ並ぶ,LR縄文	ケズリ＋ミガキ	山形突起,突起頂部に刻み目(2ヶ),口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・2601ほか	図版7－2
21	鉢		平行沈線文(8条?),沈線中に突起(1ヶ)が等間隔で2ヶ並ぶ	ミガキ	山形突起,突起頂部に刻み目(1ヶ),口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3291	図版5－2
22	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(6条?),沈線中に突起(1ヶ),縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0424	図版5－2
23	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3728	図版5－2
24	鉢		平行沈線文(7条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・2298	図版5－2
25	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(7条),沈線中に突起(2ヶ),無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・4121	図版5－2
26	鉢		平行沈線文(3条),条痕文	丁寧なミガキ		00ⅠA・2779	図版6－1
27	鉢		平行沈線文(3条),条痕文	ケズリ＋ミガキ		99ⅠA・0877	図版6－1
28	鉢		平行沈線文(3条),条痕文	ミガキ		99ⅠA・0319	図版6－1
29	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(4条),工字文,LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3703	図版6－1
30	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(1ヶ),RL縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(2条)	99ⅠA・2105	図版6－1
31	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(4条?),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0760	図版6－1
32	鉢		平行沈線文(3条),条痕文	ミガキ	内面には縦方向に深いケズリ	00ⅠA・3910	図版6－1
33	鉢	細砂粒目立つ	無文帯(丁寧なミガキ),平行沈線文(3条?),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条),34と同一個体	99ⅠA・2554	図版6－1
34	鉢		無文帯(丁寧なミガキ),平行沈線文(3条?),LR縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条),33と同一個体	00ⅠA・3385	図版6－1
35	鉢		平行沈線文(5条?),LR縄文	ミガキ	山形突起,突起頂部にへラ押圧による刻み(1ヶ),口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠB・0710	図版6－1
36	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(5条),沈線中に突起(1ヶ),π字文,地文不明	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条),全体に摩滅が激しい	99ⅠA・0009	図版6－1
37	鉢		平行沈線文(5条),沈線中に突起(1ヶ),地文不明	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条),全体に摩滅が激しい	99ⅠA・2543ほか	図版6－1
38	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(5条),沈線中に突起が等間隔に並ぶ,LR縄文(縦走)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条),完形	00ⅠA・2827	図版3
39	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(5条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	ミガキ		99ⅠA・2345	図版4
40	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(4条),LR縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・2837	図版6－1
41	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(8条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・2497ほか	図版6－1
42	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(6条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,口唇部に沈線(1条),口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・4093	図版6－1
43	鉢		平行沈線文(5条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠB・0523	図版6－1
44	鉢		平行沈線文(5条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	ミガキ		00ⅠA・3405	図版4
45	鉢		平行沈線文(6条),RL縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・4230	図版6－1
46	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・4209	図版6－1
47	鉢		平行沈線文(5条?),縄文	丁寧なミガキ		99ⅠA・2303	図版6－1
48	鉢		平行沈線文(7条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ケズリ＋ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・2318	図版6－2
49	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(3条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	山形突起,突起頂部に刻み目(1ヶ),口縁内側に平行沈線文(2条)	99ⅠA・0617	図版6－2
50	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(3条),LR縄文	ミガキ		00ⅠA・3192	図版6－2
51	鉢		平行沈線文(8条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・2997	図版6－2
52	鉢		平行沈線文(7条),工字文,LR縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・0099	図版6－2
53	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(5条),沈線中に突起(1ヶ),LR縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・1703	図版6－2
54	鉢		平行沈線文(3条),LR縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・4258	図版6－2
55	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	00ⅠA・3457ほか	図版6－2
56	鉢		平行沈線文(6条),沈線中に突起(1ヶ),地文不明	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠB・0006	図版6－2
57	鉢		平行沈線文(5条),沈線中に突起(2ヶ),LR縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(1条)	99ⅠA・1945	図版6－2

遺物番号	器　種	胎　土	外面の主文様・地文等	内面調整	備　　考	整理番号	図版写真
58	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(４条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2880	図版6－2
59	鉢		平行沈線文(４条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3193	図版6－2
60	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(６条),沈線中に突起(１ヶ),工字文,ＬＲ縄文(縦走)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＢ・0750	図版6－2
61	鉢		平行沈線文(６条),沈線中に突起(１ヶ),ＲＬ縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0200	図版6－2
62	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(７条),ＬＲ縄文(縦走)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＢ・0350	図版8－1
63	鉢		平行沈線文(４条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3203	図版6－2
64	鉢		平行沈線文(４条？)	丁寧なミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3121	図版6－2
65	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(７条)	ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条),赤色顔料付着	99ＩＡ・2356	図版8－1
66	鉢		無文帯,平行沈線文(２条?),沈線中に２個一対の突起,ＬＲ縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2832	図版6－2
67	鉢		平行沈線文(４条),ＬＲ縄文	ケズリのみ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0528	図版6－2
68	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(７条？),ＬＲ縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0432	図版8－1
69	鉢		平行沈線文(２条？),ＬＲ縄文	ミガキ	山形突起,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2663	図版8－1
70	鉢		平行沈線文(５条？),沈線中に２個一対の突起,縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3067	図版8－1
71	鉢		平行沈線文(３条？),縄文	丁寧なミガキ		00ＩＡ・3750	図版8－1
72	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(８条？),地文不明	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3323	図版6－2
73	鉢		平行沈線文(７条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0465	図版8－1
74	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(３条),ＲＬ縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3207	図版8－1
75	鉢		平行沈線文(６条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	山形突起・口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0734	図版6－2
76	鉢		平行沈線文(３条？),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＢ・0744	図版8－1
77	鉢		平行沈線文(５条？),ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0016	図版8－1
78	鉢		無文帯(ナデ),平行沈線文(３条？),ＬＲ縄文	ケズリ＋ミガキ	山形突起・口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3119	図版8－1
79	鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文(５条),沈線中に突起(１ヶ),ＬＲ縄文	ミガキ		99ＩＡ・2342	図版8－1
80	鉢	キメ細かい	平行沈線文(３条？),ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ			図版8－1
81	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(４条),沈線中に突起(１ヶ),縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2847	図版8－1
82	鉢		平行沈線文(５条？),沈線中に突起(１ヶ),地文不明	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0377	図版8－1
83	鉢		平行沈線文(４条？),ＬＲ縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・2326	図版8－1
84	鉢		平行沈線文(６条？),沈線中に突起(１ヶ),縄文	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・2302	図版8－1
85	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条),胴部に２個一対の補修孔,口縁に補修孔１ヶ,台付の可能性もあり	99ＩＡ・2013ほか	図版3
86	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2827	図版4
87	浅鉢		変形工字文,無文(ミガキ)	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2997	図版7－1
88	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文,ＲＬ縄文	ミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条),全体に摩滅が激しい,金雲母が目立つ	00ＩＡ・4140	図版7－1
89	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	山形突起,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条),黒色で光沢あり	99ＩＡ・2503ほか	図版4
90	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文,ＲＬ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条),金雲母が目立つ		図版7－1
91	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0072ほか	図版7－1
92	浅鉢	細砂粒目立つ	無文帯(ナデ),変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3191	図版7－2
93	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文？,縄文	ケズリ＋ミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条),全体に摩滅が著しい	00ＩＡ・4298	図版7－2
94	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3137ほか	図版7－2
95	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・1821ほか	図版7－2
96	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文,地文不明	丁寧なミガキ	山形突起,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・2889	図版7－1
97	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0039	図版7－1
98	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・1948	図版7－2
99	浅鉢		変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3191	図版7－1
100	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0994	図版7－2
101	浅鉢		変形工字文,無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条),黒色処理で光沢あり	99ＩＡ・2526	図版7－2
102	浅鉢		変形工字文,地文不明	ケズリ＋ミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・4334	図版7－2
103	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文,無文(ミガキ)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条),全体に摩滅が激しい	99ＩＡ・0741	図版5－2
104	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＢ・0192	図版5－2
105	浅鉢	細砂粒目立つ	π字文,無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・2265	図版8－2
106	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文	丁寧なミガキ		99ＩＡ・1832	図版5－2
107	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文,地文不明	ミガキ		00ＩＡ・4223	図版8－2
108	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文？,地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁？,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0318	図版8－2
109	(浅)鉢	キメ細かい	変形工字文,ＬＲ縄文(縦走)	ミガキ	波状口縁,口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・4272	図版8－2
110	浅鉢		変形工字文,地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁,口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・1826	図版8－2
111	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文,地文不明	丁寧なミガキ	口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0451	図版8－2
112	浅鉢	キメ細かい	変形工字文,無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口唇部に沈線(１条),口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＡ・0401	図版8－2
113	浅鉢		逆π字文？,無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	00ＩＡ・3112	図版8－2
114	鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文(７条？),地文不明	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文(１条)	99ＩＢ・0310	図版8－2

遺物番号	器　種	胎　土	外面の主文様・地文等	内面調整	備　　考	整理番号	図版写真
115	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0157	図版8－2
116	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2121	図版8－2
117	浅鉢		変形工字文，ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＢ・0470	図版8－2
118	浅鉢	細砂粒目立つ	工字文？，縄文	ミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・4191	図版8－2
119	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条），全体に摩滅が激しい	00ＩＡ・4250	図版8－1
120	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	ケズリ＋ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・2785	図版8－2
121	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0856	図版8－2
122	浅鉢		変形工字文(縄文残る)，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＢ・0648	図版8－2
123	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1265	図版8－1
124	浅鉢		平行沈線文（４条），ＬＲ縄文	ミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3548	図版8－1
125	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3117	図版8－2
126	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁？，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1806	図版8－2
127	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文，無文(ミガキ)	ミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条），全体に摩滅が激しい	00ＩＡ・4358	図版8－2
128	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2405	図版8－2
129	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1217	図版8－1
130	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0396	図版8－1
131	浅鉢	細砂粒目立つ	無文帯(ナデ)，平行沈線文（４条），縄文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3593	図版8－1
132	浅鉢	キメ細かい	変形工字文？，地文不明	丁寧なミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1840	図版8－2
133	浅鉢		変形工字文，無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3891	図版8－2
134	浅鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文？，ＬＲ縄文	丁寧なミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1320	図版8－1
135	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条），黒色処理で光沢あり	00ＩＡ・3591	図版8－1
136	浅鉢	キメ細かい	変形工字文(縄文残る)，地文不明	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1972	図版8－1
137	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2498	図版8－1
138	浅鉢		変形工字文(縄文残る)，地文不明	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2019	図版8－1
139	鉢		工字文，地文不明	ケズリ＋ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3818	図版8－1
140	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	ミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0669	図版8－1
141	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3334	図版8－1
142	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁？，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3032	図版8－1
143	浅鉢		変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3380	図版8－1
144	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，地文不明	丁寧なミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3404	図版8－2
145	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，地文不明	ケズリ＋ミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・4310	図版8－2
146	浅鉢		変形工字文？，地文不明	丁寧なミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3185	図版8－1
147	浅鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文？（４条），縄文	ミガキ			図版8－1
148	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・2777	図版3
149	浅鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文（４条），工字文，縄文？，底部に沈線（１条）	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条），全体に摩滅が激しい	00ＩＡ・3189	図版9－1
150	浅鉢	キメ細かい	無文帯，π字文，ＲＬ縄文	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2157	図版9－1
151	浅鉢	細砂粒目立つ	平行沈線文（４条），ＲＬ縄文(縦走)	ミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＢ・0517	図版9－1
152	浅鉢	粗砂粒目立つ	工字文，ＲＬ縄文(縦走)	ミガキ	波状口縁，頂部にヘラ押圧による刻み，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＢ・0266	図版9－2
153	浅鉢		変形工字文(沈線中に２個一対の突起)，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0591	図版9－2
154	浅鉢	細砂粒目立つ	π字文，無文(丁寧なミガキ)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0378	図版9－2
155	浅鉢		変形工字文，無文(丁寧なミガキ)	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・1142	図版9－2
156	浅鉢	キメ細かい	π字文，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3347	図版9－2
157	浅鉢	細砂粒目立つ	π字文，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0451	図版9－2
158	浅鉢		π字文？，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0452	図版9－2
159	浅鉢		π字文，無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・0166	図版9－2
160	浅鉢	粗砂粒目立つ	平行沈線文（３条），ＬＲ縄文(縦走)	丁寧なミガキ		99ＩＡ・1862	図版9－2
161	浅鉢	キメ細かい	平行沈線文，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・2989	図版9－2
162	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，無文(丁寧なミガキ)	ミガキ	波状口縁，口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3045	図版9－2
163	浅鉢	キメ細かい	無文帯，逆π字文	ミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条），円形の補修孔（１ヶ）	00ＩＡ・3260	図版9－2
164	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線（１条）	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3380	図版9－1
165	浅鉢	キメ細かい	変形工字文，無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線（１条）	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	00ＩＡ・3985	図版9－1
166	浅鉢	細砂粒目立つ	変形工字文，無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に平行沈線文（１条）	99ＩＡ・2128	図版9－2
167	浅鉢		変形工字文？，無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線（１条）	丁寧なミガキ		99ＩＡ・2523	図版9－2
168	浅鉢		無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線（１条）	丁寧なミガキ		99ＩＡ・2500	図版9－2
169	浅鉢	粗砂粒目立つ	変形工字文(胴部全面に施文)	ミガキ	口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（２条），全体に摩滅が激しい	00ＩＡ・2889ほか	図版9－1
170	浅鉢		工字文，縄文	ミガキ	波状口縁，口唇部に沈線（１条），口縁内側に平行沈線文（２条）	00ＩＡ・2880	図版9－2
171	鉢		ＬＲ縄文	ケズリ		00ＩＡ・3399	図版12
172	鉢		ＬＲ縄文	ミガキ		00ＩＡ・2991	図版12
173	鉢		ＬＲ縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ		00ＩＡ・3373	図版12

遺物番号	器　種	胎　土	外面の主文様・地文等	内面調整	備　　考	整理番号	図版写真
174	鉢	細砂粒目立つ	地文不明		摩滅が激しい，(ミニチュア土器か？)	99ⅠA・0249	図版11－1
175	鉢		ＬＲ縄文(縦走)	ミガキ		00ⅠA・2727	図版11－1
176	鉢	粗砂粒目立つ	ＬＲ縄文	ケズリ＋ミガキ		99ⅠA・0994	図版11－2
177	鉢		ＲＬ縄文	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・3298	図版11－2
178	鉢		ＬＲ縄文	ミガキ		00ⅠA・3428	図版12
179	鉢	細砂粒目立つ	地文不明	粗いケズリ	摩滅が激しい	00ⅠA・3582	図版11－1
180	鉢		ＲＬ縄文	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・4237	図版11－1
181	浅鉢		ＬＲ縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・3260	図版11－2
182	鉢		ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)	粗いケズリ		99ⅠA・0637	図版12
183	(浅)鉢		縄文，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・3241	図版11－1
184	鉢		ＬＲ縄文(縦走)，底部に沈線(１条)	ミガキ		00ⅠA・4214	図版11－1
185	鉢	粗砂粒目立つ	ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・2837	図版12
186	鉢	細砂粒目立つ	縄文，底部に沈線(１条)	ミガキ		00ⅠA・2933	図版11－1
187	鉢		ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・4078	図版11－1
188	鉢		ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)	ミガキ		00ⅠA・3334	図版11－1
189	浅鉢		縄文	丁寧なミガキ		00ⅠA・3236	図版11－2
190	浅鉢		ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)		内面の摩滅が激しい	00ⅠA・2777	図版11－1
191	浅鉢	キメ細かい	無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線(１条)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3173	図版11－1
192	浅鉢		無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線(１条)	丁寧なミガキ		99ⅠA・1323	図版11－1
193	(浅)鉢	細砂粒目立つ	ＬＲ縄文，底部に沈線(１条)	ケズリ		00ⅠA・3241	図版11－1
194	壺	粗砂粒目立つ	無文(ケズリ＋ミガキ)	ミガキ	241・244・245と同じ胎土であり，同一個体の可能性がある。	00ⅠA・2989	図版12
195	浅鉢	キメ細かい	ＬＲ縄文(縦走)，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・3333	図版11－2
196	浅鉢		無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		99ⅠA・1376	図版11－1
197	鉢		無文(丁寧な縦方向のミガキ)	丁寧なミガキ	内底面に漆膜？が付着する。小型品	00ⅠA・2994	図版11－1
198	浅鉢		無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線(１条)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3315	図版11－1
199	浅鉢	細砂粒目立つ	無文(丁寧なミガキ)	ミガキ		00ⅠA・3267	図版11－1
200	浅鉢		ＬＲ縄文(縦走)，底部に沈線(１条)	ケズリ＋ミガキ		00ⅠA・3563	図版11－2
201	鉢	キメ細かい	無文(ミガキ)	ミガキ	ミニチュア土器か？	00ⅠA・3981	図版11－1
202	壺	粗砂粒目立つ	無文(ミガキ)	ミガキ	内面が摩滅する	00ⅠA・2986	図版11－2
203	浅鉢	キメ細かい	無文(丁寧なミガキ)，底部に沈線(１条)	丁寧なミガキ		00ⅠA・2964	図版11－1
204	(深)鉢	粗砂粒目立つ	無文(丁寧なミガキ)	ケズリ	雛形	99ⅠA・2111	図版9－2
205	壺		無文(横方向のケズリ＋縦方向の丁寧なミガキ)	ミガキ		00ⅠA・2989	図版9－1
206	(深)鉢		無文(ミガキ)	ケズリ	雛形	99ⅠA・1107	図版9－1
207	台付(鉢)		台部無文(丁寧なミガキ)，ＲＬ縄文(縦走)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3466	図版12
208	台付(鉢)		台部無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ		99ⅠB・0124	図版12
209	台付(鉢)		縄文		摩滅が激しい	99ⅠA・2561ほか	図版12
210	台付(鉢)		ＬＲ縄文(縦走)，台部無文(ミガキ)		摩滅が激しい	99ⅠA・2089	図版12
211	台付(鉢)		ＬＲ縄文(縦走)，台部無文(ミガキ)	ミガキ		00ⅠA・3369	図版12
212	台付(鉢)	細砂粒目立つ	台部無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ		00ⅠA・2970	図版12
213	台付(鉢)	粗砂粒目立つ	台部無文(丁寧なミガキ)	ミガキ		00ⅠA・4247	図版12
214	台付(鉢)	キメ細かい	台部無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ		99ⅠA・2506	図版12
215	台付(鉢)	細砂粒目立つ	台部無文(丁寧なミガキ)	丁寧なミガキ		00ⅠA・3278	図版12
216	台付(鉢)	粗砂粒目立つ	台部無文(ミガキ)	ミガキ		00ⅠA・3282	図版12
217	台付(鉢)		縄文，台部無文(ミガキ)	ミガキ		00ⅠA・2871	図版12
218	台付(鉢)		台部無文(ミガキ)	ミガキ	内面は摩滅が激しい	99ⅠA・2005	図版12
219	台付(鉢)	細砂粒目立つ	台部無文(ミガキ)	ミガキ		99ⅠA・0214	図版12
220	台付(鉢)		台部無文(ミガキ)	ミガキ		99ⅠA・0336	図版12
221	台付(鉢)		無文(ミガキ)，台部無文(丁寧なミガキ)，平行沈線(１条)	ミガキ		00ⅠA・2959	図版12
222	台付(鉢)		台部無文(ミガキ)	ミガキ		99ⅠB・0139	図版12
223	台付(鉢)		無文(ミガキ)，台部無文(ミガキ)	ミガキ		00ⅠA・4150	図版12
224	台付(鉢)		台部無文(ミガキ)	ミガキ		99ⅠA・0482	図版12
225	台付(鉢)		台部無文(ミガキ)	ミガキ		99ⅠA・1152	図版12
226	台付浅鉢	キメ細かい	平行沈線文(３条)，無文(ケズリ＋ミガキ)，台部無文(ミガキ)	ミガキ	完形	00ⅠA・2731	図版3
227	台付(鉢)	粗砂粒目立つ	台部無文(ミガキ)	ミガキ	台部の摩滅が激しい	00ⅠA・3143	図版12
228	台付(鉢)		縄文，台部中位に平行沈線文(１条)	ケズリ		00ⅠA・3008	図版12
229	台付(鉢)	細砂粒目立つ	台部無文(ミガキ)	ケズリ		00ⅠA・3335	図版12
230	壺	粗砂粒目立つ	ＬＲ縄文，沈線文(２条)，頸部無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁，口縁内側に沈線(１条)	99ⅠA・0895	図版10－2
231	壺	細砂粒目立つ	平行沈線文(２条)，頸部無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	波状口縁，頂部をヘラ押圧による刻み，口縁内側に沈線(１条)	99ⅠA・0997	図版10－2
232	壺	粗砂粒目立つ	ＬＲ縄文，沈線文(２条)，頸部無文(ミガキ)	丁寧なミガキ	口縁内側に沈線(１条)	00ⅠA・2657	図版10－2

遺物番号	器　種	胎　土	外面の主文様・地文等	内面調整	備　　考	整理番号	図版写真
233	壺	細砂粒目立つ	ＬＲ縄文(縦走)	ケズリ		99ＩＡ・0429	図版10－1
234	壺	キメ細かい	矢羽状沈線	ケズリ	赤褐色を呈す	99ＩＡ・1322	図版10－2
235	壺		矢羽状沈線	ミガキ	赤褐色を呈す	99ＩＡ・0504	図版10－2
236	壺	細砂粒目立つ	工字文？，無文(丁寧なミガキ)	粗いケズリ		00ＩＡ・2971	図版10－2
237	壺	キメ細かい	矢羽状沈線	ケズリ＋ミガキ	赤褐色を呈す	99ＩＡ・0305	図版10－2
238	壺	細砂粒目立つ	工字文？	ミガキ	赤褐色を呈す	99ＩＢ・0306	図版10－2
239	鉢		無文	ミガキ	甕形，黒色で光沢あり	99ＩＡ・0392	図版10－2
240	壺		ＬＲ縄文(縦走)	ケズリ＋ミガキ		00ＩＡ・3258	図版10－1
241	壺	キメ細かい	無文(ミガキ)	ケズリ？	摩滅が著しい，赤褐色を呈す	00ＩＡ・3427	図版10－2
242	壺		平行沈線文	ミガキ		00ＩＡ・3435	図版10－2
243	壺		無文(胴部に丁寧なミガキ)	ナデ	底部の摩滅が著しい	99ＩＢ・0275	図版4
244	壺		無文(ミガキ)	ナデ	二次被熱による剥離痕が多数あり，赤褐色を呈す	00ＩＡ・3356	図版10－1
245	壺		無文(ミガキ)	ケズリ		99ＩＡ・2148	図版10－1
246	土版	粗砂粒目立つ	渦巻文が左右対称に計４つ，貫通孔２ヶあり		赤色顔料が付着する	99ＩＡ・0542	図版4
247	大型鉢		平行沈線文	ミガキ	鰭状突起，口縁内側に沈線(２条)，突起内側にも沈線(２条)	00ＩＡ・3461ほか	図版10－1
248	蓋	細砂粒目立つ	三角文，刺突	ミガキ		00ＩＡ・2849	図版3
249	スプーン形	粗砂粒目立つ		ミガキ	柄の部分のみ残存	00ＩＡ・4280	図版10－2
250	深鉢		沈線文	ミガキ	縄文後期(十腰内Ｉ式)	00ＩＡ・4165	図版10－2
251	深鉢		渦巻文？	丁寧なミガキ	縄文後期(十腰内Ｉ式)	00ＩＡ・2820	図版10－2
252	丸底鉢	細砂粒目立つ	ＬＲ縄文，刺突列	丁寧なミガキ		99ＩＡ・0073	図版10－2
253	浅鉢		工字文	丁寧なミガキ	全体に摩滅が著しい，169と同一個体の可能性あり	00ＩＡ・2861	図版10－2
254	丸底鉢		平行沈線中に刺突列，縄文	ミガキ	縄文後期(十腰内Ｖ式)	00ＩＡ・0101	図版10－2

岩井・大沼遺跡　石器観察表（1）

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量					石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		全長(cm)	先頭部長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
255	石鏃	0.22	35.90	19.916	凸基無茎	3.60	2.16	1.26	0.24	1.40	珪質頁岩(黒)		00ＩＡ・2846	図版13－1
256		−2.76	31.55	19.862	凸基無茎	(3.38)	(1.93)	1.10	0.47	(1.40)	珪質頁岩(褐灰)	基部に欠損。	99ＩＡ・1448	図版13－1
257		21.53	5.70	20.447	凸基無茎	(2.80)	(2.16)	1.10	0.31	(0.60)	珪質頁岩(灰白)	先端が欠損。	00ＩＢ・0860	図版13－1
258		−7.60	30.52	19.490	凸基無茎	2.59	1.91	0.86	0.37	0.80	珪質頁岩(にぶい黄)		99ＩＡ・1495	図版13－1
259		11.42	10.60	20.491	凸基無茎	(2.52)	(1.54)	1.31	0.59	(1.40)	珪質頁岩(黒)	先端が欠損。	99ＩＢ・0135	図版13－1
260		9.83	8.20	20.498	凸基有茎	(3.08)	(1.95)	1.16	0.50	(1.60)	珪質頁岩(黒褐)	先端が欠損。	99ＩＢ・0080	図版13－1
261		6.70	33.72	20.417	凸基有茎	3.02	2.09	1.38	0.50	1.40	珪質頁岩(灰黄褐)		99ＩＡ・1758	図版13－1
262		5.84	37.60	20.251	凸基有茎	2.41	1.43	1.33	0.36	1.00	珪質頁岩(灰白)		99ＩＡ・0553	図版13－1
263		1.90	34.52	19.736	凸基有茎	(2.35)	(2.26)	1.57	0.39	(1.60)	珪質頁岩(褐灰)	先端が欠損。	99ＩＡ・0395	図版13－1
264		0.33	35.08	19.906	凸基有茎	2.49	1.85	1.96	0.40	1.00	珪質頁岩(灰オリーブ)		00ＩＡ・2885	図版13－1
265		−0.78	29.33	19.893	凸基有茎	(2.38)	(1.22)	1.62	0.69	(2.40)	珪質頁岩(褐灰)	先端が欠損。	00ＩＡ・3956	図版13－1
266		−1.50	37.64	19.623	凸基有茎	(4.67)	(3.05)	1.50	0.54	(3.40)	珪質頁岩(黄灰)	先端が欠損。	99ＩＡ・1145	図版13－1
267		5.06	37.66	20.168	凸基有茎	3.84	2.94	1.36	0.40	1.60	珪質頁岩(灰褐)		00ＩＡ・2681	図版13－1
268		4.86	31.53	20.329	凸基有茎	3.35	2.30	1.30	0.38	1.20	珪質頁岩(黒)		00ＩＡ・3237	図版13－1
269		1.10	29.90	20.164	凸基無茎	(3.05)	—	(0.88)	0.37	(0.60)	珪質頁岩(黒)	基部に欠損。	99ＩＡ・2344	図版13－1
270		21.02	8.70	20.682	平基有茎	4.43	3.71	1.46	0.60	3.40	珪質頁岩(灰黄褐)		99ＩＢ・0323	図版13－1
271		21.28	8.38	20.588	平基有茎	(3.29)	(2.30)	1.65	0.47	(2.40)	珪質頁岩(灰褐)	先端が欠損。	00ＩＢ・0758	図版13－1
272		22.50	8.18	20.543	凸基有茎	(1.91)	(1.14)	0.95	0.41	(0.80)	珪質頁岩(オリーブ灰)	先端が欠損。	00ＩＢ・0748	図版13－1
273	尖頭器	−0.14	34.80	19.811	—	4.43	2.86	2.78	0.60	7.40	珪質頁岩(明褐灰)	製作途中か。	99ＩＡ・0413	図版13－1

岩井・大沼遺跡　石器観察表（2）

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量				石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
274	石匙	0.97	38.04	19.820	縦型	8.45	4.78	1.20	29.2	珪質頁岩(褐)	長辺に刃部両面調整で，短辺に片面調整。一部に欠損あり。	00ＩＡ・4261	図版13－2
275		3.77	14.65	20.383	横型	6.25	7.80	1.74	61.6	珪質頁岩(暗灰黄)	長辺の縁辺部は連続した小剥離の使用痕のみで，明瞭な刃部を持たない。	99ＩＢ・0410	図版13－2
276		4.86	31.99	20.304	横型	6.53	9.88	1.64	78.4	玉髄(褐灰)		00ＩＡ・3206	図版13－2
277		−0.76	7.64	20.403	(横型)	(3.15)	1.20	0.83	(7.20)	珪質頁岩(灰黄)	つまみ部だけ残存。	00ＩＢ・0662	図版13－2
278	スクレイパー	−1.20	34.16	19.718	—	(4.43)	3.76	1.05	(18.4)	珪質頁岩(黒褐)	縦長剥片が半分に欠損か。両側縁には刃部両面及び片面調整。	99ＩＡ・0370	図版13－2
279		−0.50	36.20	19.923	—	3.95	6.25	7.70	21.2	珪質頁岩(黒褐)	縦長剥片。先が鋭角に尖った二辺には刃部両面調整。	99ＩＡ・0187	図版13－2
280		10.43	10.10	20.487	—	(4.12)	3.94	9.40	(17.8)	珪質頁岩(黒褐)	両側縁には刃部片面調整。	99ＩＢ・0590	図版13－2

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量				石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
281	スクレイパー	18.02	12.15	20.651	—	(3.85)	(2.90)	0.80	(8.6)	珪質頁岩(黒褐)	縦長剥片が欠損か。先が鋭角に尖った二辺には刃部両面調整。	99ⅠB・0242	図版13－2
282		6.26	33.10	20.426	—	2.65	2.67	0.70	6.0	珪質頁岩(黄灰)	側縁には刃部両面調整。	99ⅠA・1743	図版13－2
283	磨製石斧	−3.52	34.05	19.403	—	(4.33)	(5.56)	(1.73)	(48.8)	頁岩(オリーブ灰)	蛤刃。刃部のみ残存。入念に研磨されている。	99ⅠA・1370	図版13－2
284		23.06	4.44	20.202	—	(3.57)	(2.20)	(1.42)	(13.6)	緑色細粒凝灰岩(暗緑灰)	基部のみ残存。入念に研磨されている。	99ⅠB・0343	図版13－2
285	自然孔石	5.45	36.64	20.161	—	3.66	2.84	1.16	15.8	頁岩(褐灰)	径６～10mmの自然孔	00ⅠA・3620	図版13－2
286		−1.25	34.02	19.553	—	3.68	2.75	1.90	19.2	頁岩(にぶい黄)	径４mmの自然孔	99ⅠA・0367	図版13－2
287	敲石	11.84	9.05	20.518	肉厚・(楕円形)	(8.92)	(7.15)	3.20	262.4	安山岩(浅黄)	両面に強い敲き痕。半分に欠損。	99ⅠB・0164	図版14－1
288		1.78	40.84	19.961	肉厚・楕円形	11.10	8.50	4.80	600.0	安山岩(暗赤灰)	両端部・両側縁に敲き痕。両面に擦痕。	99ⅠA・0226	図版14－1
289		2.30	32.56	20.091	肉厚・楕円形	9.05	6.73	3.25	297.0	頁岩(緑黒)	両端部・両側縁に敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。	99ⅠA・3070	図版14－1
290		3.62	35.44	19.966	肉厚・楕円形	10.80	8.30	3.20	431.8	流紋岩　(暗紫灰)	両面に敲き痕＋擦痕。	00ⅠA・3864	図版14－1
291		5.06	37.66	20.170	肉厚・(楕円形)	(8.02)	8.50	(3.85)	(383.4)	流紋岩　(暗紫灰)	端部・両側縁に敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。半分に欠損。剥離痕多数アリ。	00ⅠA・2680	図版14－1
292		0.10	40.96	19.700	肉厚・楕円形	9.48	6.86	3.80	366.2	流紋岩(にぶい橙)	両端部に敲き痕。両側縁に強い敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。石錘の可能性もあり。	99ⅠA・0602	図版14－1
293		1.10	38.96	19.958	肉厚・やや球形	9.18	8.75	4.22	471.2	安山岩(暗赤灰)	側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	99ⅠA・1088	図版14－2
294		−1.86	34.42	21.182	肉厚・やや球形	7.64	(6.62)	3.34	(245.8)	流紋岩(灰)	両端・側縁に敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。	99ⅠA・0392	図版14－2
295		2.90	41.25	20.081	肉厚・楕円形	10.50	8.20	3.40	432.6	頁岩(オリーブ灰)	端部・両側縁に敲き痕。両面に強い敲き痕で凹む。	99ⅠA・0228	図版14－2
296		3.65	35.36	19.814	肉厚・楕円形	8.87	6.68	4.10	398.4	流紋岩　(暗紫灰)	両端部・両側縁に敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。石錘の可能性もあり。	00ⅠA・4059	図版14－2
297		31.57	10.83	21.261	肉厚・(楕円形)	(10.70)	(5.30)	4.80	(379.6)	安山岩(にぶい黄橙)	端部・側縁に敲き痕。両面に敲き痕＋擦痕。	99ⅠB・0375	図版14－2
298		29.76	9.36	20.906	肉厚・(楕円形)	(9.40)	8.85	2.98	(414.8)	安山岩(オリーブ灰)	両面に敲き痕＋擦痕。	99ⅠB・0383	図版14－2

岩井・大沼遺跡　石器観察表（３）

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量				石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
299	磨石	22.90	4.78	20.455	扁平・長楕円	9.80	2.60	0.95	61.4	頁岩(オリーブ黒)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	99ⅠB・0342	図版15－1
300		5.18	32.04	20.351		8.59	2.80	1.34	65.4	安山岩(暗青灰)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3212	図版15－1
301		−0.90	30.47	19.960		9.20	3.50	1.80	96.8	頁岩(暗青灰)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3093	図版15－1
302		2.44	29.88	20.233		7.37	3.13	1.93	49.8	頁岩(暗灰)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3346	図版15－1
303		20.42	3.98	20.237		7.94	3.40	1.00	54.4	頁岩(暗灰)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	99ⅠB・0518	図版15－1
304		22.38	8.34	20.687		7.55	3.64	1.30	69.2	頁岩(緑黒)	端部に擦痕。	99ⅠB・0335	図版15－1
305		4.84	30.84	20.332		7.50	2.98	0.94	57.8	頁岩(黒褐)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3246	図版15－1
306		−1.56	35.08	19.740		7.22	4.06	0.51	54.4	頁岩(オリーブ黒)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	99ⅠA・0420	図版15－1
307		31.10	9.40	21.155		6.78	4.12	1.19	49.6	頁岩(オリーブ黒)	端部に擦痕。側縁に擦痕。剥離痕１アリ。	99ⅠB・0386	図版15－1
308		2.85	40.94	20.017		7.26	3.24	1.20	44.4	頁岩(暗緑灰)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	99ⅠA・0612	図版15－1
309		−1.32	28.20	20.038		6.17	3.29	1.59	62.6	頁岩(黒)	端部に擦痕。両側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3558	図版15－1
310		22.26	6.90	20.538		9.72	2.87	1.97	70.0	頁岩(緑黒)	端部に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠB・0790	図版15－1
311		−5.26	31.02	19.385		5.64	1.94	0.75	17.2	頁岩(緑黒)	端部に擦痕。	00ⅠA・4159	図版15－1
312		−0.44	30.15	20.010		5.84	3.40	0.98	38.0	頁岩(暗灰)	両端部に擦痕。剥離痕２アリ。	00ⅠA・3426	図版15－1
313		1.30	28.90	20.146		5.72	3.65	0.70	48.4	頁岩(暗オリーブ灰)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3453	図版15－1
314		2.50	39.06	20.143		6.40	3.35	1.14	38.8	頁岩(黒褐)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	99ⅠA・1036	図版15－1
315		0.28	29.57	20.099	扁平・楕円	6.72	5.21	1.34	70.8	頁岩(黒)	両端部に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3443	図版15－1
316		9.13	8.38	20.539	扁平・長楕円	6.67	3.25	1.06	36.0	頁岩(黒)	両端部に擦痕。片面に敲き痕。剥離痕１アリ。	99ⅠB・0437	図版15－2
317		1.86	30.86	20.184		7.54	3.55	1.36	55.4	頁岩(暗紫灰)	端部に擦痕。両側縁に敲き痕。	00ⅠA・3114	図版15－2
318		−2.20	35.30	19.624		7.80	4.38	1.20	65.4	頁岩(暗灰)	端部に弱い擦痕。	00ⅠA・2977	図版15－2
319		5.40	33.38	20.316		7.20	3.99	1.11	48.0	頁岩(黒)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3149	図版15－2
320		4.20	30.30	20.322		8.60	3.48	1.68	72.0	頁岩(黒)	側縁に敲き痕。	00ⅠA・3275	図版15－2
321		−4.90	29.85	19.525		8.98	3.70	1.25	69.0	頁岩(黒)	端部に擦痕。	00ⅠA・4034	図版15－2
322		—	—	—		8.66	4.40	1.66	89.6	頁岩(オリーブ黒)	端部に弱い擦痕。両面に敲き痕。	ⅠB廃土	図版15－2
323		0.28	29.56	20.099	扁平・楕円	5.43	4.37	1.23	46.4	頁岩(黒)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3442	図版15－2
324		−1.04	34.54	19.735	扁平・長楕円	6.04	3.23	0.89	25.0	頁岩(黒)	端部に擦痕。	99ⅠA・0445	図版15－2
325		5.94	31.46	20.275		(4.91)	3.43	1.08	(24.8)	頁岩(暗灰)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。半分に欠損。	00ⅠA・3923	図版15－2
326		0.48	30.15	20.093		6.41	2.85	1.04	32.4	頁岩(オリーブ黒)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3414	図版15－2
327		4.26	1.17	20.319		6.17	2.75	1.02	24.4	頁岩(暗灰)	両端部に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3269	図版15－2
328		−0.22	29.70	20.083	棒状・長楕円	7.27	2.58	1.65	41.4	頁岩(緑黒)	端部に擦痕。	00ⅠA・3434	図版15－2
329		11.90	10.68	20.491	扁平・長楕円	7.05	4.49	1.11	55.4	頁岩(緑黒)	端部に擦痕。	99ⅠB・0490	図版15－2
330		−3.00	35.03	19.474		8.18	3.91	1.74	76.6	安山岩(灰)	端部に弱い擦痕。	00ⅠA・2969	図版15－2
331		0.76	38.42	19.804		5.70	3.32	(0.49)	(15.0)	頁岩(オリーブ黒)	端部に擦痕。片面に敲き痕。半分に欠損。	00ⅠA・2767	図版15－2
332		6.97	33.84	20.439		6.35	3.80	1.06	(40.0)	頁岩(紫灰)	端部に擦痕。片面に敲き痕。	99ⅠA・1684	図版15－2

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量				石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
333	磨石	5.96	31.28	20.352	扁平・長楕円	6.76	3.30	0.95	35.8	安山岩(灰)	端部に擦痕。	00ⅠA・3191	図版15－2
334		5.80	31.14	20.311		6.70	3.65	1.26	49.2	安山岩(暗青灰)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3851	図版15－2
335		2.83	31.44	20.190		6.96	3.79	0.90	(39.8)	頁岩(黄灰)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3313	図版15－2
336		−2.76	34.54	19.548		6.38	3.10	0.74	25.0	頁岩(暗緑灰)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕＋擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・2993	図版15－2
337		0.40	28.36	20.154		7.75	2.98	0.95	36.6	頁岩(にぶい黄)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3472	図版16－1
338		−0.44	30.15	20.020		8.20	4.25	1.09	67.6	頁岩(暗紫灰)	両端部に擦痕。両側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3425	図版16－1
339		−0.22	29.70	20.083		(8.71)	5.26	1.70	(128.6)	頁岩(浅黄)	端部に擦痕。全体が平滑。	00ⅠA・3436	図版16－1
340		−1.56	35.08	20.740		8.76	4.05	1.46	79.8	頁岩(灰)	片面に敲き痕。	99ⅠA・0418	図版16－1
341		−0.22	18.60	20.241		9.27	4.70	1.47	107.2	流紋岩(黄灰)	端部に擦痕。両側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠB・0713	図版16－1
342		−0.70	49.98	20.980		9.46	4.25	1.98	99.4	頁岩(浅黄褐)	端部に擦痕。側縁に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・4275	図版16－1
343		1.38	29.60	19.980		9.27	2.91	0.78	26.8	頁岩(灰オリーブ)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3544	図版16－1
344		−1.14	8.90	20.516	扁平・楕円	6.98	5.53	1.54	(80.0)	頁岩(にぶい黄)	側縁に擦痕。剥離痕４アリ。	00ⅠB・0665	図版16－1
345		3.55	38.68	20.184	扁平・長楕円	7.90	4.70	1.25	71.8	頁岩(灰)	端部に擦痕。側縁に擦痕。両面に敲き痕。	99ⅠA・0832	図版16－1
346		2.76	30.80	20.201		7.89	4.00	1.59	68.2	頁岩(淡黄)	端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3322	図版16－1
347		2.14	38.06	20.030		7.75	4.74	1.65	98.0	頁岩(灰白)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3569	図版16－1
348		0.34	34.67	19.766		8.70	4.14	1.13	71.4	頁岩(灰)	端部に擦痕。両側縁に擦痕＋敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・2877	図版16－1
349		−4.98	31.37	19.510		6.75	2.72	0.73	27.2	頁岩(暗オリーブ灰)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3788	図版16－1
350		1.23	28.46	20.185		5.81	2.95	1.18	32.2	頁岩(にぶい黄)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3459	図版16－1
351		2.50	34.96	20.462		6.55	2.51	0.92	28.0	頁岩(オリーブ灰)	端部に擦痕。	99ⅠA・0260	図版16－1
352		21.52	5.70	20.356		6.17	2.63	0.89	25.2	頁岩(淡黄)	端部に擦痕。	00ⅠB・0863	図版16－1
353		0.16	29.20	20.140		5.71	2.55	0.87	21.8	頁岩(灰オリーブ)	両端部に擦痕。	00ⅠA・3448	図版16－1
354		−0.04	38.48	19.730		5.70	3.05	0.89	23.8	頁岩(オリーブ黄)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・4274	図版16－1
355		−2.70	33.70	19.465		5.69	2.26	0.62	14.0	頁岩(赤灰)	両端部に擦痕。	00ⅠA・3794	図版16－1
356		5.44	32.38	20.349	扁平・楕円	4.93	3.21	0.65	18.4	頁岩(黄褐)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3179	図版16－1
357		4.84	30.84	20.333	扁平・長楕円	7.24	2.18	0.95	32.0	頁岩(黄褐)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3249	図版16－2
358		5.34	31.43	20.371		8.03	3.24	1.22	52.0	頁岩(にぶい黄)	端部に擦痕。両側縁に擦痕＋敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3223	図版16－2
359		5.18	32.04	20.363		(7.93)	3.19	1.00	(41.0)	頁岩(明赤褐)	端部に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・3218	図版16－2
360		−5.20	32.34	19.113		7.18	3.05	1.16	40.0	頁岩(灰黄)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・4146	図版16－2
361		2.08	39.00	19.874		7.88	3.28	1.30	54.4	頁岩(青灰)	両端部に擦痕。片面に敲き痕。	00ⅠA・2734	図版16－2
362		2.83	31.44	20.273		8.97	3.50	0.83	44.4	頁岩(灰黄)	端部に擦痕。	00ⅠA・3312	図版16－2
363		0.68	19.10	20.288		(7.98)	3.80	1.58	(76.6)	安山岩(赤灰)	端部に擦痕及び剥離痕アリ。片面に敲き痕。	00ⅠB・0715	図版16－2
364		−2.38	34.58	19.682		(9.49)	3.87	1.27	(65.8)	安山岩(赤灰)	端部に擦痕。側縁に擦痕。	00ⅠA・2985	図版16－2
365		−0.50	35.48	19.836		6.90	3.45	1.25	44.0	頁岩(黄褐)	両端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・2931	図版16－2
366		20.68	5.38	20.444		7.55	3.45	1.08	47.8	頁岩(灰黄)	端部に擦痕。	99ⅠB・0261	図版16－2
367		22.22	4.70	20.400		7.18	3.18	1.05	40.8	頁岩(紫灰)	端部に擦痕。片面に敲き痕。	99ⅠB・0274	図版16－2
368		2.28	38.82	20.128		7.75	3.68	1.27	60.2	頁岩(にぶい黄)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	99ⅠA・1042	図版16－2
369		2.99	28.78	20.226		7.38	3.09	1.20	46.4	頁岩(灰白)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3391	図版16－2
370		21.76	7.18	20.581		7.18	3.61	1.22	50.2	頁岩(浅黄)	両端部に擦痕。両側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠB・0797	図版16－2
371		0.35	30.37	20.083		6.65	3.91	1.03	47.0	安山岩(灰)	端部に擦痕。両側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3411	図版16－2
372		32.90	9.84	21.267		7.52	3.13	1.10	47.0	頁岩(灰)	端部に擦痕。	99ⅠB・0391	図版16－2
373		6.60	34.20	20.297		6.48	3.12	1.08	36.0	頁岩(灰黄)	両端部に擦痕。側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3623	図版16－2
374		−0.08	35.23	19.864		6.99	3.36	1.03	40.4	頁岩(灰白)	端部に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・2897	図版16－2
375		−0.44	7.92	20.398		7.25	3.64	1.19	51.4	頁岩(黄灰)	両端部に擦痕。両側縁に敲き痕。両面に敲き痕。	00ⅠB・0663	図版16－2
376		4.85	32.66	20.283	扁平・楕円	6.00	3.82	0.86	36.8	頁岩(浅黄)	両端部に擦痕。	00ⅠA・3157	図版16－2
377		4.84	30.84	20.332		6.32	4.71	1.32	56.4	頁岩(にぶい黄橙)	両端部に擦痕。側縁に擦痕。両面に敲き痕。	00ⅠA・3248	図版16－2
378		−0.22	29.70	20.083	扁平・長楕円	7.00	4.34	1.23	54.2	頁岩(にぶい黄)	端部に擦痕。側縁に擦痕。	00ⅠA・3437	図版16－2
379		2.48	30.54	20.177	扁平・楕円	6.24	5.20	1.30	71.6	頁岩(にぶい黄)	端部に擦痕。両側縁に擦痕。	00ⅠA・3329	図版16－2

岩井・大沼遺跡　石器観察表（4）

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量					石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		全長(cm)	先頭部長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
380	石鏃	1.10	39.6	19.864	—	2.45	1.68	1.6	0.58	2.0	黒曜石(黒)	気泡多い。出来島産のものか。	00ⅠA・2776	巻首図版

遺物番号	種　類	出土位置			形　態	法　量				石　材(色)	備　　考	整理番号	図版写真
		X	Y	標高(m)		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
381	石錐	−2.64	35.43	19.502	—	2.96	0.57	0.6	1.6	黒曜石(黒)	出来島産以外のものか。	00ⅠA・2951	巻首図版

写真図版

1．Ⅰ－Ａ地区　調査風景(北東から)

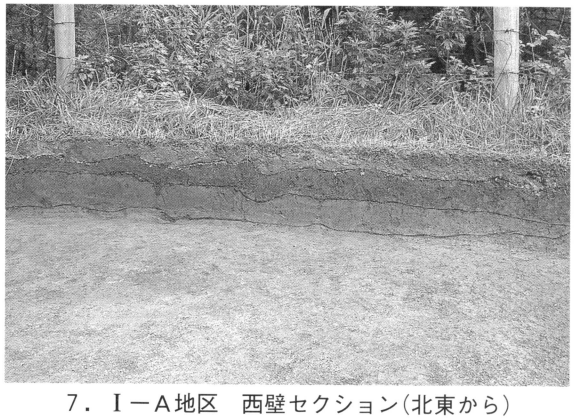
2．Ⅰ－Ａ地区　調査風景(南から)

3．Ⅰ－Ａ地区　遺物検出状況(東から)

4．Ⅰ－Ａ地区　遺物検出状況(南から)

5．Ⅰ－Ａ地区　調査区全景(北東から)

6．Ⅰ－Ａ地区　東壁セクション(西から)



7．Ⅰ－Ａ地区　西壁セクション(北東から)

8．Ⅰ－Ａ地区　北壁セクション(南から)

1．Ⅰ－Ａ地区東半　遺物出土状況（南から）

2．Ⅰ－Ａ地区東半　遺物出土状況（西から）

3．Ⅰ－Ａ地区西半　遺物出土状況（北から）

4．Ⅰ－Ａ地区東半　遺物出土状況（北から）

5．Ⅰ－Ａ地区　深鉢一括（遺物No.１）（東から）

6．Ⅰ－Ａ地区　鉢（遺物No.247）

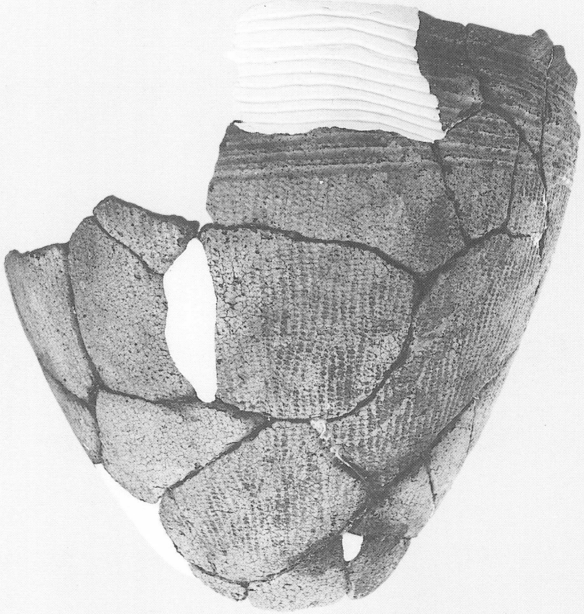
7．Ⅰ－Ａ地区　土版（遺物No.246）（東から）

8．Ⅰ－Ａ地区　倒木痕２（西から）

85

226

248



12

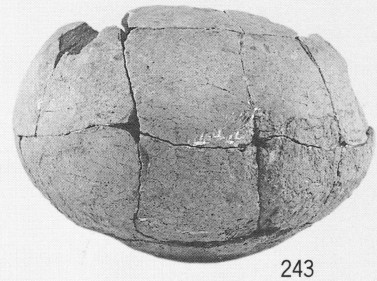
1

38

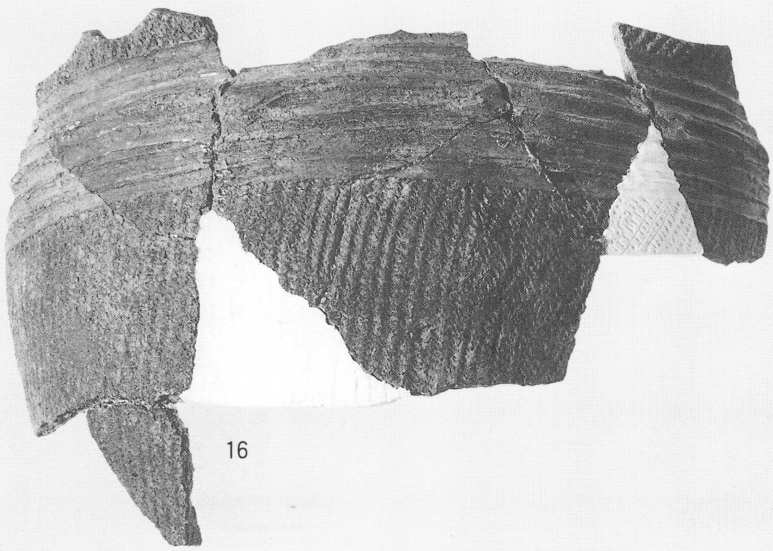
148

246

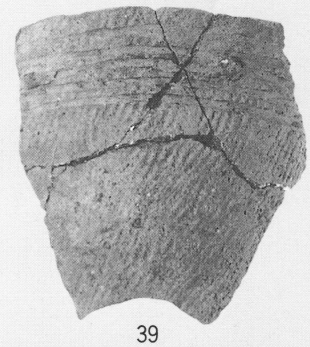
86



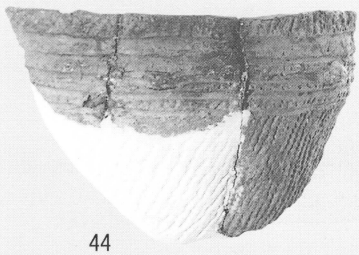
243



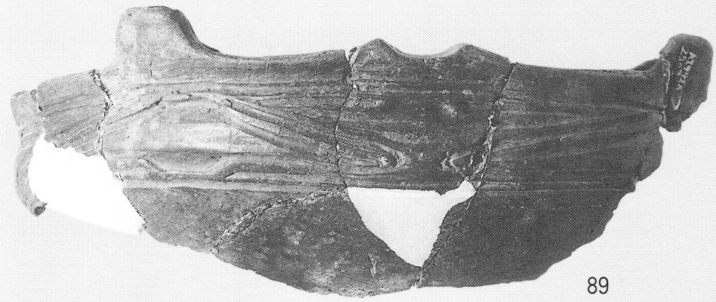
16



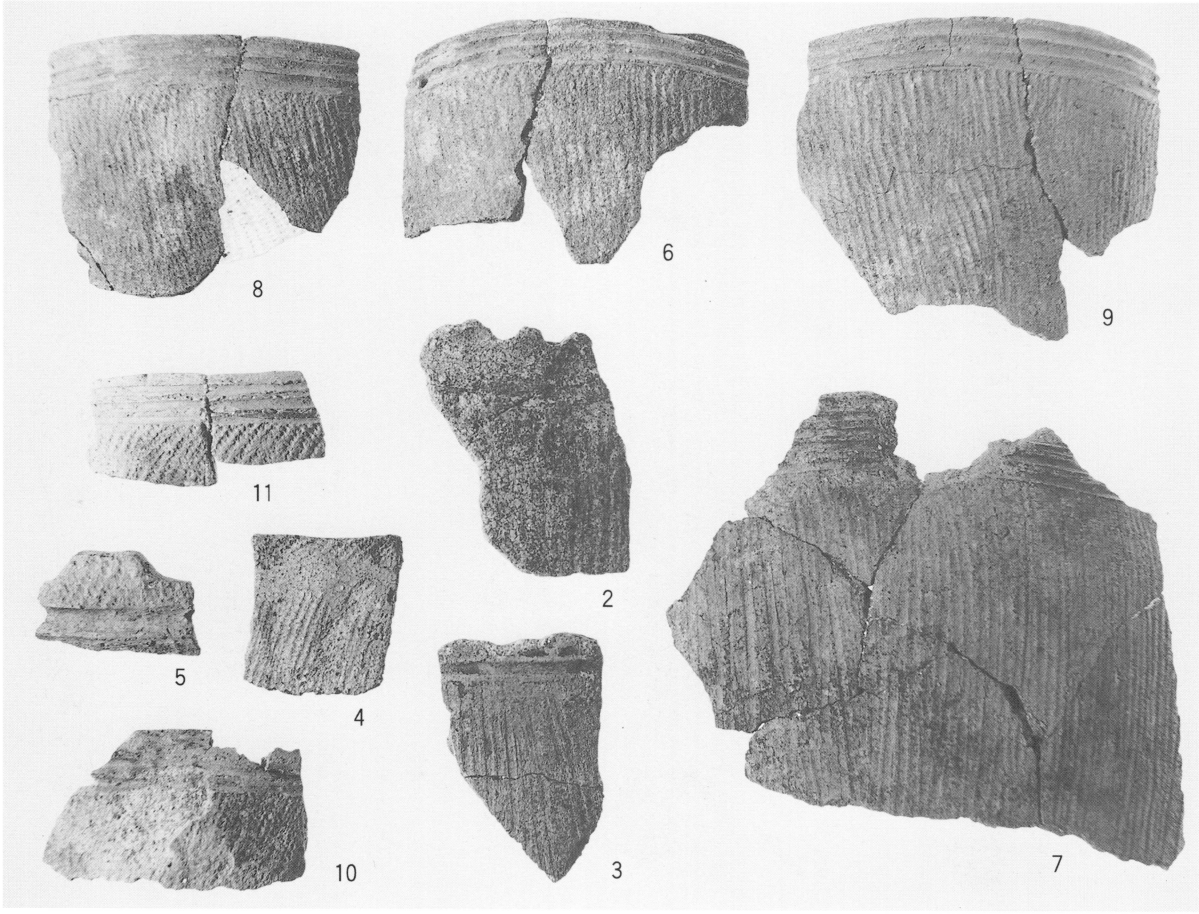
39



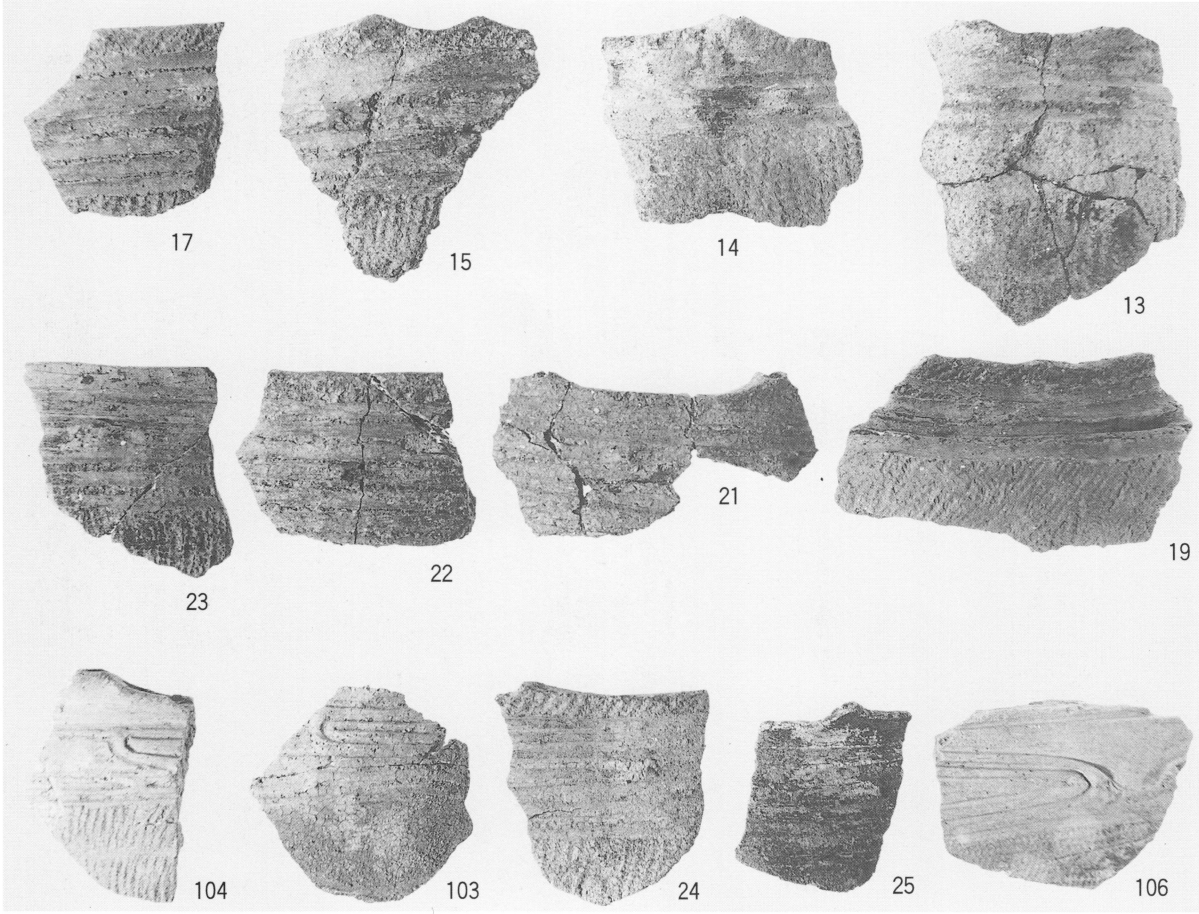
44



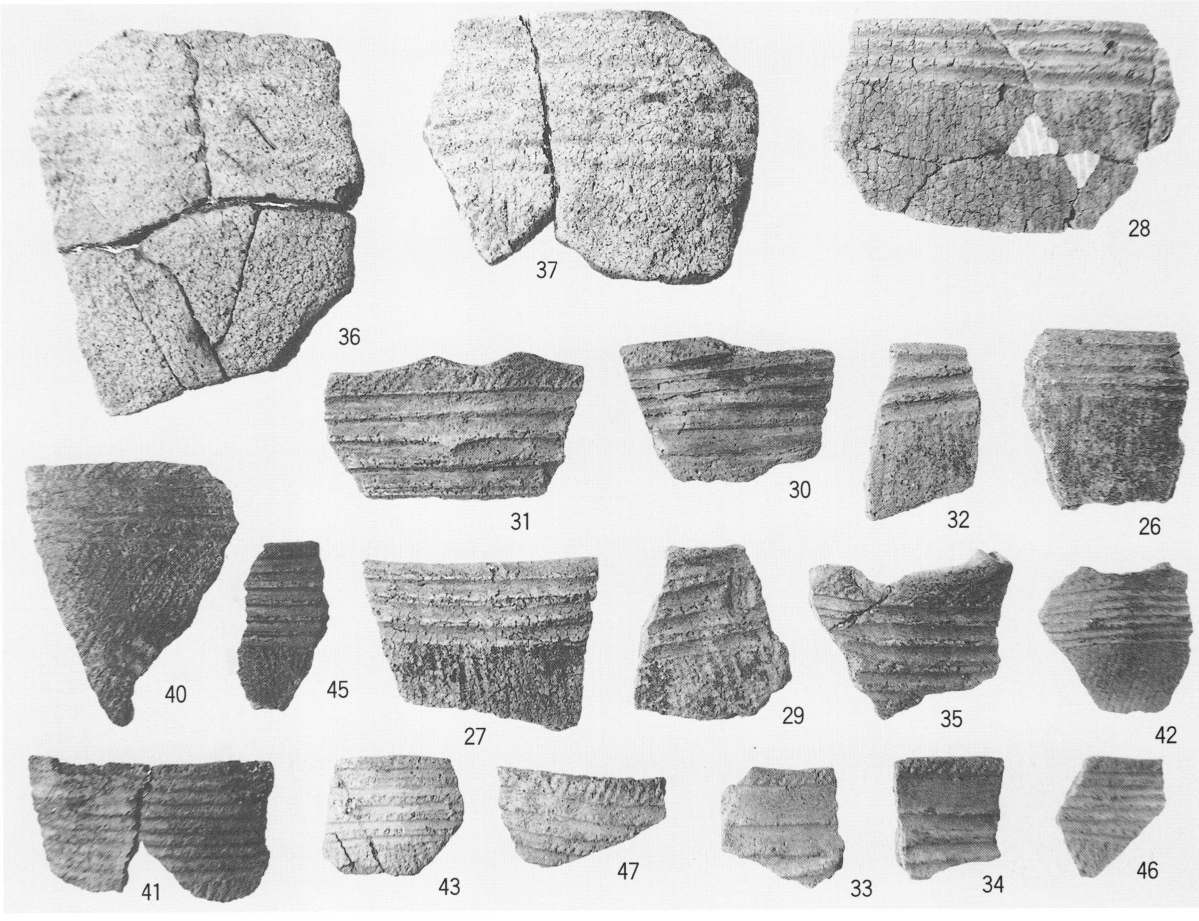
89



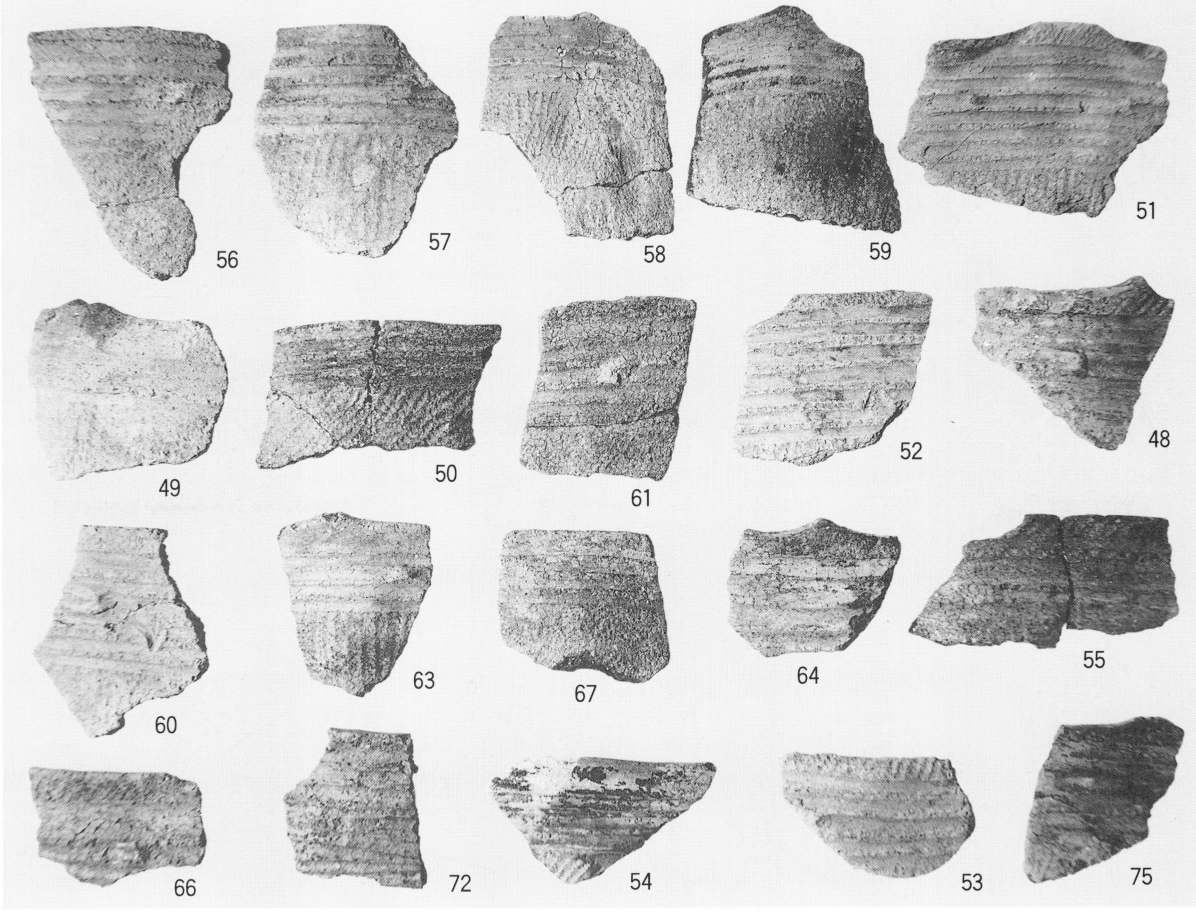
1



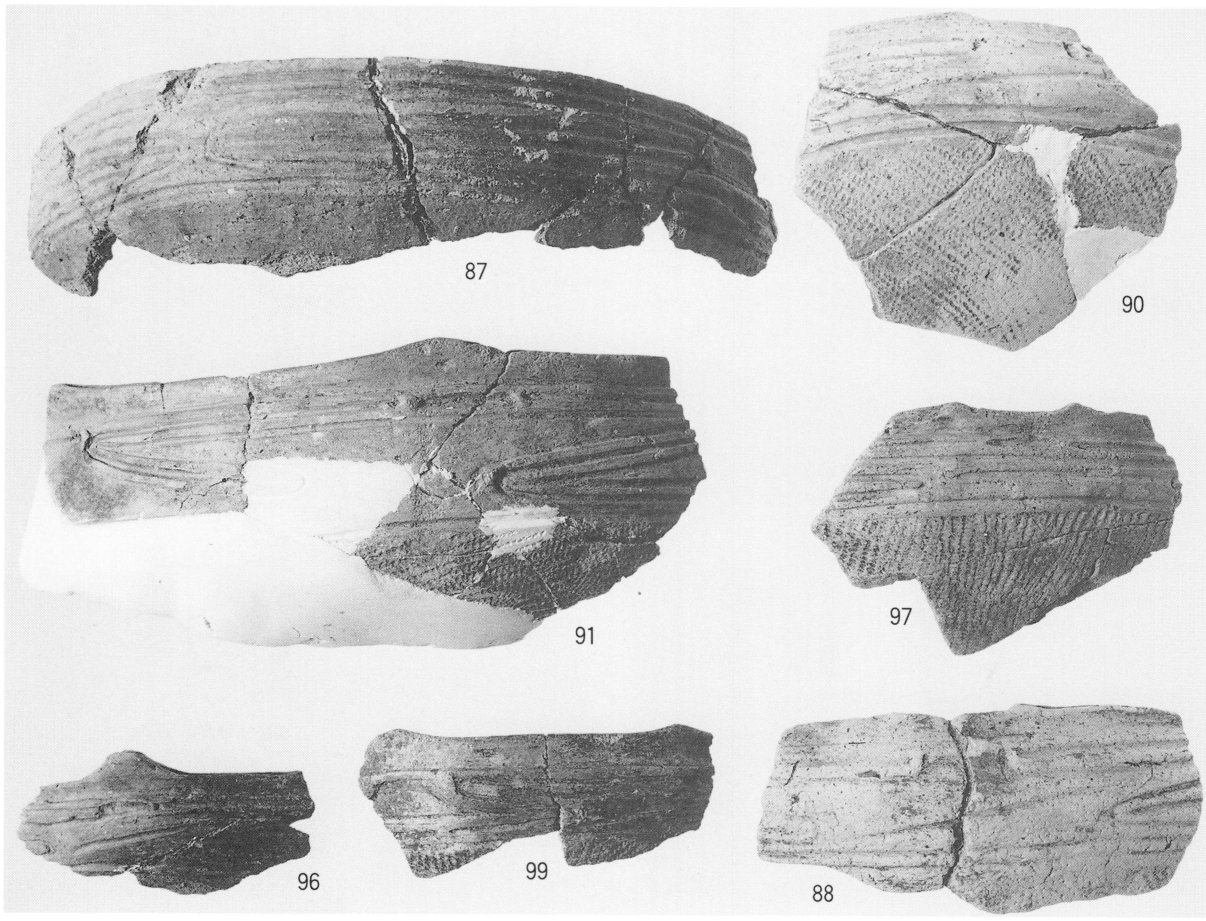
2


36
37
28
31
30
32
26
40
45
27
29
35
42
41
43
47
33
34
46

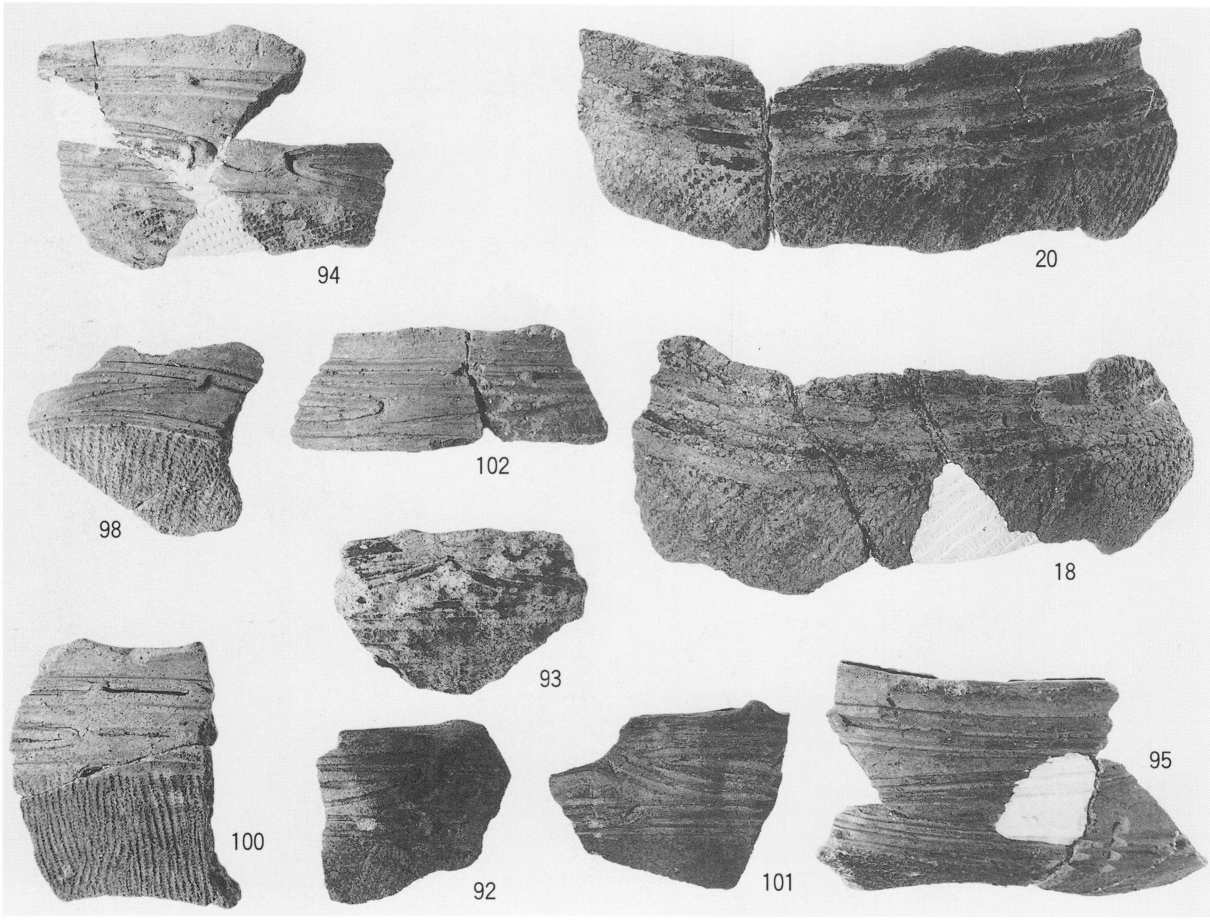
1


56
57
58
59
51
49
50
61
52
48
60
63
67
64
55
66
72
54
53
75

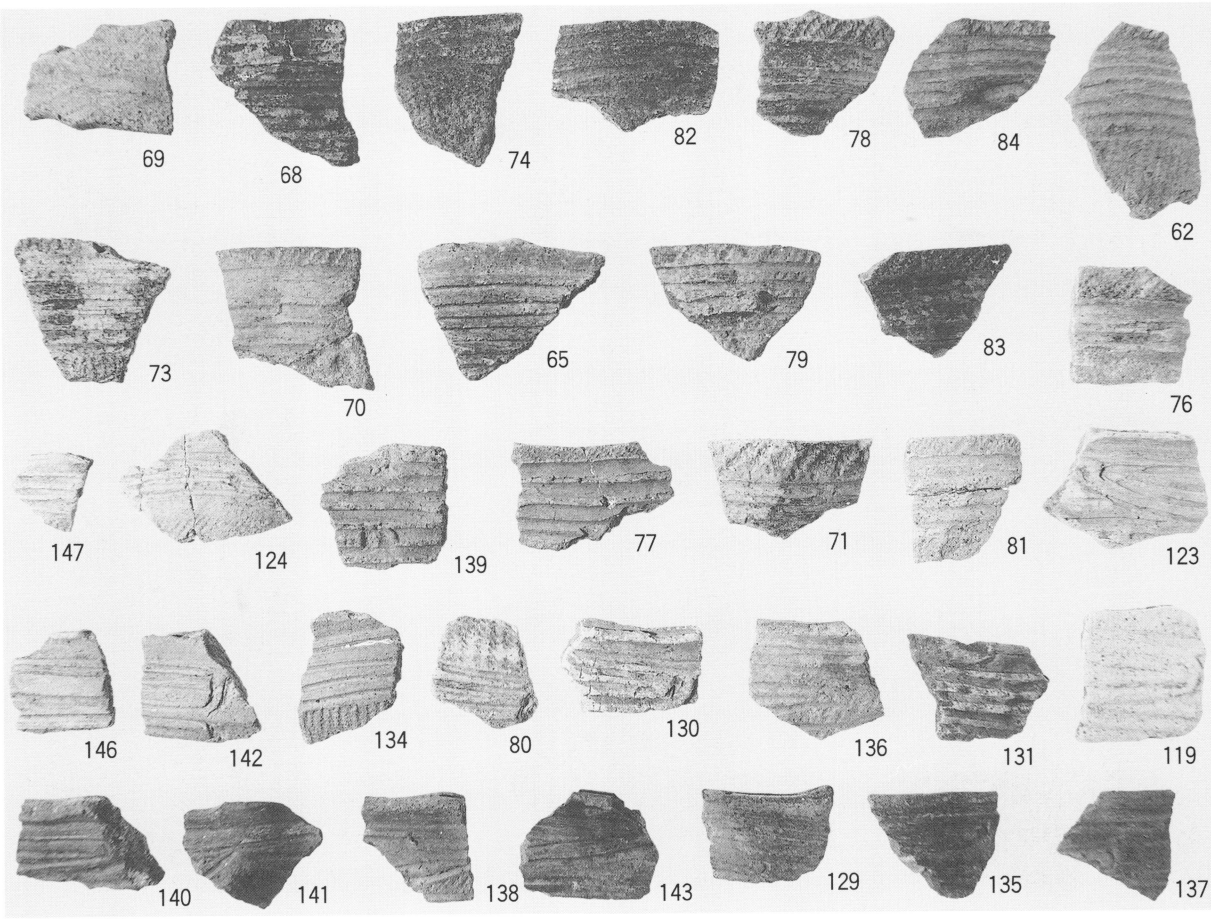
2



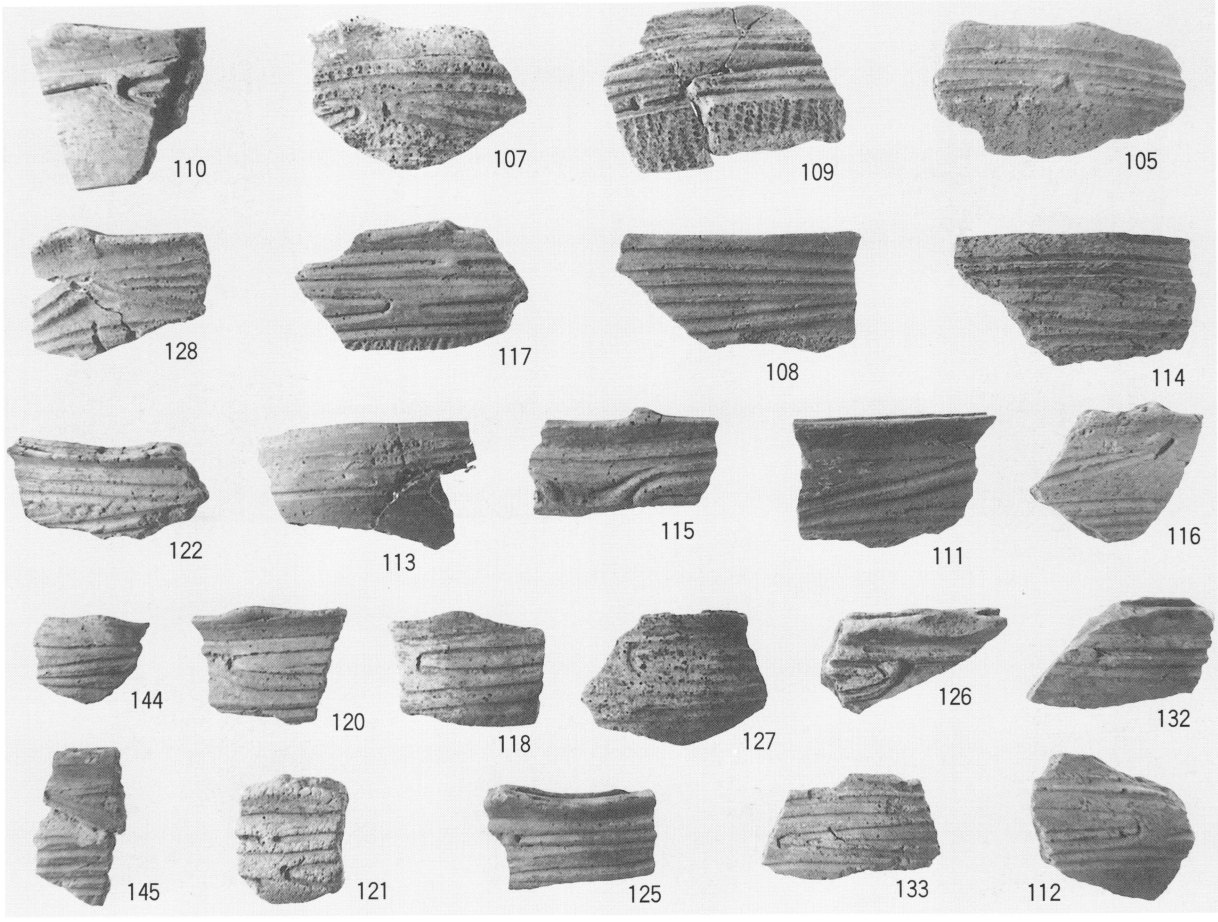
1



2

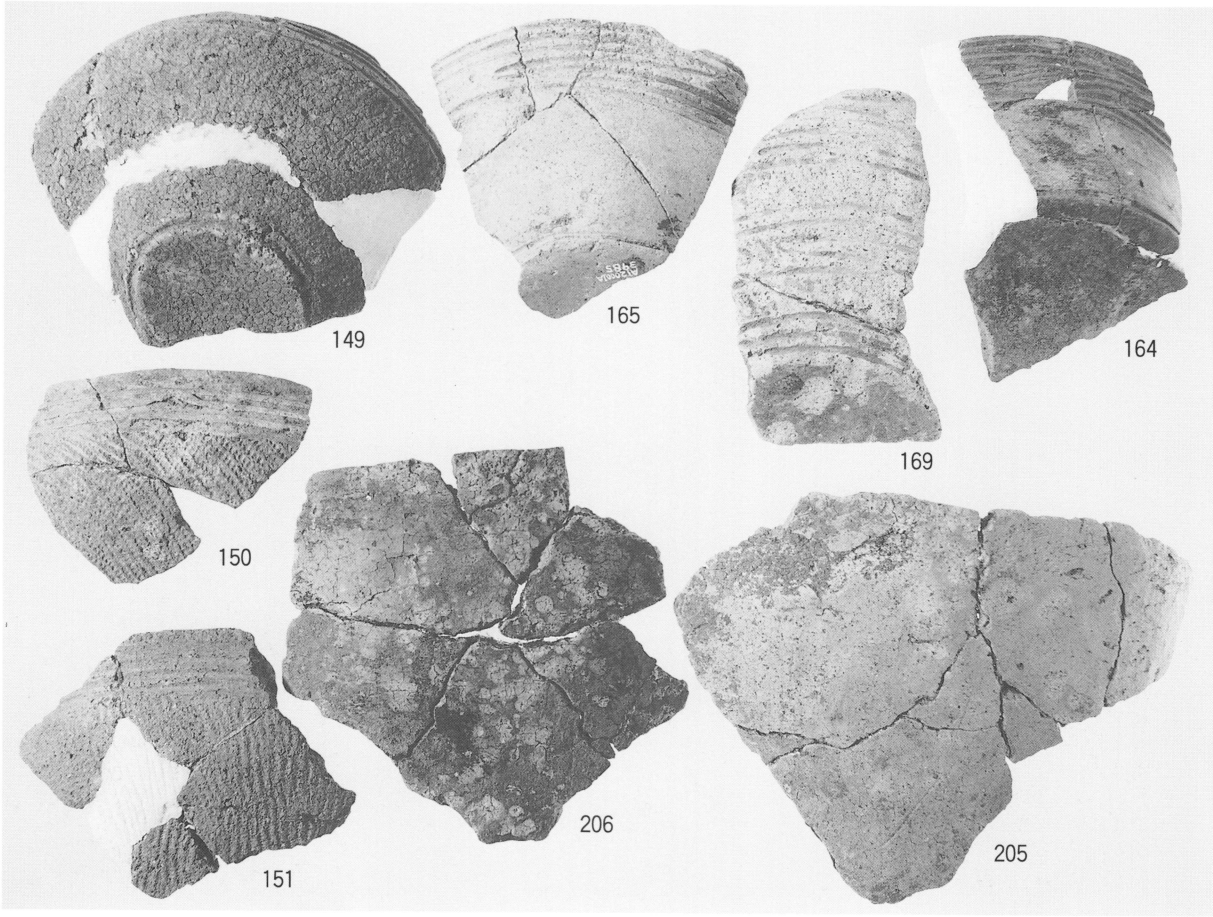

69
68
74
82
78
84
62
73
70
65
79
83
76
147
124
139
77
71
81
123
146
142
134
80
130
136
131
119
140
141
138
143
129
135
137

1

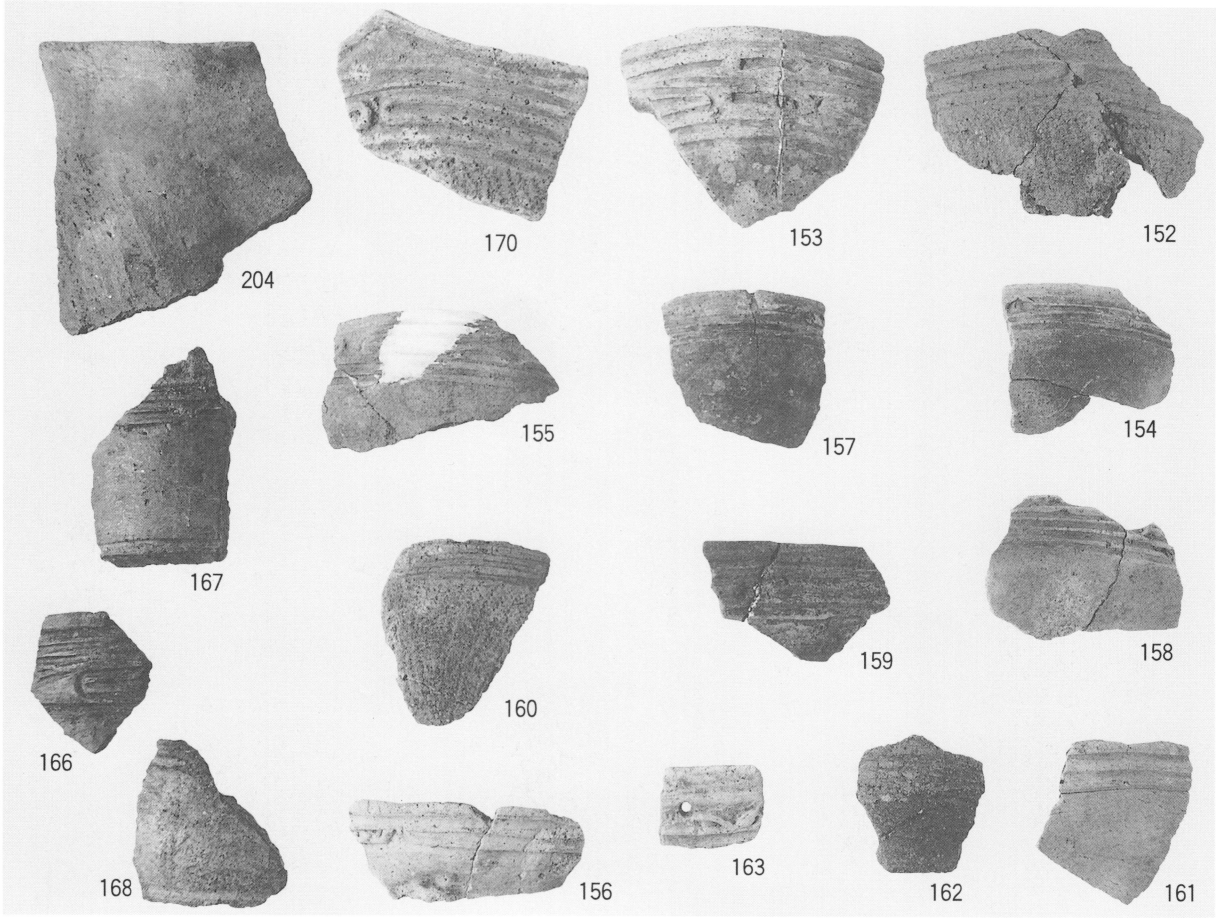

110
107
109
105
128
117
108
114
122
113
115
111
116
144
120
118
127
126
132
145
121
125
133
112

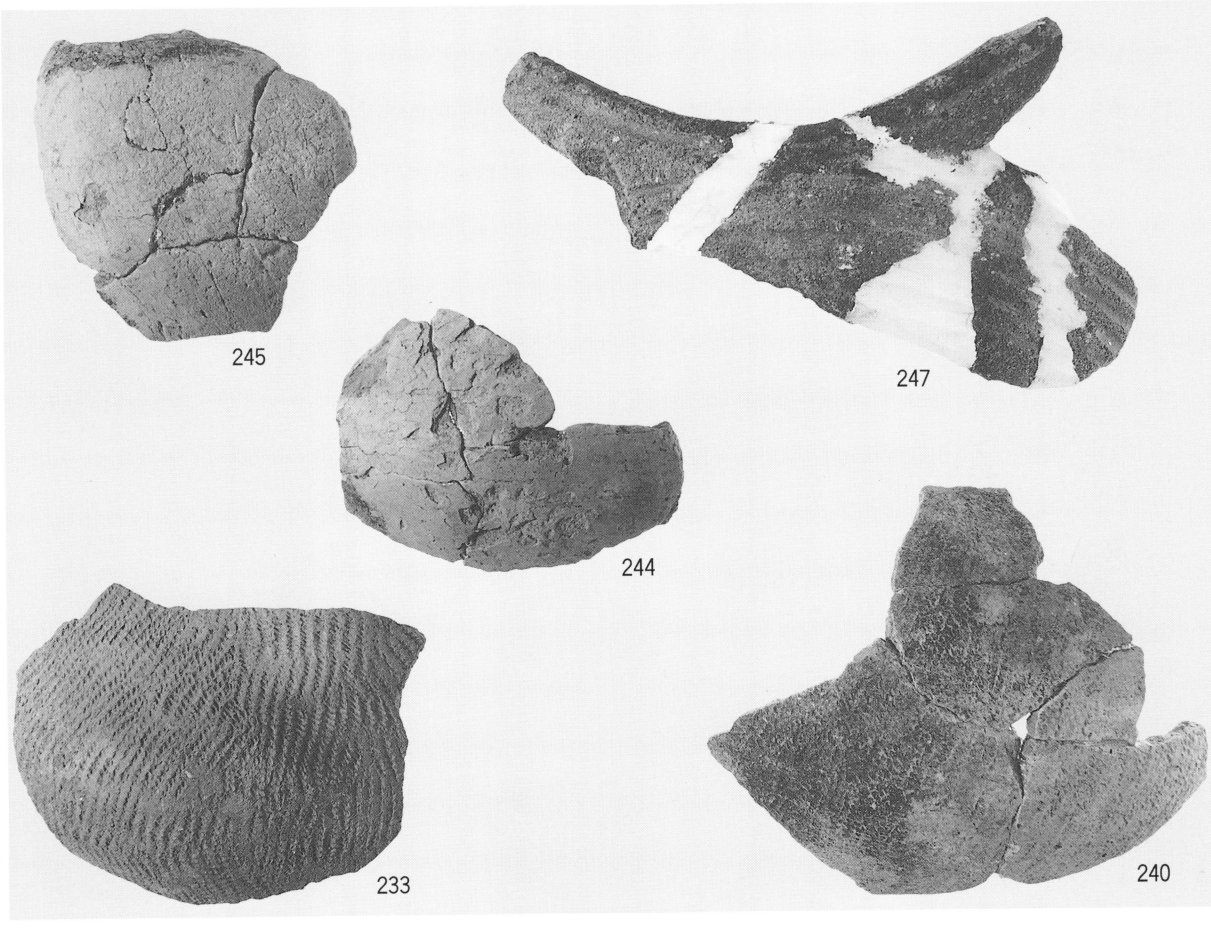
2

1

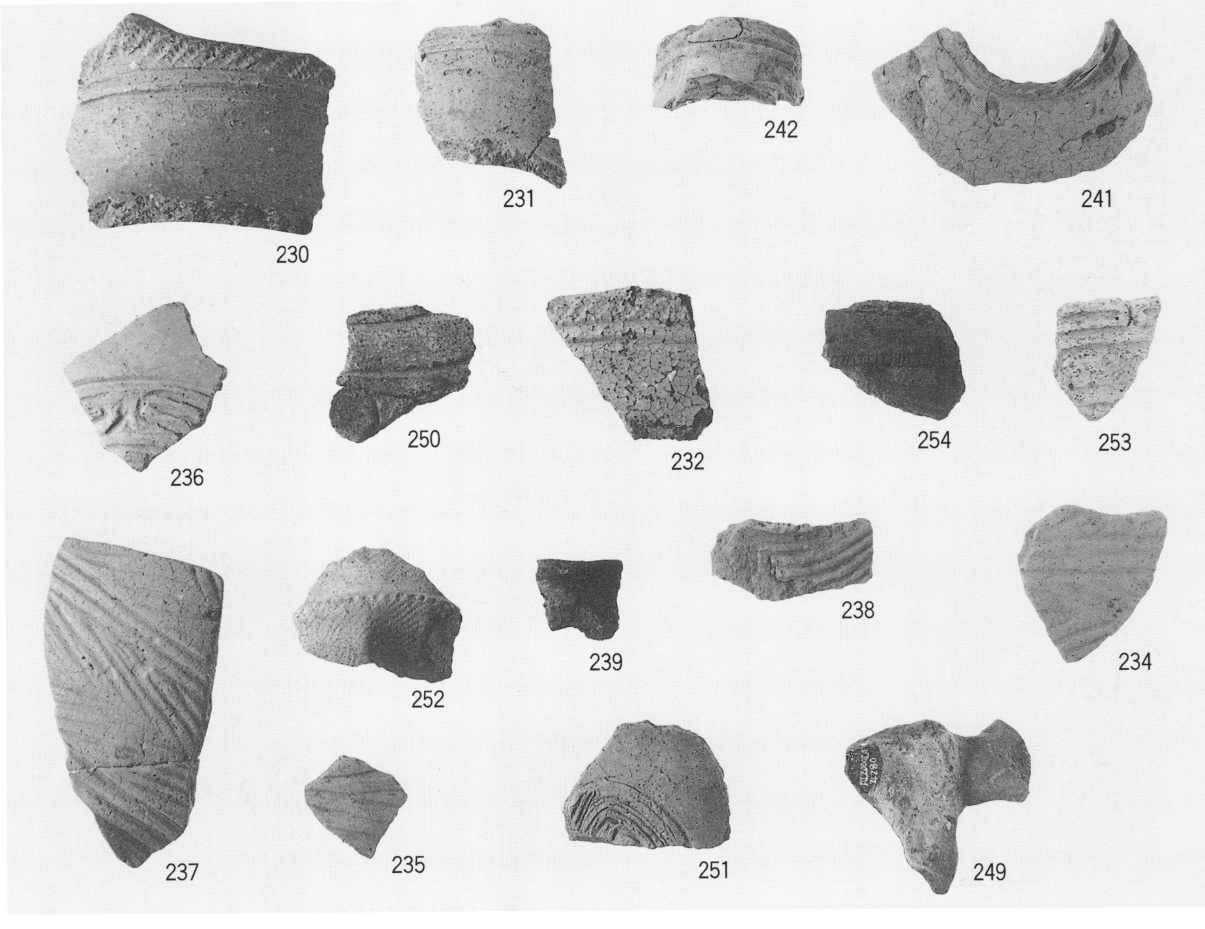

149
165
169
164
150
206
205
151

2


204
170
153
152
155
157
154
167
160
159
158
166
168
156
163
162
161

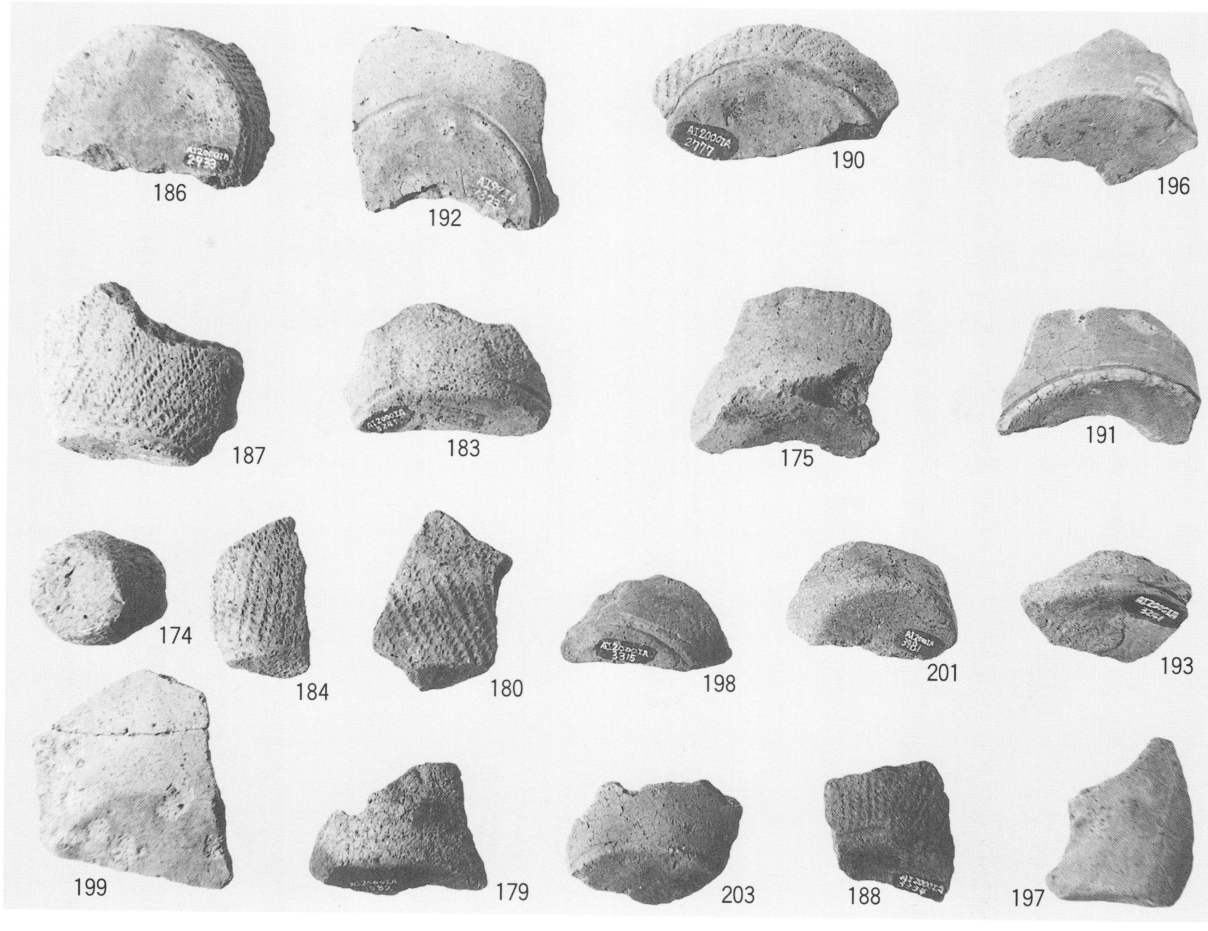

245
247
244
233
240

1

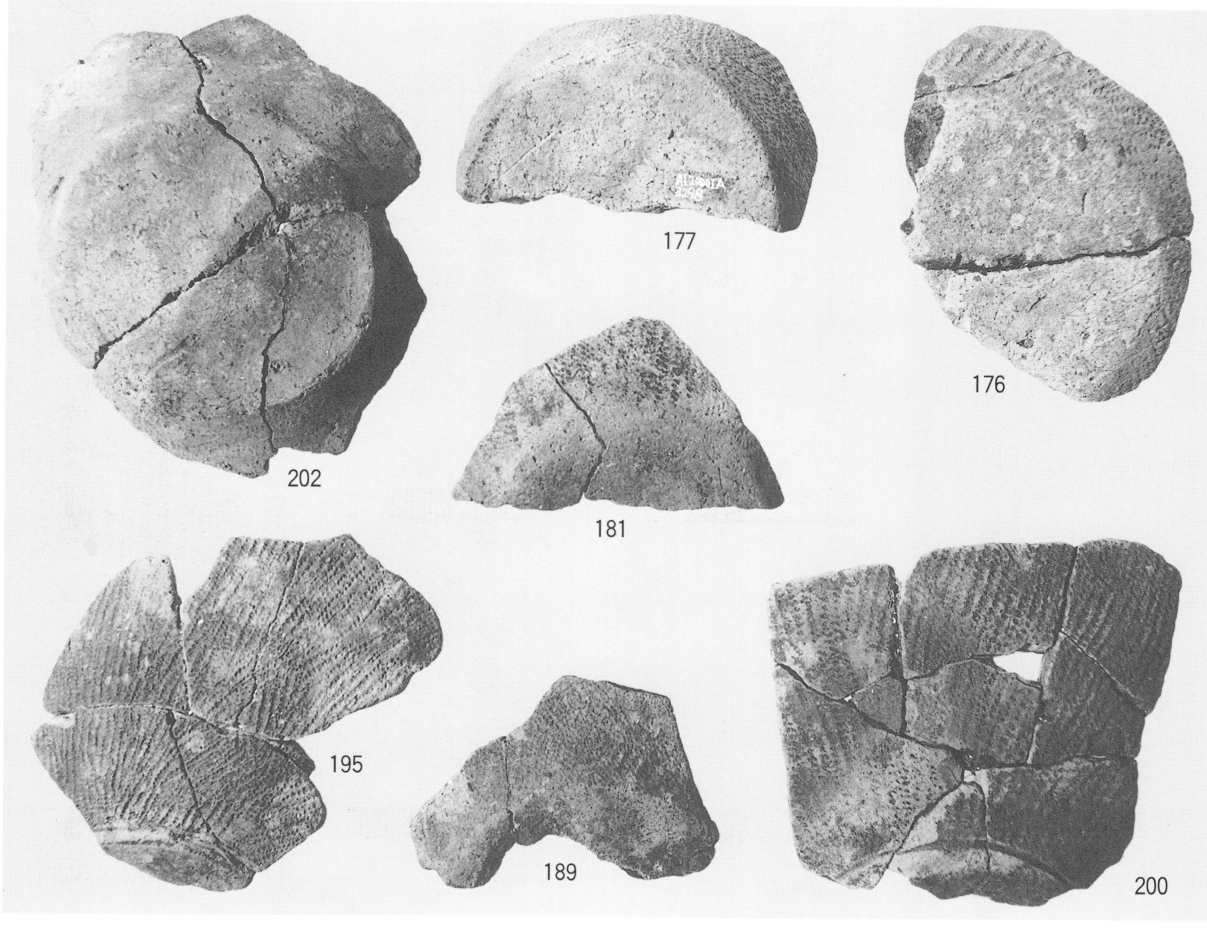

230
231
242
241
236
250
232
254
253
237
252
239
238
234
235
251
249

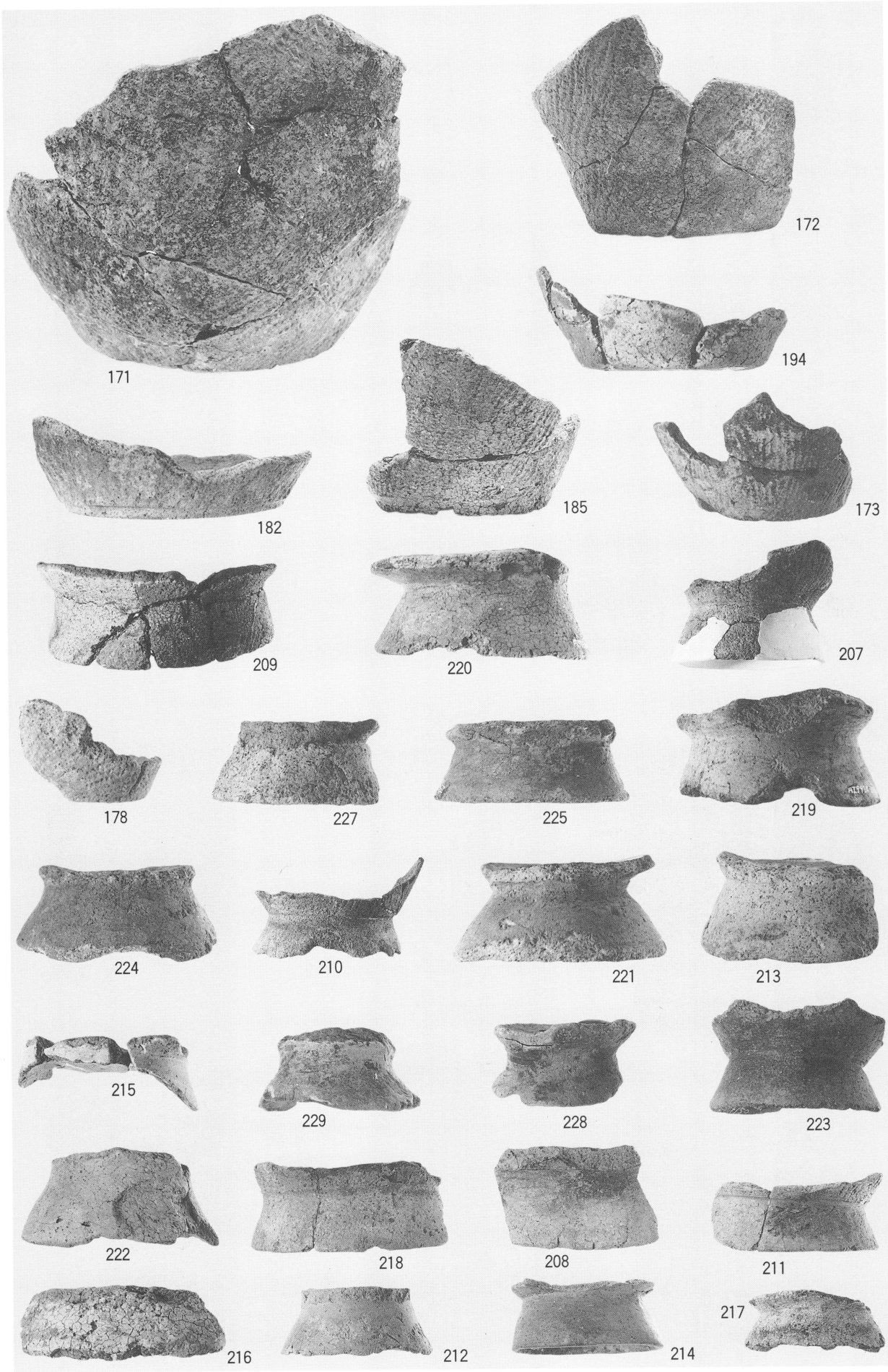
2

1

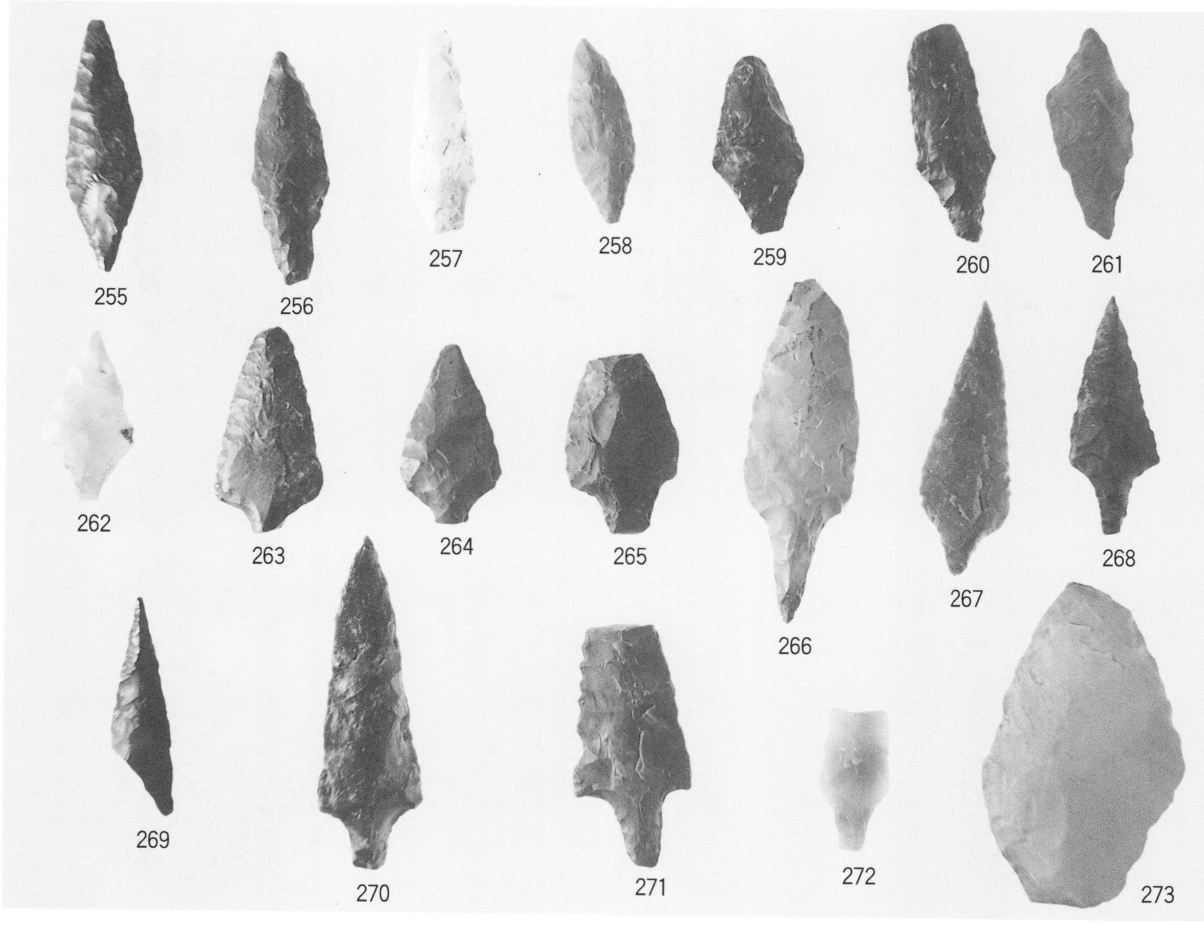

186
192
190
196
187
183
175
191
174
184
180
198
201
193
199
179
203
188
197

2

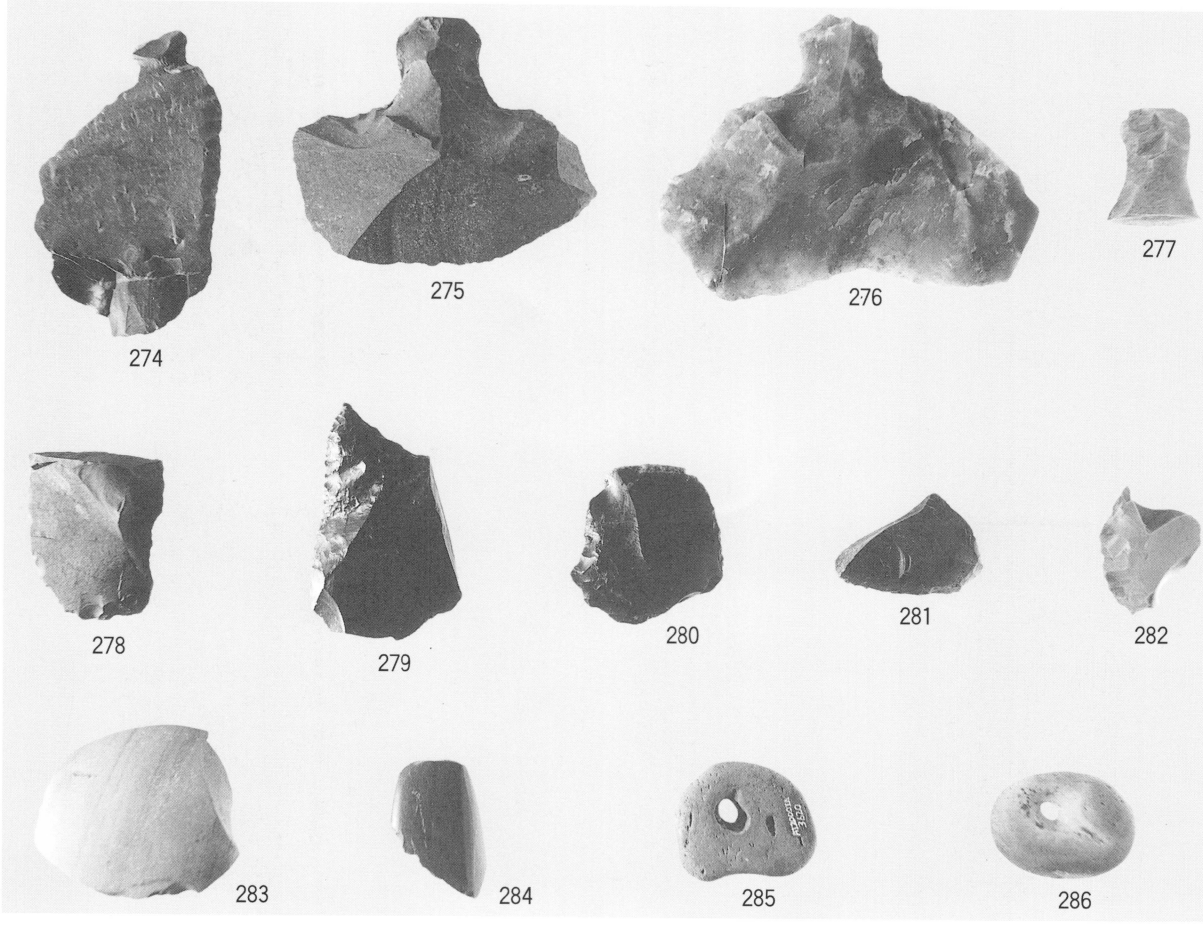

177
176
202
181
195
189
200

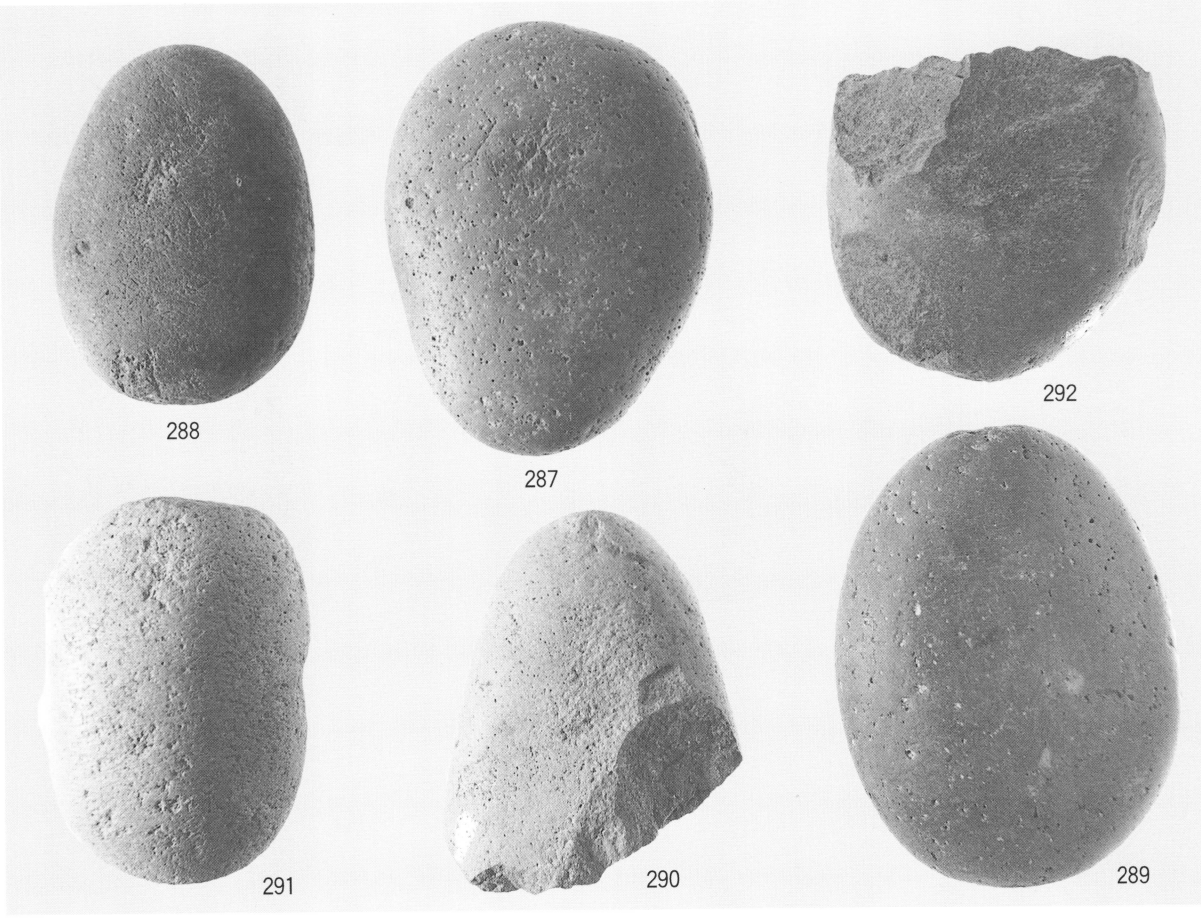

171
172
194
182
185
173
209
220
207
178
227
225
219
224
210
221
213
215
229
228
223
222
218
208
211
216
212
214
217

1

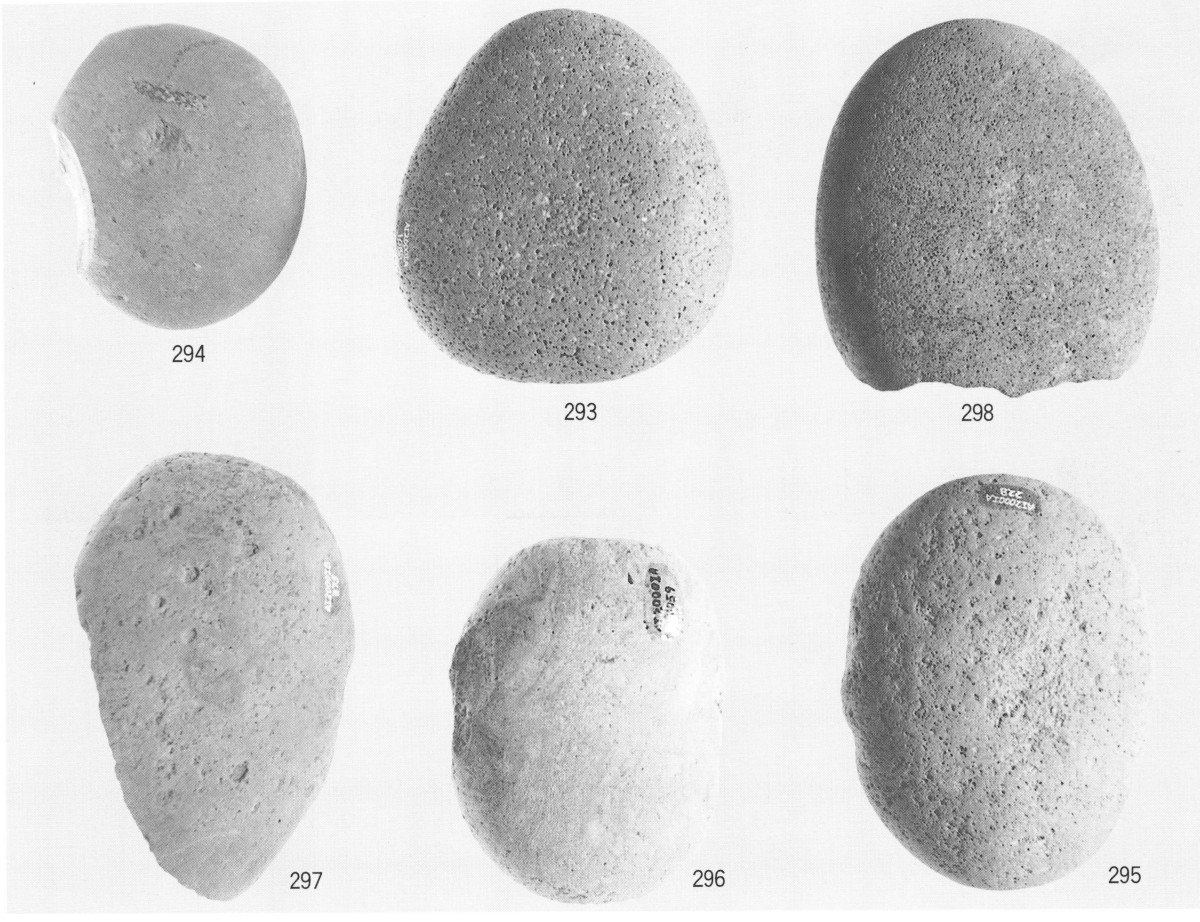

255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273

2

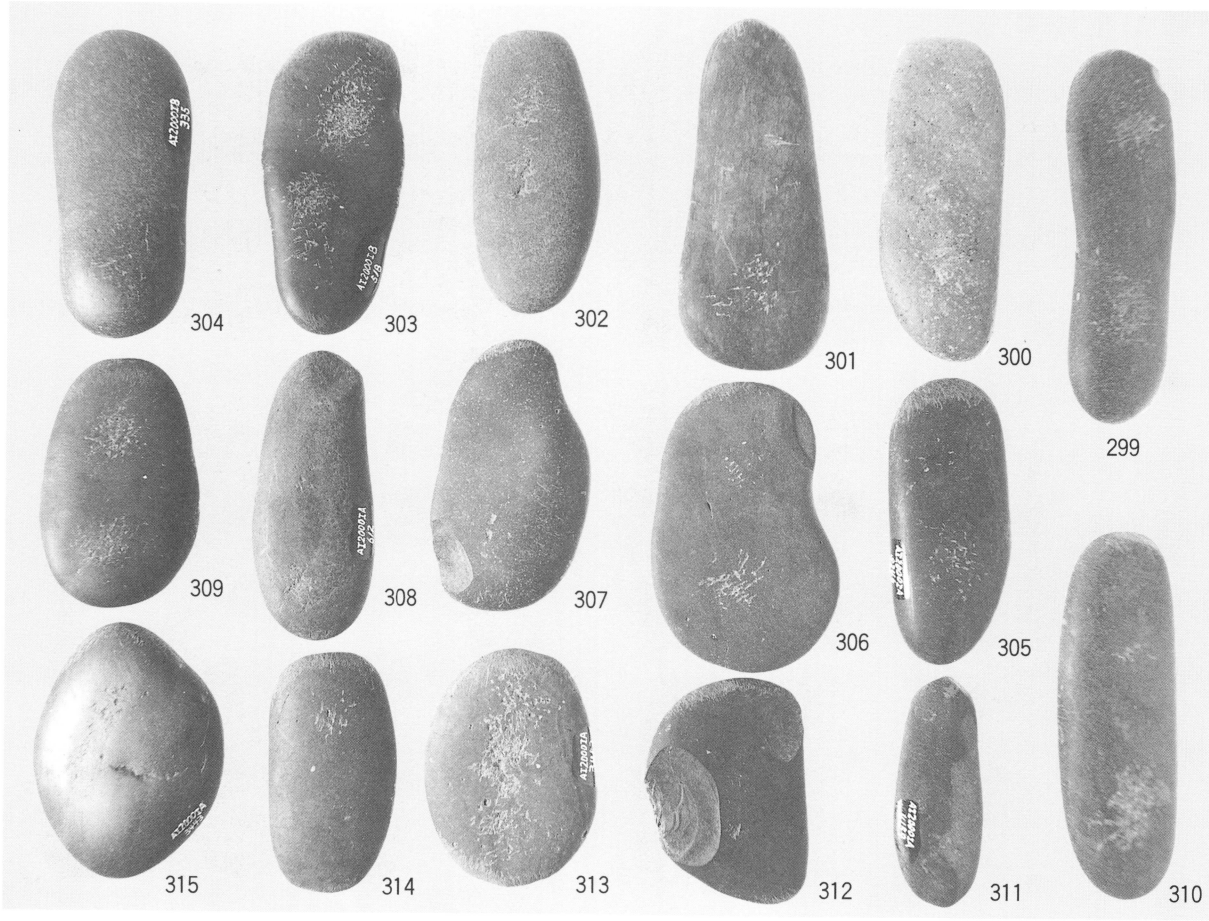

274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286



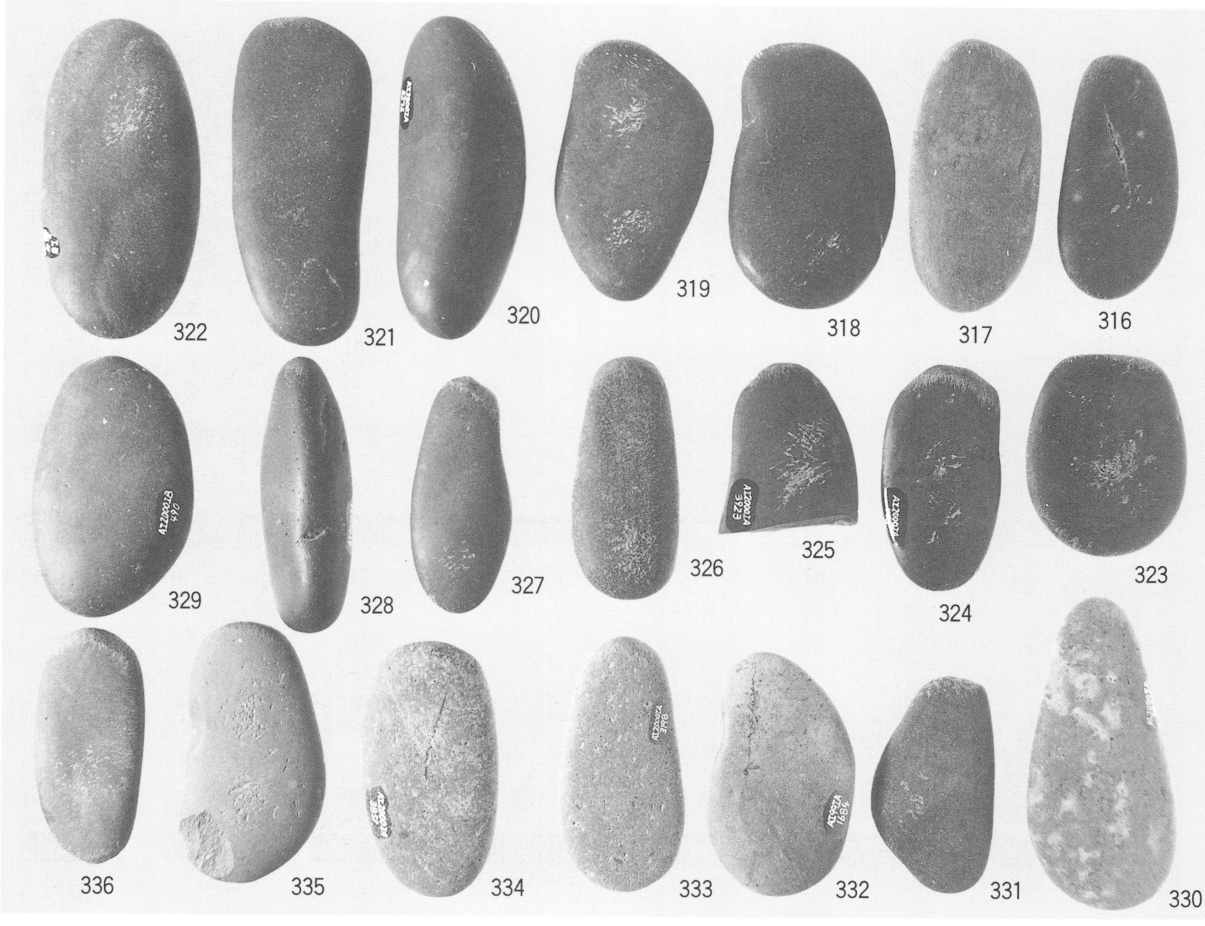
1



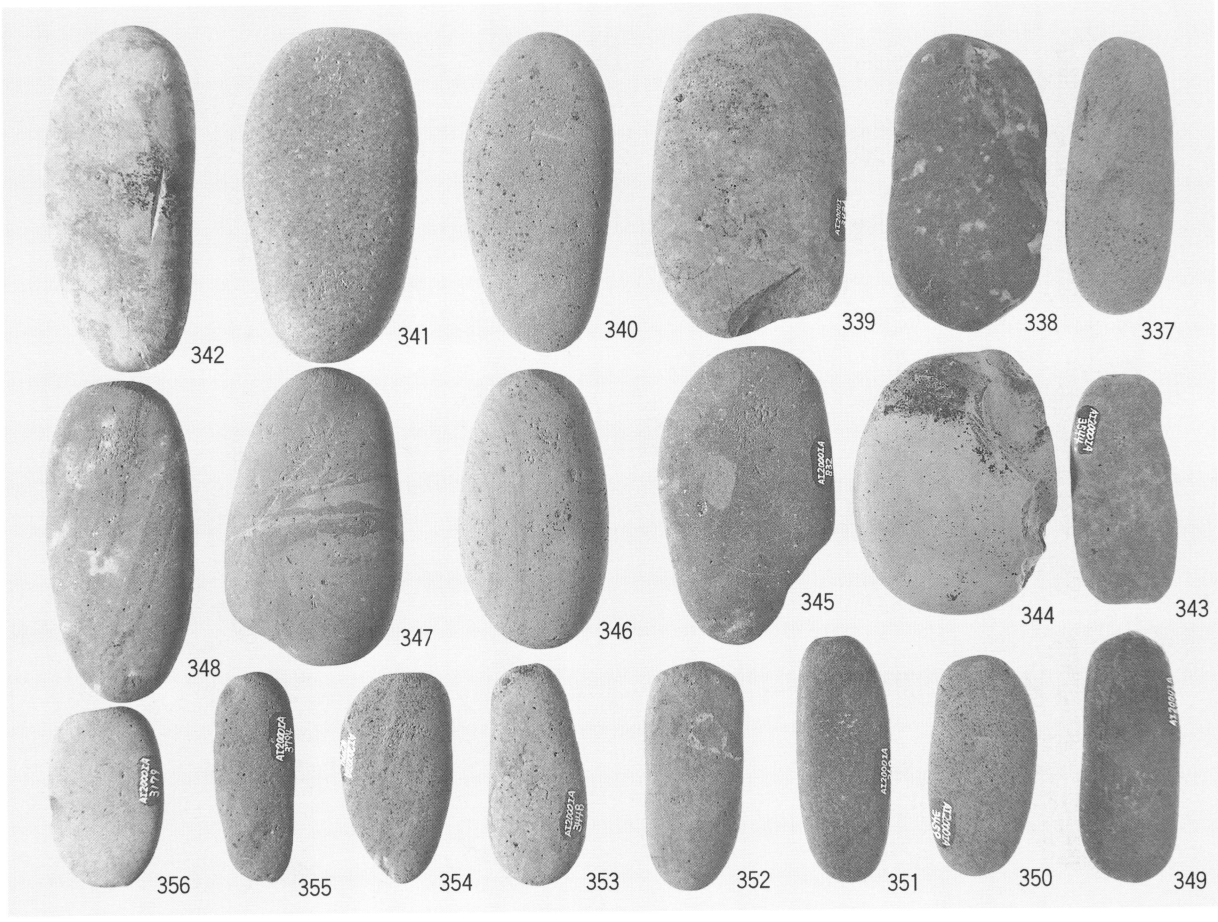
2


304
303
302
301
300
299
309
308
307
306
305
315
314
313
312
311
310

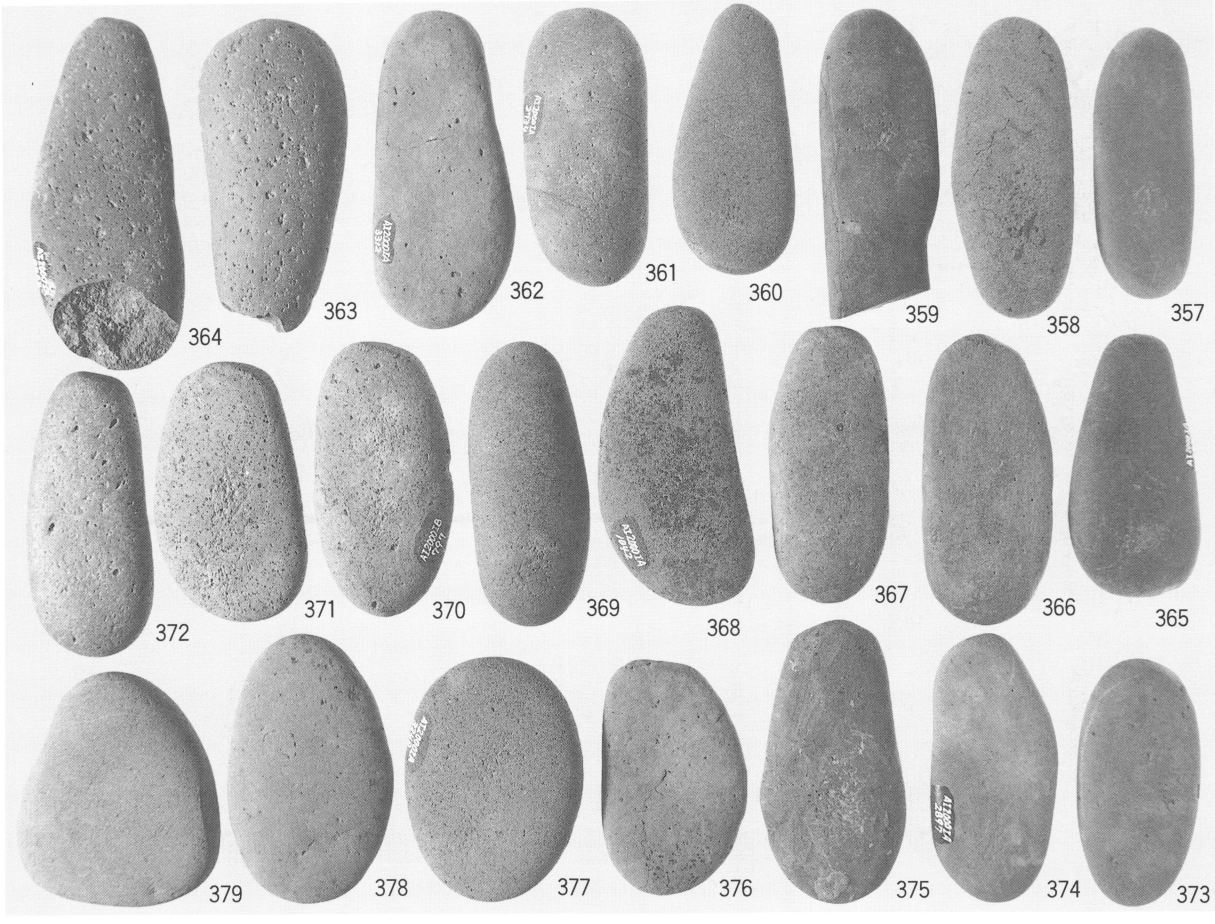
1


322
321
320
319
318
317
316
329
328
327
326
325
324
323
336
335
334
333
332
331
330

2


342
341
340
339
338
337
348
347
346
345
344
343
356
355
354
353
352
351
350
349

1


364
363
362
361
360
359
358
357
372
371
370
369
368
367
366
365
379
378
377
376
375
374
373

2

報　告　書　抄　録

ふりがな	いわい・おおぬまいせき
書名	岩井・大沼遺跡
副書名	県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	市浦村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	榊原　滋高，長利　豪美
編集機関	青森県市浦村教育委員会
所在地	〒037－0401　青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81－384
発行機関	青森県市浦村教育委員会
発行年月日	西暦　2001年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市浦村	遺跡					
岩井(いわい)・大沼(おおぬま)遺跡	青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81－1地内	02385	38011	41度03分32秒	140度21分10秒	試掘調査：19990513～19990623 本調査：20000703～20000728	試掘調査：200㎡ 本調査：900㎡	県営大沼地区水環境整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩井・大沼遺跡	散布地	縄文晩期	土器捨て場	縄文土器後期 縄文土器晩期末葉（大洞A′式）， 石器（石鏃・尖頭器・石匙・スクレイパー・磨製石斧・敲石・磨石・石錐） 土製品（土版・スプーン形製品）	

市浦村埋蔵文化財調査報告書　第12集

岩井・大沼遺跡

～県営大沼地区水環境整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告～

発行年月日　2001年3月31日

編集・発行　青森県市浦村教育委員会
〒037－0401
青森県北津軽郡市浦村大字相内字岩井81－384
TEL：0173－62－3751
十三湊遺跡発掘調査事務所
TEL：0173－62－3176

印　　刷　㈱青森オフセット印刷
〒030－0802
青森市本町2丁目11番16号　TEL：017－775－1431